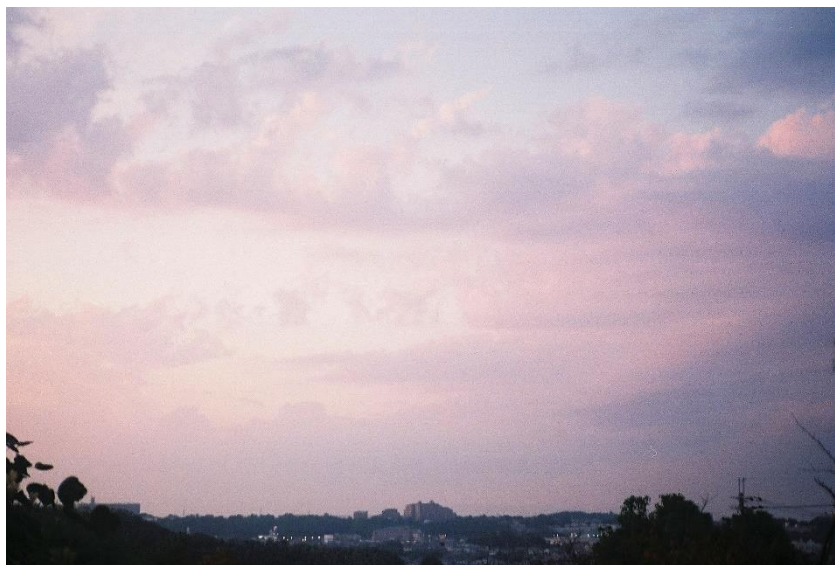




清教学園中学校 74 期 2 年「魅力的な人に取材する」作品集

語りが生まれるとき

Web公開に際し、本校生徒と取材相手の氏名・所属は、生徒が希望した架空のものに置き換えています。
また本文中の表現や誤字は、指導方針及び著者である生徒の意思を尊重し、敢えて原稿提出時のままにしています。

清教学園中学校 74 期 2 年「魅力的な人に取材する」作品集

語りが生まれるとき

語りが生まれるとき 目次

母の責任感	
自分を育ててくれた恩師、仕事を変えて	
針山の狼	
音楽を通して得られるもの	
魅力のある父親	
究極の自己中	
自分を動かすもの	
現代の差別問題と礼儀	
弟へのインタビュー	
尊敬できる理由	
何事にも意識することが大切	
セブンイレブン	
私の父	

聞き手 〓 高橋冬雪	6
聞き手 〓 佐藤和馬	14
聞き手 〓 芝袋優太郎	26
聞き手 〓 坂本優菜	36
聞き手 〓 佐藤健一	46
聞き手 〓 尾崎爽	54
聞き手 〓 早坂タクト	66
聞き手 〓 花咲千恵	74
聞き手 〓 樋田大和	88
聞き手 〓 城ヶ崎華	96
聞き手 〓 藤崎風沙	104
聞き手 〓 永野薫	114
聞き手 〓 小田彩子	124

知らなかった母の魅力

人生の履歴書

固執した見方から柔軟な見方

無題

勇気のある兄

俊兄ちゃんの本当の魅力

友達と僕の成長

憧れから決意へ

先輩のすごさ

相似の性格

家族愛に溢れる母

夢は後からでも叶う

あとがき 語りが生まれるとき

あとがき はみだす・はみだされる経験

聞き手 〓 東村美羽

聞き手 〓 辻村琴寧

聞き手 〓 石原夢菜

聞き手 〓 山本愛

聞き手 〓 前野夏樹

聞き手 〓 宮崎実

聞き手 〓 川岸太郎

聞き手 〓 根屋川蘭

聞き手 〓 佐久間ユイ

聞き手 〓 荻野彩夏

聞き手 〓 新名ほのか

聞き手 〓 関口春歌

授業担当 山崎勇氣

授業担当 南百合絵

母の責任感

聞き手 高橋冬雪

取材の動機

私が取材相手に選んだのは自分の母親だ。出身は岡山にある島、仕事は看護師。料理のセンスが壊滅的な私の母方の祖母と違って、母の料理は食材のバランスも良く美味しい。その上最近は大学で、看護学校の先生の免許を取るために仕事と両立しながら夜遅くまでレポートを書いたり、オンラインで授業を受けたりしている。

母は作業の効率が良く器用だが、学生の頃真面目に勉強をしていたわけではなく大人になってから後悔したらしく、勉強ができる環境が整っているうちに頑張っておけと話していた。

子供の頃はあまり贅沢で苦しい思いをすることがあったため、自分の娘にはそうなってほしくないと言っていた。

メンタルも気も強く頼れる性格を活かし、職場でもしっかりしていて周りを引っ張っているようで、ノリも良いので職場の人と仲良くしているというような話をよく食卓で聞く。祖母のお世話や職場でのトラブルによく悩まされているが、振り回されて落ち込むことはめったにない。

複雑な人間関係、私には計り知れないほどの忙しさなど、ストレスが沢山あるような仕事に勤めて

いるのにも関わらず、毎日仕事から疲れて帰ってきては家事をこなし、私の学校であったことや相談事などを聞いてくれる。母親としての役目も果たすかつこよさに憧れ、尊敬するとともに「何故そんなに頼もしく強いのか」と疑問に思った。

取材依頼

流石に仕事から帰った後の夕食の後だと、普通の会話ならともかく仮にも取材なので、疲れがたまっているであろう時にするべきではないと考えた。そこで私は仕事も無く完全に休みの日に会話の流れで取材することにした。取材の相手については本人に話してあったが、いつやるかは言っていなかったため、取材だということは後で話そうと決めた。あらかじめ取材だと言ってしまうと、緊張して素のまま話す事が出来ず、そして本人の魅力について深くまで探ることも出来ないと考えたからだ。

取材概要

日時…2023年8月19日 6時30分～6時50分

場所…家のダイニング

取材した方…S会病院 高橋真冬さん

自分との関係…親子

インタビューが始まるまで

休みの日の夕食の時間、母がいつも話している、最近の仕事であつた嫌なことや面白かつたことなどを父と聞き、私の友達との話やたまに聞かせてくれる父の仕事の話など色々と話したのち、父が皿洗いを始めた頃合いに母に取材の質問をすることにした。

看護師という仕事

まず私は、看護師を目指そうと思つたきつかけやその仕事に就いてよかつたこと、辛かつたことなどを尋ねた。思い返してみると、今まで仕事について様々なことを聞いてきたのにも関わらず、何故看護師になろうと思つたのかを聞いたことがないと気づいたからだ。

私「お母さんってなんで看護師になろうと思つたん？」

母「うーん高校出たからクリニックに就職したんやけど、病院が忙しくなつてきた時に看護助手も任されたんよ。看護師の指示聞いて色々するような」

私「そうなんや」

母「どつちかつていうと責任のある仕事とか指示する仕事したかつたから、そしたらもう看護師ならうかつて」

私「看護師になってよかったこととかある？」

母「色々知ってるから家族とかが病気になる前に予防できるとかな。なった場合どんな対処したらいいかとか」

私「知識を活かして家族を支える？」

母「そうそう」

私「逆に辛かったこととかは？」

母「そりゃ女の世界やから人間関係とかも色々あれやし…そもそも人の命を預かってるからミスしたらそれなりに自分の気持ちもしんどくなるしな」

母の思う強い人

次に私は、母の思う「頼れる人」や「強い人」とはどういうものなのか、ということを探ねた。私が母に対して思っている「頼れる」や「強い」という言葉は、母にとってどういう概念のものなのか、どういう人に対してそう思うのかが気になったからだ。

私「どういう人が頼れるなーとか強いなーって思う？」

母「うーん…強いなーっていうか行動を自分から起こせるとか、ちゃんと自分の非を認めて謝れるとか」

私「芯がある人とか」

母「そう、自分の意見をしっかりと持って流されへんのかな。あかんことはちゃんとあかんって言える、例えばいじめとかに『それってあかんのちゃうん』って」

私「なるほどね：頼れる人ってどんなん？」

母「頼れる人かー」

私「頼れるのと強いのは違う？」

母「そら違うんちゃうん？頼れる人ってのは安心感があるとか、ちゃんと守ってくれる人とか」

私「『強い』っていうのがある上でみたいな」

母「そんな感じ」

母の魅力

最後に、私の思う母の頼れるところや強いところを伝え、二人で話し合うことにした。

私「お母さんって今もやけど小さいころとか私が体調崩したときにしっかり支えてくれたり、友達とかで悩んだ時とかに話聞いてくれて解決しようとしてくれたりしてめっちゃ頼れるし、仕事でも職場仲間のトラブルに巻き込まれがちやけどちゃんと向き合ってお父さんとかにも相談して毎回解決す

る所とか強いなって思うんやけど」

母「そりゃ問題解決していかな前に進まんし、逃げとつてもあかんやろ」

私「こんなこと言われたーってお母さんに相談したとき、よく『そんなんほつとき』って言うけどお母さんってなんか言われたときどうするん？」

母「そら馬鹿にされてむかついたら反撃しまくるけど（笑）でも最近は言われた時向こうの気持ちも考えてみようかなって思ってる」

私「どうやったらそういう強い人になれるん？考え方とか」

母「他人やったら、まあ家族でも外国とかのじゃなくて人それぞれの異文化っていうのは絶対発生するから。やっぱり自分が思ってる正解はその相手にとつても正解とは限らへんしそういうのを理解しようとするのが良いんじゃない？」

私「ちようど学校の弁論大会でそういうの書いてるわ」

私「人それぞれ価値観とかが違うからそれを受け入れたら成長するよりみたいな」

母「そういう事よ」

私「昔と比べて自分変わったなって思うことある？」

母「そりゃあいっぱいあるよー」

母「やっぱ年齢重ねてきたから経験もめっちゃしてるし、今は家庭も持つてるし子供もおるからちゃんと守っていかなあかんって思うようになったしそりゃ変わってる。そうやないと守っていかれへん。なああんた」

と、流れで隣に座っていた父にだる絡みする母。先ほどの深い話との温度差に風邪をひくところだった。

取材を終えて

芸人のネタの真似をしたり、ノリが良く冗談もよく言ったりする面白い母と真面目で深いことを話し合うのは好きだったので、母の過去を知れた上に深い話を聞き、話し合えて楽しかった。「逃げとつてもあかんやろ」という真っ直ぐな言葉から、私にとって母とは一番身近な「頼れる人」であり、憧れの人でもあると気づいた。そんな母と話し合うことで自分自身の学びや成長にも繋がるといいなと思った。

母が看護師になるために努力していたのは知っていたが詳しくは聞いていなかったので、「責任感のある仕事をしたかった」と聞いて、母の頼れるイメージは責任感から来ているのかと考え、また母の尊敬するところが増えたいい機会だった。



自分を育ててくれた恩師、仕事を変えて

聞き手 佐藤和馬

取材の動機

私が取材しようとしている人は菅原拓馬先生だ。

私は野球部の通常練習が終わった後も、自主練習を続けている。もちろん人数は少ないのでノックもキツイしバッティングなどは出来ない。じゃあ意味がないと思う人もいるだろうがその際に私は打者との駆け引きや投手の投げてくる球種などを予測する練習を行っていた。

追い込んだ側としての気持ちや追い込まれた側の気持ちなどを予測してそれを考えていつも野球に望んでいる。相手の立ち位置、ファールボールの感じ、見逃し方、ボールの伸びなど相手と自分の調子を比べて相手がなにを投げてくるかを予測する。このような読心術を教えて下さった菅原先生には感謝している。

小学生の野球ではストレートしかないが、中学生からは変化球がある。それでも今、対応できているのはそれまでで習ってきたものがあるからだろう。

しかし、菅原先生とはずっと練習をしているわけではなかった。時には一緒にゲームもする仲だ。プライベートの話しもあるし共感してくれたり、一緒に笑いあってくれたりするので私はそんな菅原

先生が大好きだ。だから野球の話も多くなり自然と内容も濃くなっていたのだろう。

そんな菅原先生はかつて高校生時代にS高校で甲子園に出場してホームランを打ったり、準優勝したりと華々しい活躍をした高校球児であった。だから効率よく行いやすい練習方法を知っていて教えてくれたのだろう。野球の上手さと性格面、共にリスペクトできる人だ。

菅原先生にLINEを送ってから、日程が決まるまで

菅原先生とはまれにLINEをする程度でこの取材を受けてくれるかの連絡を入れるまでは、誕生日を祝ってくれた時が最後の会話だった。取材のお願いをしたその日に「久しぶり！！全然協力するよー」と言っていた。その後取材に関しての注意事項や録音のことなども話しながら決めていくうちに、日程は野球の試合の後となった。

野球を教えてもらっていた先生が見にくるので勝って活躍したいと思って意気込んで練習をしていた。そんな試合の日の2日前、先生から駐車場に関してお電話がかかってきた。その電話を僕が取り、「お久しぶりです。菅原先生」というと、先生も「久しぶり和馬。元気にしてる？」と言ってくれた。その声は三年前と変わらず、とても懐かしく感じた。それとともに、久々に声を聞いたので少し恥ずかしく感じた。

取材概要

日時…2023年8月6日 11時半～12時

場所…浪速フクロウスタジアム

取材した方…菅原拓馬 先生

自分との関係…小学生の時の野球の先生

取材場所に到着してインタビュが始まるまで

菅原先生との相談の結果、取材場所は浪速フクロウスタジアムとなった。私の家からは車で30分くらいの場所にある。その日は三年生の最後の大会の準決勝、勝てば決勝という大事な試合だった。さらに菅原先生も見に来てくださっているので絶対に勝ちたいという気持ちで挑んだ試合だった。取材は準決勝と決勝の間にある休憩時間を使ってする予定だった。私は準決勝の先発投手だった。教えてくださったピッチングやバッティングを生かそうと必死で頑張った。その結果、味方の援護もあり4対1で勝利することができた。試合に勝った上でインタビュができたので、内心では少しほっとしていた。試合が終わりグラウンドの整備をして顧問の先生に事情を伝えて、その場を離れさせてもらい、質問の確認をしながら菅原先生の所へ向かった。

初めて見た私服姿の菅原先生

菅原先生の所へ向かっていくと「ナイスゲーム」と言ってくれました。私は少し照れくさそうにして「ありがとうございます」といった。その時私は今日初めて菅原先生の姿をじっと見た。その姿はいつものユニフォーム姿とは全く違っており、新鮮に感じた。でも、顔つきや声は全く変わっておらず、「和馬」と呼ぶ声はとても懐かしく感じた。さらに、その私服姿はさらにかっこよさを物語っていた。試合後だったため、先生は「和馬のクセ見つけたで。足を開く角度が大きかったら変化球、小さかったらストレートやな」と教えてくれた。本当に的確な指摘で、小さなミスもこの一試合だけで見つけられる素晴らしい人だなと改めて深く感じた瞬間だった。見た目も雰囲気もさらにカッコよくなっており、私は菅原先生にまた指導してもらいたいなと思った。

軽く挨拶や世間話しをした後に本題の取材に取りかかった。しかし、スタジオは観客席や応援があるので声が録音できる場所を探すのに苦労したり、椅子がなかったりと近くのお店か椅子を用意しておくべきだと思った。しかし、菅原先生は「ここの段差でやろう」と言ってくれました。せっかく来てもらったのにわざわざ地面に座らせてしまったので申し訳なかった。でも、先生が言ってくれたのでお言葉に甘えてそこで取材をすることとなった。事前に渡せていなかった「先生からの添え状」を渡した。先生はそれを読んで「わかった。じゃあ取材を始めて」とおっしゃった。メモを持ち録音して取材を始めた。

野球の指導者になったきっかけ、野球に対する思い

インタビューを始めた。私は初めになぜ野球の指導者になったのかを尋ねることにした。菅原先生は甲子園でホームランを打って、S高校を準優勝まで導いた人の一人だ。プロ野球選手になっていてもおかしくないような人だからだ。

私「なぜ野球の指導者になったんですか？」

先生「もともとはプロ野球選手を目指していて、現実的にちょっと同級生のM選手とか間近で見るときに、あつ、ちよつと厳しいって感じて。で、次自分に何ができてきたかって考えたときに教える立場、自分がやってきたことを教えてやっていってそれで少しでも野球が好きになってくれる子が増えたり、うまくなって甲子園に出るだつたりとかそういったことにつながることができればいいかなと思つて指導者になりました。」

私「では、菅原先生がプロ野球選手になれなかったり、甲子園で優勝できなかった思いを指導者になってそれを教えた子供たちが成し遂げてくれたり活躍してくれたり姿を見たかったから指導者になったということですね？」

先生「そうです。」

私「ありがとうございます。2つ目は、私は小学校時代の二年間、四年生、五年生と共に野球をしてきて、人によって教え方を変えていると思つていたのですけど実際に変えていましたか？」

先生「変えていました。それぞれその性格も理解の仕方とも違うので一人一人教えてあげること
もあってその子の成長のスピードであったり、まあそこで一番人間的に成長できることを野球を通し
て。ということをやっていたので。はい、変えていました」

私「では、うまくいった時はいいんですけれども、逆にうまくいかなかったとき、その子がやり
にくそうにしている時にはどうしていましたか？」

先生「子供、その子自身のことを聞いていました。どういったことに悩んでいるのか？どうい
ったことが分からないのか？そして野球以外のことにも悩んでいないのか？っていうこともあったので、
全部子供に聞いてそこを理解して教えるようにしていました。」

私「なるほど。では、私は先生から見えてどういう教え子でしたか？」

先生「和馬はまず、良くも悪くも素直に吸収できる子で、それに一つのことに対して突き詰めてい
くというか。それをしっかりやっていくっていう印象がありました。ただ、ちょっと考えすぎるとこ
ろもあるなって思ったんで気にしないことは気にせずに、気楽に考えることを伝えました。」

私「先生は変化球を投げてくださっていて、それに対応することを教えて下さったんですけど、中
学も野球をすることを踏まえて投げてくださっていたんですか？」

先生「そうですね。和馬くん自身が野球を続けるって言うってくれた時に、和馬含めて六年生の子に
はやっぱり中学生になれば変化球も出てくるので、その対応の仕方、タイミングの取り方とかを少
しでも早い段階で体験できれば、中学行ってもちよつとは対応できるんじゃないかと思って教えてま

した。」

私「では、僕の時はどういうことを意識して教えてくださっていましたか？」

先生「まず、掲げた目標っていうのを、例えばホームランを打ちたいなどの目標に向けて今はどういうふうなことをしていかなければならないのかということ。和馬くんに関してはバッターでもピッチャーでもあったので、まあその成長させること野球の技術は当時はレベル的には高かったので、じゃあ何を教えようかなってなった時に一番はメンタルのこととか考え方とかっていうのを意識して教えていましたね。」

私「小学生の野球チーム、P野球教室という場所からちゃんとした中学野球にかわって、もちろん厳しいことが増えたのですが、先生もS高校というトレーニングのきつい高校に入っていて必ず一回はつらいなって思ったことがあると思うのですが、それをどうやって乗り越えてきましたか？」

先生「高校一年生のときの冬に一回だけやめよかなと思った時があっただけだけど、そういう時に思い出したのは両親の顔と応援してくれて見送ってくれた友達顔の顔やったりとか。やっぱりそういう応援してくれてる人のこと思い浮かぶと、ああやっぱりここでは終わられへんなって思ってもう一回頑張ろうと思う気持ちになった。周りにおる人を考えるとやっぱりすごい頑張れるエネルギーがあると思うので」

ここまでの話を聞いてすごく尊敬していた菅原先生もやっぱり人間なのだなと思った。ものすごい

鋭い打球を打つし、教えることも上手だけれどもしんどい時もあつたし、両親に頼っていたんだなと。それでも、両親に感謝することや、つらいことにも耐える忍耐力や精神力を大切にしていた。

指導者から仕事を変えて、活かされたところ

私「今野球をやめて違う仕事をしているのですが、どうして違う仕事をしようと思ったのですか？」

先生「いずれはまた指導者というか野球に携わりたいのだけれど自分、先生自身がもっと成長できる場所に身を移すこともっともいろいろな見方とか、今は全く別の仕事けれどもそういったことを学ぶことによってまた、いずれは野球として違う形で教えられると思ったからです。」

私「野球を通じて仕事に活かされたところはありますか？」

先生「あります。まず、野球というスポーツを学んで挨拶とか礼儀とか一番は目配り、気配り、心配りっていうところ。常にこう、自分の仕事だけじゃなくて周りを見る気遣いがすごく活かされているなと思っています」

先生は今、歯医者などで使われている器具の保管や製造をする会社で働かれている。私自身、先生がなぜ仕事を変えたのかを知らなかったので生徒のため、先生自身のために仕事を辞めてまで完璧な指導者になろうとしているのだなと驚きと尊敬があつた。それとともに、現在の仕事には今まで野球

を通じて培ってきた礼儀、人に対するやさしさが生かされていて、高校時代の血のにじむような努力が大人になったときにこういった形で表れてくるのだなと感じた。やはり、野球の上手さ、仕事の速さも大切な部分であるかもしれないが、人に信頼を置いてもらえるような人は「人間性」が多くある人であろう。

取材を終えて

取材を通じてわかった菅原先生の「魅力」は一言でいうと「愛のあるやさしさ」だと思う。取材相手に選んだ当初はただ単に、「野球を教えてくれて、ときには遊んでくれるお兄さん」としか思っていなかったが、野球の指導者になったのも生徒に自分の思いを受け継いで欲しかったからつらい時も両親の顔を思い出して続けられた。

そして何よりも私についてよく語ってくれた。先生はいろんな視点から野球および生徒のことを見るために違う仕事に就いたと言っておられた。私は充分だと思うがそれでも先生はさらなる「成長」を求めて必死に頑張っている。

私は仕事を変えたことを経済的な面だと思っていた。しかしそれは違った。私たちのためにしてくれていた。この取材も受けてくれたし、一旦帰った時に手紙まで書いてきてくれた。そして「またキヤッチボールしよう」と言って来てくれた。さらに、先生のバッティング手袋までくれた。私はそれで「練習がんばれ」という意味なのかなと思った。わざわざ貴重な丸一日を奪ってしまったのにもか

かわらずここまで私のことを大切にしてくれた。それはただの野球の指導者ではないはずだ。少なくとも私は先生のやさしさが「愛のあるやさしさ」に思えた。

大会は優勝で終わることができた。その後先生の車まで送り届けた時、「野球これから頑張れ」とグータッチをしてきてくれた。私はそれに、「はい。これからも頑張ります。」と答えた。その時の先生の顔はとても笑っていらした。まるで高校球児のように。

「最後に写真を撮らせてもらっていいですか？」と聞くと「いいよ。撮ろう」と言ってくれた。こ
うやってたくさん話して、近くに居させてもらったのは三年ぶりだろう。私の身長が伸びて、先生を
見る高さは変わっていた。それでも、私を見る先生の眼差しは一切変わっていなかった。





針山の狼

聞き手 芝袋優太郎

取材動機

今回僕が取材相手に選んだのは、僕が小学生の頃に親密な関係を築いていた友達のうちの一人である。彼は小学生の頃から頭脳派で成績も良く、ずっと憧れの存在でもあった。

彼との出会いは小学六年生の始めであった。今までずっと同じクラスになったことがなかったので最初はあまり話さなかったのだが、学校のテストでは常に高順位に位置し絵画コンクールなどでも才能を開花させていた彼に魅力を感じ友達にならないかと持ちかけた。最初の方は少し距離を感じたが彼と趣味が一致したり休み時間にも遊びなどで交流したりして段々と距離が縮まっていったのだ。

そんな彼（ここから先、佐伯と表記する）に感じていた魅力は「大人っぽさ」である。プライベートでは普通に接するのに学校生活においては小学生とは思えないほど大人びていて努力家で、利口な子どもでもあった。

そんな彼を表す代表的な特徴が「才能をあまり自慢せず隠している」というところである。「能ある鷹は爪を隠す」というが佐伯はまさにその体現。寡黙に勉強をしていて周りからも一目置かれた存在で近寄りがたかったが、実際付き合ってみるとなかなか面白く、卒業式には佐伯とそのほかの友達と遊びに行く程の親密な関係になったのである。

そこで今回僕は「なぜ才能を隠したがるのか」ということについてを中心としていくつかの質問をインタビューで行い彼の素顔に迫ってみたいと思う。

取材概要

日時…2023年8月12日

場所…スターバックスコーヒー エディオン なんば店

僕との関係…小学校の頃からの友達（佐伯佑助）

取材時間…16時半～18時ごろにかけて

取材を行うまで

佐伯は今、某有名進学校に通っていて、かつ出身はオランダということもあり夏休みのスケジュールが空いていないとのことであつたが、なんとか日をとってもらえることとなった。

インタビュー当日。最寄りの駅で待ち合わせを行なった。直接会ったのは久しぶりだったが前とあまり変わりがなく静かな風格を纏っていた。インタビューを行う前に佐伯とポケモンセンターへ行った。先ほど話した共通の趣味の一つがポケモンカードである。最近僕は忙しくあまり遊んでいなかったが久しぶりに二人で開封などをするとやはり楽しいなあと思った。

ただ、インタビューを行えないと本末転倒なので相手には悪いと思いつつ難波のスタバに誘導し、

期間限定のスイカフラベチーノ的なものを頼んで取材を開始した。

総合学習のインタビューを受けてもらう旨を記した、担当教員からの文書を渡すと「真面目すぎやろ」と笑いながらインタビューを受けてくれた。少し恥ずかしかったのでもいつも通りの砕けた口調でインタビューを行った。まず初めに家から持ってきたメモ帳を出し質問を順番に行なった。

取材内容

涼しい店内の長テーブルで買ったポケカを片付けながら始まった取材。飛沫防止ガラスがあるとはいえ前には人がいるので大きな声を出さないよう意識し、小学生の頃から抱いていた疑問をメモ帳片手に質問し始めた。

まず初めに聞いたのは「なぜそんなに頭がいいのか」ということである。小学生の頃から府実施のテストでは学年順位一位を獲得し、テストではいつもほかの子より20分ほど早く終え、済ました顔で読書をしていた。僕はそこから大人の風格を感じていた。そして憧れを感じていた。そこでまずは本題の「才能」に関する質問ではなく、初歩的だが謎に満ちていた「どういう勉強法をしているのか？」ということについて質問した。

勉強法

僕「まず、初めに聞きたいことは『どんな勉強の仕方をしているの?』ということです。では早速

唐突ですがどんな勉強法を行なっているのですか？」テレビのインタビュアーのように上げ調子で問う。

佐伯「あんまり詳しいこと言うとなあれやねんけど、まあオレだって普通にゲームとかはするし部活とかもあるからあんまり勉強はしてないよ。でも一つ秘訣としてゐることは「復習」やな。電車の中とかの隙間時間でなんでも参考書とか読んでその日の内容を全部復習するんや。あとは家のちよつとの時間を使ってササっと課題済ませばなんとかなるよ。」

僕「なんか専門家みたいやなあ。では、どうしてそんな才能を隠しているんですか？ 普通ならもつと自慢っぽく振る舞いますし、なんなら頭いい人とかは人気者になりやすいのに全然他の人とつるんでいなかったのはなぜですか？」

佐伯「1つ目の質問の解は「才能じゃないから」やな。一日の習慣として復習とかをしているから成績が良かったり、テストで点が取れるだけで、別に才能とかじゃなくて勉強への向き合い方が俺にあつてゐるからやな。あとあんまりつるんでなかったのは人と接するのが嫌やったからや。なんか向こうも何考えてるか分からんとか怖いとか言ってくるから。でも別につるんでなかっただけで友達はおつただけ。」

僕「なるほどなあ。やっぱすげーなー」

それらを聞いてメモを取る。こいつYouTubeとかで解説系の動画とか投稿したらやってけるんじ

やないか!?」といった衝撃を受けつつ、次の質問に移行した。

才能の提示と愚民思考

ここで僕は最も主軸となる「才能」についての質問を行った。これは人格に関わる精神的な問題についての質問だ。こういうのは聞きにくいことだが、この質問の答えによつては更なる相手の深層と研ぎ澄まされた人格が浮き出るのだ。

僕「ではあなたは僕のことをどう思っていますか？ また小学校の頃周りの友達をどう思っていたのですか？」

この質問はいわゆる愚民思考というもので、偏見であるが「頭がいい人は周りの人を見下す」というような思想である。僕は彼がそんな考え方をしているとは思えないのだが前から気になつてはいた。周りとあまりつるまなかったのは、周りを心の中で少し軽蔑していたからではないかと小学生の頃は思っていたのだ。実際僕も受験期では少しそんな感情があり、たまに常識的でないバカっぽい小学生らしき行動をする友達を見てると心底軽蔑したものである。ただ僕はそれほど頭が良くないので自分もそのレベルかもという意識を持つてはいた。

さあ、どんな答えを出すか？ ここで嘘をつくなら彼の人格には少し傷がつくし、からと言って無

難な答えを出すのは難しい。佐伯は少し考えた後、あまり困ったような表情はせずいつも通りの口調で返答した。

佐伯「正直確かにそうは思ってたわ。クラス一緒になった時はしばっち（そう呼ばれていた）とかもあんまよう知らんし、クラスでワイワイやってたからあんま好きじゃなかった。実際にまだに嫌いな奴もいる。けどそれは単なるタイプ相性が悪いと感じてただけやと思う。自分は他とは違う、言っても頭そこまで良くなくても言ってることがまともなやつとはテスト上では立ち位置が違っても、話したり遊ぶ上では一緒やった奴もいたと思う。やから、まあ、結局俺はただの性格悪い奴やったと思う。」

僕「じゃあ結局今、僕のこと嫌いなん？」

佐伯「今は違う。というかそもそもそういうやつは受け付けないってだけな。実際しばっちは話しかけてくれて色々あったから、本当のしばっちを知れて今がある訳や。やから嫌いではないと思う。まあ好きではないけど。」

僕はそれを聞いた時二つの感情の山の頂点で感嘆した。最後の「好きではないけど」はジョークなのかなんなのかわからなくて理解できなかったが、ここまで正直に言ってくれたのはすごく嬉しかった。結論として自分は悪い奴だったと言っていたけど佐伯はやはり、僕が魅力と感じた内面はいい奴

だったと思う。

その後、難波パークスで買い物をして帰路に着いた。空は薄暗くなっていた。晩御飯を済ませたのでかなり遅かったからだ。しかし僕の目に映った空には、小学生時代のあの頃が浮かんでいた。佐伯と離れると寂しく感じた。なんだか変なインタビュだったが、なんだか気分はスッキリした。頭の中で彼と僕という関係を整理できたような感じであった。

取材後

取材を無事に終え、僕なりに整理した佐伯の魅力は「大人っぽさ」である。小学校時代のあの頃は皆が理解できていなかった彼の大人っぽさに、興味が湧いた僕は大人だったか。そうではない、子供だった僕（今でもまだまだ子供だが）が本当に良い友達を持てたと心から思う。傲慢をしない大人っぽさ、しっかりと自分の生き方を定義して話す大人っぽさ、自分のダークな部分を認める大人っぽさ、そのそれぞれに僕は密かに憧れていたのだと感じた。

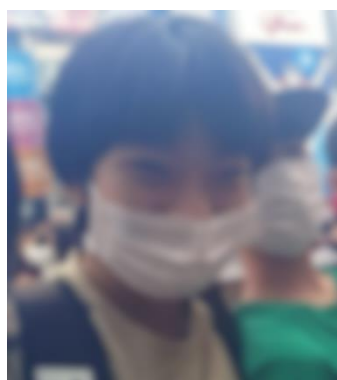
受験期は遊びを断ち、針山という厳しい受験の世界の中に佇む孤独な狼の如く、彼も僕も懸命に受験対策を行っていた。彼はその時の真面目な姿勢が功をなし今は僕では手が届かないようなところへ行ってしまった。だから自然と取材前でも彼のことで気になることは少なからずあった。だが取材後、僕はさらに佐伯への興味が湧いたし、自分の気づかなかった更なる魅力も感じる事ができた。

だから未熟であつたとしてもこの取材に意味はあつたと思う。

記念撮影

記念写真を撮るとき、「ちよい隠れてもいい？　〇〇も清教中にいるから、なんか恥ずかしい・・・名前も伏せといてや。」と言われた。

「おけおけ、ほんまありがとうな」感謝を伝えながらも一日を振り返つて思う。佐伯はやはり自分を隠す。だがその方が僕たちの関係はより強調されている気がした。僕は彼の大人っぽさに憧れているがこの、無邪気さと冷静さ、という凸凹さが今の関係を作っているのかもしれない。





音楽を通して得られるもの

聞き手 坂本優菜

取材の動機

私には高校2年生の姉がいる。中学から、吹奏楽部に入っており、今は5年目。金管楽器をまとめるセクションリーダーという役割をしている。ピアノは幼稚園の頃から習っており、今で12年目ですごく上手だ。勉強と音楽をずっと両立していて、尊敬している。私が吹奏楽部に入っているのも、ピアノ続けているのも姉の影響だ。

そんな姉は前回の吹奏楽部の定期演奏会で、合唱のピアノ伴奏をしていた。800人の大ホール満員のお客様の前で、堂々と弾いていて、すごくカッコいいなと思った。まず、4人で戦うオーデイションを受けるところからスタートし、その中でメンバーを勝ち抜き、伴奏の座を勝ち取ったらしく、でもそこがゴールではなく、直前2〜3週間になると、もしこの音を飛ばしたらどうカバーしよう、と考えながら練習したり、800人の目が自分に向いているイメージしながら自分にプレッシャーをかけて弾いたり、目をつぶっていても弾けるくらいになった後も、毎日毎日精神を擦り減らしながら頑張っていた。

無事に当日弾き終えた時は、普段全然泣かない姉が達成感から号泣したそう。私が横で見ているのもしんどいくらいだったのに、それをやり遂げた姉をすごくカッコいいなと思うし、自分は果たし

て同じことができるのか?と思う。なので、姉にどうして伴奏に立候補したのか、やり遂げた後の感想などをはじめ、部活のことやピアノのことについて聞いてみたいと思い、インタビューすることにした。

取材概要

日時… 2023年8月11日 17時～17時40分

場所… 祖母の家

取材した方… 坂本美優さん

自分との関係… 3学年差の姉

前回の定期演奏会について

インタビューを始めた。私はまず、定期演奏会のピアノ伴奏に立候補しようと思ったきっかけや、やり遂げた感想について尋ねることにした。

私「なぜ強敵が他に3人もいたのに、伴奏に立候補しようと思ったのですか。」

「取材」だからということもあったのか、緊張していたのか、いつもとは違って慣れない敬語で聞

いてみた。

姉「ゆな(私)に敬語使われるなんて慣れなくてなんか変な感じ、笑。一応「取材」やし、みゆ(姉)も敬語使うわ。」

「じゃあ話に戻ります。小学生のとき、学年全員の合唱で伴奏したりしたことがあったけど、中学生になってからあまりそういう機会にチャレンジしてこなかったから、大ホールで何百人もの人の前で、指揮も何も無く自分のピアノの音と部員の歌声だけをお客さんに聞いてもらえる貴重な機会を経験しなかったからです。」

私「次に、オーディションを勝ち抜いた時の気持ちと決意を、聞かせてください。」

姉「一緒にオーディションを受けた人が、みんな上手な人ばかりでまさか自分が受かるなんて思ってもいなかったのでもとても驚きました。オーディションの時点では技術もまだまだだったので、受からせていただいた分、部員全員での合唱を成功させるために、責任をもつてたくさん練習しようと決心しました。」

私「では、練習で苦戦したことはありませんか。」

姉「前にも言ったように、普通吹奏楽では指揮者がいてそれに合わせてみんなで音楽を作るのに対して、合唱の伴奏では指揮もなく、自分の伴奏だけを聞いてみんなが振りも入れて動きながら歌うので、テンポキープが難しかったです。家で練習するときはメトロノームに合わせてたり、録音などを聞いて自分の癖やテンポの乱れを見抜いて直したりしました。自分がミスをして止まってしまったら部員全員を混乱させてしまうことになるので、その責任感をバネに練習を頑張りました。また、本番の合唱はマーチングステージ(動きながら吹いたり、旗を振ったり、曲に合わせて動きを加えたもの)の中間にあつて、私は直前までカラーガードという旗を振ったり踊ったりする役割をしていたので、すぐ気持ちを切り替えてピアノに集中するのがとても大変でした。」

私「やり遂げた直後の気持ちを教えてください。また、やってよかったですか。」

姉「リハーサルなどでも色々気をつけながらたくさん練習したおかげで、本番は特に大きなミスもなく終えることが出来て、心の重荷がやっと降りたような安心した気持ちになりました。けど安心する暇もなく着替えて次の曲があつたので、達成感を感じたのはマーチングステージが全部終わってからです。自分でも今振り返ると、よくあんな責任のある役割をやりこなせたなと思います。部員全員が舞台で三角形に整列して、照明を浴びながらピシッと動きを揃えて歌っている後ろ姿を弾きながら見ていて、こんな経験は二度とないんだろうなと思いました。とても苦労するしずっとハラハラしないといけないので、もう一度やりたいかといわれたらやるかわからないけど、やってよかったなと

思いました。」

姉にとっての「音楽」とは

姉は本当に音楽が好きで、毎日音楽に触れているように思う。クラシックを弾くのも吹くのも好きだし、邦楽、韓国の歌を聞くのも好きだ。姉の音楽好きの理由を、知りたいと思った。

私「なぜそんなに音楽が好きになったのですか。また、音楽のどこが好きですか。」

姉「自分が音楽が好きになったのはやっぱり小さい頃からピアノをやっていたからだと思います。昔はママに怒られながら泣く泣く練習してたけど、発表会に出たりするうちに人前でピアノを弾く楽しさを知って、成長するにつれ練習も自ら進んでするようになりました。」

ピアノの好きなどころは自分の弾きたい曲を、自分が弾きたいように自由に弾けることです。自分が努力すればするほど良い音楽を作ることが出来るので譜読みさえしてしまえば練習も楽しくできます。逆に、吹奏楽の好きなどころはピアノとは違って1人では完成させられないところです。自分が出来なかったら周りに迷惑がかかるし、自分が出来ても周りができていなかったら結局曲全体は良くならないのでモヤモヤすることも沢山あります。でも色々な種類の楽器がそれぞれ役割分担して、協力してひとつの音楽をつくることで得られる達成感はその分大きいです。

それから、クラシックではなくて普通に誰もが聞くいわゆるポップスの曲を聞くのも好きです。ポ

アップスは逆にクラシックにはない歌詞があつて、その音楽を通して何を伝えたいかがはっきり分かるところが好きなところだ。応援ソングとか友情ソングとか恋愛ソングとか色々なジャンルがあつて、自分にピッタリ合う曲にも出会えたりするし、聞いていて励まされることも沢山あるし、例えば卒業式とか卒部式とかで直接言葉で伝えるのは難しいことでも歌なら歌詞に乗せて伝えることが出来るのが良いところだと思います。」

私「そんなに音楽が好きな美優さんですが、吹奏楽部やピアノをやめたいと思ったことはないんですか。」

姉「吹奏楽は部活がかなりハードなのでやめたい、までは行かなくても休みたい、だるい、などということはよくあります。そりゃ休みで遊ぶだけか部活に行くかなら遊ぶ方が楽で好きなことだけできるから良いかもしれないけど、自分は、勉強は別にすきじゃないし、部活がなかったら打ち込めることがないのであつてよかったと思います。ピアノも小さい頃はそんな好きじゃなくてよく辞めたいと思つてたと思うけど、地道に努力して続けてきたおかげで自分のひとつの取り柄にできるし、努力して何かを達成したらどの分野にも限らず、自分のこれからの人生での自信を得られるし、人間的にも成長出来ると思うので、続けていて良かったと思います。」

私「これも気になったんですが、800人の前で弾くのは、やはり緊張したのですか。」

姉「800人の前でピアノを弾いて、しかも自分が止まったら部員全員の足を引っ張る状況なんて冷静に考えれば怖すぎます。けど、もう決まってしまったことにはやり遂げるしかないのです、本番でどんなミスがあっても乗り越えられるようにたくさん練習しました。普段から、わざと本番の緊張感や責任感を想像しながら練習していたので、本番はそこまで緊張せず落ち着いていつも通り弾くことが出来ました。」

私「では最後になりますが、吹奏楽部を続ける私に、アドバイスをください。」

姉「吹奏楽部は特に忙しかったり人間関係もあったり大変なことがいっぱいあると思うけど、その分成長もあると思うから自分が音楽が好きなら続けて損は無いと思います。特に高校の方がもっと忙しくてしんどいし、代償として遊ぶ時間が減ったり勉強も時間をとるのが大変になるけど、そのぶん本番も多いしマーチングもあったり、練習内容も効率的で、濃くて充実した高校生活を送れると思います。」

取材を終えて

取材を終えてわかった美優さんの「魅力」は、ひとことというところ「努力家」だと思う。取材相手に選んだ当初に考えていたよりもずっと多くの努力をしていて、その努力の積み重ねがあつてこそ無事に定期演奏会でのピアノ伴奏を終えられたのだということがわかった。そして、努力して何かを達成

したら、自分のこれからの人生での自信を得られるし、人間的にも成長出来るということもわかった。また今回の取材を通して、取材前よりもっと姉に憧れる気持ちが強まったと思う。姉と同じように私も、これからも吹奏楽部やピアノを頑張っていきたいなと改めて思った。





魅力のある父親

聞き手 佐藤健一

取材した理由

自分が今回取材相手に選んだのは、自分の父だ。なぜなら料理がとってもおいしく、お弁当もつくってくれてとてもやさしいからである。

今父は服を作る仕事をしている。父は自分が小学校の時は母が作っていて、父はたまに作る程度でおいしいなと思っていたのだが、ある日自分が六年生の時に母がコロナウイルスに感染してしまい父が晩御飯を作ることになり、そこで父の料理をひんばんに食べるようになった。その晩御飯が毎日おいしくてレストランに行けないぐらいおいしくて毎日晩御飯が楽しみでワクワクするのだ。

しかし自分はキッチンにあまり行かない。なぜならとても料理に集中していて入れる感じではなかった。台所で手を洗ったりすると父が「洗面所であらってきて！」と怒られてしまうし冷蔵庫に前にいると「邪魔」と言われたりする。でも出来上がった料理を食べるととてもおいしいのだ。その料理がうまいというのが魅力の一つだ。

そして父は小さいところにたくさん遊んでもらった思い出がある、暇なときは公園で野球をしたりサッカーをしたりしてとてもたのしかった思い出がある。父は小学生のころにサッカーをやっていたがやめて野球をやろうと決めたらしい。父は今でも野球がうまく現役バリバリのころはピッチャーをや

っていたらしく小さい頃はいつも公園に行くときヤッチボールして遊んだ。今でも遊んだりしている。そして毎日送り迎えをしてくれたり、駅に迎えに来てくれたりしてくれるところがやさしいところである。そこで父になんでそんなに料理がうまいのかきいてみたいとおもった。また、なんで息子に優しくしてくれるのか聞いてみたいと思った。

取材依頼をして取材をするまで

正直この総合の宿題のことをすっかり忘れていて友達に「総合の宿題終わった？」と聞かれたおかげで急遽父に取材をしていいかを聞いたが、父は仕事が忙しくて取材をできる時間があまりなかった。だからお盆の期間に頼もうと思いい父に取材の依頼をした。でもいざ取材の依頼をしようとする、逆に家族でも恥ずかしくあまりすぐには言えなかった。

そして勇気を出して「取材していい？」と聞くと父は「別にいいよ」と言ってくれたので安心した。そして自分ができるだけ父が忙しくない時間に取材をしようと思ったが時間がなかったのでしょうがなく父がテレワークの時に取材をすることにしたが、父が急遽仕事に行かなくては行けなくなりその日の晩に取材することに決めた。正直に言うとう自分は朝に取材したかったが、しょうがないのでその日の晩に取材をしようと思った。

取材概要

日時…2023年8月15日 7時20分～7時50分

場所…家のリビング

取材した人…父、佐藤真一

自分との関係…家族

父とのインタビュが始まるまで

インタビューが始まる20分前父は晩御飯を作っていた。鍋をよーくみてみるとカレーライスを作っていた。とても美味しそうだった。この日も父のご飯はおいしくてたくさん食べてしまった。そして父と自分が食べ終わった後にインタビューをしようと思った。

そしてその時間がやってきた。父と自分が食べ終わった後、「インタビュしていい？」と聞くと父はスマホを見ながら、「あーそうやったな、忘れてたわ。」と言っていた。自分は正直「嘘でしょ」と驚いたがおそれよりも恥ずかしさが勝っていた。そして取材をする時が来る。

料理上手な父

まず初めの素直に聞きたかった、父はなぜ料理が上手なのかを率直に聞いてみた。

自分 「まず一個目の質問から言っている？」

父 「いいよ、」

自分 「なんでそんなに料理上手なの？」

父は前に「バイトをしていたときに教えてもらった。」と言っていたので誰に教えてもらったのか気なったので、「誰に教えてくれたの？」と聞いてみた。

父 「バイト先の店長に教えてもらって、最初に教えてもらったのはチャーハンやったと思う。」

なるほどなと思った。自分が思っていたのは自分で調べて段々上手くなったのかなと思ったが教えてもらっていたことは初めて知った。父がバイトをしていたこともあまり知らなかったしそのバイト先の店長に教えてもらったことはじめて知ったのでとてもおどろいた。確かに父が作ったチャーハンはとてもおいしかったので聞いて納得した。そしてついでにバイト先の店長についてとても気になったので自分は父に店長はどんな人なのかを聞いてみることにした。

自分 「バイト先の店長ってどんな人だったの？」

父 「結構高齢の人で優しい人で教え方が上手だったよ」

自分 「父にとって店長ってどんな人？」

父 「店長の料理が超うまくてすぐく懂れてた部分もあったと思うよ。」

自分 「そうなんだ。」

自分はとてもびっくりした。そして店長はとてもいい人だったんだなと言うことを知った。少し店長の料理を食べたくなったし父がバイトをしていた店も言ってみたいと思った。そして自分は一つの質問を終えた。

優しい父

そして次になぜそんなに優しくしてくれるのかを聞いてみた。少し言うのが恥ずかしかったが勇気を出して言ってみるとするとした。

自分 「なんでそんなに息子に優しいの？」

父 「なんでそんな聞くの？これも取材なん？」と言っていたので、

自分 「宿題だから」と自分は言った。父は納得したように言った。

父 「家族だから？かな？」と少し恥ずかしがって言っていた。でも父は少しめんどくさそうに答えていた。

父 「もうおわり？」

自分 「うん。もう質問することないよ。」

父 「ランニング行ってくるわ」

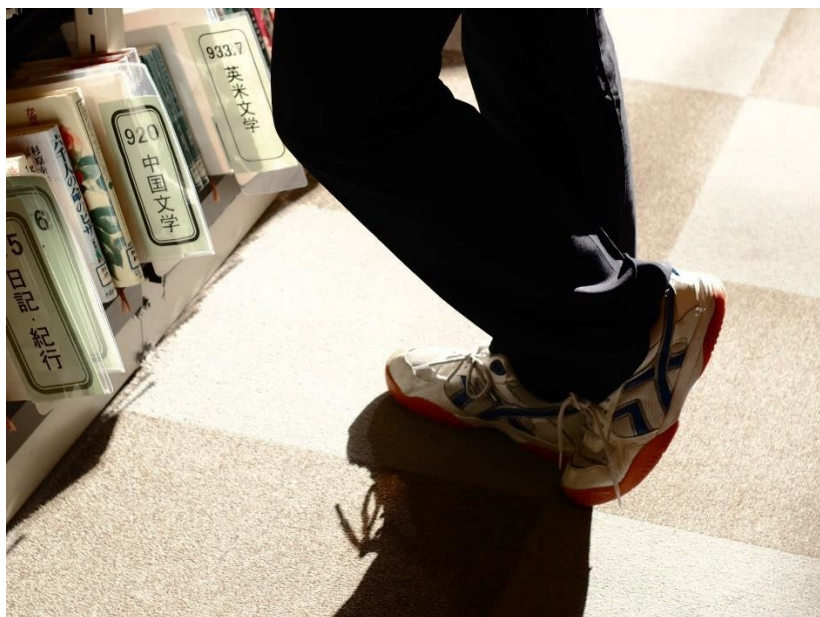
自分 「わかった。」と言ってインタビューは終わった。

父が言っていた「家族だから」という返答に驚いてすこし心に響いたが考えてみると、どの人の両親もそのような回答をするのかなと思った。だから父が言っていたことは当たり前な回答なのかなと思った。そして自分は父がランニングに行って「いつてらっしゃい」と言っているインタビューを終えた。インタビューが終わって少しひと安心した。

取材を終えて

取材を終えて自分は料理に挑戦してみようかなと思った。父が毎日昼と晩にご飯をつくってくれていてとてもおいしいので自分も将来父のようにおいしいご飯作れるようになってほしいと思った。取材を通じてわかったことは父親はとても優しいなどこの取材を通じてわかった。そして父がなんで料理が上手いのかもわかったのでよかったと思った。家族でも知らないことがとてもあるのだなと思ったし父の若い時の話も聞けたのでとても嬉しかった。でもいざインタビューすると思うととても恥ずかしくなることもあった。

父がバイト先の店長に教えてもらっていたのを初めて知った。そして父は福岡出身で福岡に行くときは父がバイトをしていたところに行きつてみたいと思った。父が料理してくれた時や家事をしてくれた時には感謝の気持ちを大切にしないといけないのだと思った。だから今後も父親や母親を普段から感謝して生活していこうとこのインタビューを通じて思った。



究極の自己中

聞き手 尾崎爽

なぜ母に取材しようと思ったか

私が魅力的に感じる人は母である。しかし特に常軌を逸するところがある、だから選んだというわけではない。

まず、母のどんなところが魅力的かというと妙に面白いところである。ある時姉が母に「クソババア」と言ったことがあった。普通の母親ならそんなことを言われたらきつと親に向かってその言い草はなんだ！と怒るであろう。しかし母は「ババアなだけましや。ジジイじゃないならいい、」と言っていた。

大体は年を取っているという言われ方に怒るものである。母の妙なところは、まあ自分はババアだと認めて性別の誤認識さえなければそれでもいいと言っているところだ。言い草から何から「は？」と言ってしまうそうだが、もしジジイと言ったとしても彼女は男じゃないんで煽ってくる。結局姉と母との喧嘩？は母が姉を笑わせたことで終了した。これまた謎の笑ったら負けというルールで。

この出来事があった時から、私は言葉では彼女に決して敵わないだろう、と思った。そしてそんな口がうまいところも母の魅力のひとつだとおもうのだ。結局どういいうところが彼女の魅力なのかよく

わからなかった人もいるだろう。結局は話し上手という魅力なのである。

もし私がこれから母に取材するなら、どうしてそんな考え方をするようになったのかということを質問しようと思う。

取材を頼むまで

今回私が取材相手に選んだのは私の母である。私が幼稚園の頃から母はずっと家の中にいて私の面倒を見ることはなかったが休日などはいっしょに遊んでくれたり楽しいお母さんだと当時から思っていた。小学校時代のある日母は転職すると言い始めた。当時の私にとっては仕事を辞める＝仕事を失うことだと思っていた。しかし母は数週間もすれば福祉関係の仕事についていた。大人になったら一つの職業にしかないという固定概念が崩れた瞬間だった。

そんな衝撃を与えてくれた母にはじめにやってみた仕事は何か、そしてなぜ今の職業に就いているのかを聞いてみたいと思う。

母とは現在一緒に暮らしており毎日顔を合わせているのだが改めて顔を向き合わせて取材を頼むというのは少し恥ずかしくもあったが、取材をお願いする紙を説明とともに渡すと母は快く「全然ええで」と了承してくれた。

取材概要

日時… 8月21日 12時30分～1時20分まで

場所… パルネット 狭山店

取材した方… M社会福祉事業財団 尾崎優さん

自分との関係… 親

取材場所に着き取材を始めるまで

母の仕事のとの折り合いをつけた結果、8月21日の日曜日と取材の日は取り決められた。私が取材をさせてもらうのに車で送ってもらうのは少し申し訳なくも思ったが、ありがたく一緒に行くことにした。

「まずなんか頼み」と母が提案してくれたので私はオレンジジュース、母はカフェオレのアイスそれぞれ注文し、私は聞いた事を書き留めておくために総合のノートと筆記用具を用意し、飲み物が届くのを待った。しばらくすると飲み物が届いたので私は取材を始めることとした。

やりたい仕事

まず初めに私が母に質問したのは前から聞いておきたかった、一番はじめになった職業は何かということだった。なぜ私が母の一番初めの職業について聞きたかったかというと今の母は福祉関係の仕

事に就いているが、母は福祉関係の仕事に就きたいと思ってるかがわからずそんなに福祉関係の仕事に就くことに対しての動機が分からなかったからだ。

私「母は一番はじめにどんな職業に就きたいと思ってたん？」

母「自分の好きな仕事にしたら一週間7日間あつて働く日が5日で休む日は2日。自分が好きなことができるのが二日より仕事やし嫌なことがあるかしらんけど好きなことができる5日間がいいなと思ったからそんな仕事につきたかってん。」

私「選ぶ上でどんなところがいいとか決めてたんやな。」

ある程度どんな職場、と決めるのはわかるが一応希望というかしつかり「楽しいところ」と言っているところに私は驚いた。

母「うん。」

私「他に選ぶ条件みたいなのはあるん？」

母「大学四年間で考えてもしたい仕事なんて見つからへんからやったら自分がしたい仕事をしようと思って、映画とかゲームが好きだからそれに関わる仕事とかがしたくて、レンタル屋さんに勤めることにしてん。」

私「今で言うGEOみたいな？」

母「そう。もう潰れちゃってんねんけどさ。」

私「そこで働いてんのは楽しかった？」

母「うん。楽しかったよ。」

高校生のうちになりたい職業と大学を決め、どうなりたいかを考えなければならぬと思っていた私は再び驚いた。見つからなくても、好きなどころにいききたい。というのでいいのかと。

どんな仕事を

注文した飲み物から結露が落ちていく。

私「例えばどんな仕事をしたりしてたん？職業とかで。レンタル屋さんみたいなさ」

母「母はレンタル屋さんで働いてたわけじゃなくてレンタルの営業事務しててん。だから元々の本社で働いてたってこと。」

私「あ、支店とかじゃなくて。」

母「営業事務やからそのお店に新しいゲームを卸すとか、何本ビデオを卸すとかしててん。」
私「結構頭使った？」

母「いや頭を使うわけじゃなくてその会社の人が何個何個くださって言うのを調整しててん。そこには3本しか渡せません、とか。あとはゲームの新作とかがすぐ買えたこととかかなピクミンとかが一番初めに出た時とか。」

私「だからゲームとかをたくさん持てたし出来たと。」

母「ゲーム機とかが安く買えてん。そう言うのよくない？ だって映画館のバイトをやってたのはさ、映画安くみるためやし、そこやったらビデオ無料で借りれんねん。」

私「社内割引みたいなの？」

母「そんな感じ」

私「お得だな」

母「やる？ ということは自分が好きなことやった方が楽しいやん。しかも同じような趣味の人がおるし、みんな。」

私「まとめると仲間もおるし、社内割引もできるから、趣味と仕事が一体化できるみたいなの？」

母「うん。楽しいやん？」

似たような趣味の仲間と一緒に働きさらに趣味も割引で充実する。まさに最高ではないか！ と私は思う。しかし現在母はそんな関係の仕事にはついていない。どういったことなのだろうか。

今の仕事について

母がカフェオレをごくごくと飲んでいく。私もオレンジジュースを一口口に含んだ。

私「じゃあなんで母は趣味っていう感じの仕事から今の仕事にしようと思ったん？」

母「子供生まれたからな。結婚して。」

私「自分の好きな仕事というか、母の好きな仕事っていうのは今聞いてきたことで。自分が好きなことっていうのはわかってんけど、社会福祉士って人に奉仕するのが好きな人がするっていうのがイメージで」

母「いや全然そんな好きじゃないで？」

私「じゃあなんで社会福祉に行ったん？」

母「なんで行ったかといったらなんか人と話するのが好き、で元々営業をしたかってん。母は。その職場で。でもその職場で営業できへんかってさ、そこでその後営業をするために違う会社に働いてん。」

私「つまりゲームを売り込みにきたかったと」

母「そうそうほんま一番初めに入る時それでな、営業をできるって入ったのに営業じゃなくて営業事務やってん。」

私「本社でカタカタする人になったと。」

母「そうそうそう。」

私「会社に採用されてもどこに配属されるかはわからないと…」

母「いや、違う。営業したいって言ってその会社に入ったのに営業できへんかって。んで女の人でも営業できますか？ と言っていいってんけど入ってから女の人の営業はいせんって言われてそんな騙されたようなもんやん？ 2年頑張ってんけど営業したいから。で営業するために仕事辞めてん。だって若いうちに営業しときたかってん母は。なぜならば営業はしんどいんですよ。あの時の営業あの仕事あんなに辛かったのに、じゃあ他の仕事なら何だってできる！ と思えるから。」

私「なるほどね」

苦しいことが昔あった。だからこそほかなんでもできる。そういうポジティブな思考で考えているという。

母「だから営業したくて営業してん。ほんまにキツかってん。せやけど今の仕事とかで営業って言うたら、売り上げ上げてこなあかんけどその時は売り上げなんかあげてこんでええから楽ちん。」

私「で、その時にはもうさっき言ってたレンタルの会社からは移動してると。」

母「移動して、次営業するために広告代理店に入んねん。なんで広告代理店にしたかというと、家電とか何か特化したものを売ってというのはめんどくさいやん。その商品が悪いものでも売らなあか

んやん。でも広告代理店はなんでも売れるねん。もしその人が冷蔵庫欲しいって言ったら冷蔵庫も売れるねん。」

私「広告代理店に対するイメージがあんまりないんやけど広告を作ったりする会社じゃないの？」

母「広告も作るよ？ 広告も作るけど、仲介みたいな感じの仕事。だって広告を作ってるのが広告代理店じゃないんやもん。わかる？ テレビを企画したりCMを企画してるのはまた別の人やろ？ 広告代理店はその枠を取り扱ってんねん。」

私「そうやったんやな」

母「そうやで。新聞のこの広告の枠に入りたいやけど、とか言われんねん。」

私「それは初めて知ったわ」

母「それが広告代理店やねん。こんな感じで営業やってんけどあんたのお姉ちゃんが生まれたから、妊娠したから辞めてん。で、そこから仕事してなかったんやな。なんもじゃないけど、アルバイトとかしててん。子供おるからな。」

子供、姉が生まれたことにより「楽しいこと」を母はあきらめたわけではないが、生まれる前と後では仕事の職種について影響があることもあったようだ。

大学に行けば

私「どんなアルバイトやってたん？」

母「色々やってたで？ 歯医者さんの歯削る手伝いとか、スポーツジムも勤めたし、ほんでそれから市役所の事務やってん。」

私「資格とかは要らなかったん？」

母「うん。何にも。大学さえ出てたらよかってん。だから大学は行きやって言ってるねん。」

私「なるほど？ 大学行ついたら何かにはなれると。」

母「そうそう、資格ないからさ。その後に市役所で勤めてたときに隣に座ってた人が社会福祉士やってん。で、その人があの、母が出た大学が社会学部なんやったら『社会福祉主事任用持てるから働けるで』って言われて、『へえ。福祉関係ってなんかよさそうですね。』とか言ったら『違う違う。こういうことだったらこういうことがあんなんよ』って社会福祉士について教えてくれてん。」

私「その人があって、今の母があるって？」

母「そう。その人に久々に会った時に『おかげさまで社会福祉士取れました』って母言うた。」

私「急になりたいとかじゃなくなるまでの土台？ みたいなのはあったのね。」

母「まあ社会学部やから、取りやすかったってこともある。基礎みたいな……基礎じゃないけど社会学部やったらそう言うのが取れるよって。」

私「そう言うことね。」

資格がなくともいろいろなことができる。知らなかった私からすればとても面白いように感じる。でもそこから何かをやるというなら行きたい、なりたい方面の資格もとっておくことがやっぱり必要なんだなあと思う。

そしてこの取材は終了した。

取材感想

こう言って私の取材は終わった。これで、母についての魅力が自分の中でも結びついたと思う。もともとは話が面白いからという理由で選ぼうとしていたが、母はテンプレートな生き方ではなくさまざまな職種体験しているからこそ経験談、面白いことをいろいろ話す事ができるのだということがわかった。さらに、この取材をもつて、母が柔軟な思想のまままでいられるのは自由、その一言に尽きる。やれるなら自分の好きなことをしたい。年を取った後に後悔したくない。

良い言い方をすれば未来を見据えてるとでもいうのだろうか。我が母はそんなものではない。だって自分のしたいことをしているだけだから。取材中、いつもと違う驚きだらけの体験だったわけではない。でもすべてにおいてしっかり何をしたいから、何をするためには何をしなければならぬ。と決めている母は何かいつもとは違ったのだ。良くも悪くも自分の世界が広がっていてその中心には欲望がある。まさにそれこそが母の魅力だと思うのだ。



自分を動かすもの

聞き手 早坂タクト

憧れの與古田先輩

私が紹介する人は中学3年A組の與古田進悟先輩だ。與古田先輩は男子硬式テニス部に所属する、私の先輩である。私は、與古田先輩の人を笑顔に出来るところ、常に前向きな姿勢に魅力を感じている。

そんな先輩と私は試合に出ている。ミスをしたり、迷惑をかけたりしても、與古田先輩は優しく励ましてくれる。なぜだかわからないが、不思議と勇気付けられる感じになるのだ。

私が中一の時、初めてペアを組んだ時も、すぐに仲良くなれた。たとえば、「全然大丈夫やで!」とか「集中しよう」などと、とにかくでかい声で励ましてくれる。この声を聴くと、頑張ろうと思うことができる。このような行動は、與古田先輩の性格から自然と生まれることだと私は思う。與古田先輩は不思議なオーラを放っているような気がする。

その魅力を感じ始めたのは、私が中一の時の夏ごろ。大会などが多くなってきて、與古田先輩と接する機会が多くなってきた時だ。その時期は、初めての大会で不安や緊張がありピリピリとした気持ちでいたのだが、そんな時に與古田先輩のやる気にあふれている様子や、不安や緊張を感じているだろうけど前向きに過ごしている姿を見て、自分も頑張らないと思える。私にとっての與古田先輩は、

いなくてはならない存在だ。

今回、與古田先輩に質問したいことは、まずなぜ硬式テニス部に入ったかだ。先輩の過去については触れる機会がなく、話したことがなかったからだ。そして、人を笑顔にできるところや、常に前向きな姿勢であることに自覚はあるのか、あるならば、なぜそうしているのかも質問したい。最後に、自分が感じる弱さはあるのかということだ。與古田先輩には努力する心もあって、部活の仲間が落ち込んでいたりするとギャグとかをして笑かしてくれたりして励ましてくれる。そんなユーモアのセンスもあり、個人的には欠点はないんじゃないかと思う。そんな中で、與古田先輩自身を感じている自分の弱さはあるのかということを知りたい。

取材依頼のやり取り

8月17日の朝、私は與古田先輩に取材依頼の「用紙」を送った。部活前ということもあり、起きていたのか、何分か経つと返信が来た。「時間どれくらいかかるん笑」。あれ、ちょっとめんどくさいのかな？そんなことを少し思ったが気にせず続けた。そのあとは、「どこでする？」などと取材に対して積極的に受け答えしてくれた。ラインだけでは決まらなかったので部活が終わり、與古田先輩のもとへ行き、取材の詳細の打ち合わせをした。

私「場所どこがいいとありますか？」

先輩「マクドかロツテリアにしょ。どこの店舗にする？」

私「與古田さん最寄り駅北野田ですよね。北野田のマクドまでいきましょか？」

先輩「え！来てくれんの？笑、さすがに申し訳ないから河内長野駅のところにしょ。」

私「分かりました！」

部活の練習場所が河内長野なこともあり、私の最寄り駅である河内長野駅を優先してくれた。やはり與古田先輩は他人のことも配慮してくれて優しいなと思う。私もこんな風に、常に周りに気を配れる人になりたいなと思う。

取材概要

日時：2023年8月18日 12時30分～13時

場所：ロツテリア河内長野駅前店

取材した方：與古田進悟先輩

自分との関係：一つ上の部活の先輩

取材が始まるまで

與古田先輩との話し合いの結果、河内長野駅の近くのロツテリアに決定した。先輩より早く着こう

などと考えながら、家から目的地までの道を自転車で走った。取材場所に着くと、席に荷物を置いて與古田先輩を待った。5分ほど経った頃だろうか、先輩が店に入ってきた。少し緊張してバタバタしたが、軽く挨拶したあと、先輩は注文しに行ったので、その間にメモ用紙や録音機器、筆記具などを準備して、聞くことを確認した。ハンバーガー、ポテト、コーラを抱えて戻ってきた先輩に早速取材を始めた。

硬式テニス部に入った理由

まず、硬式テニス部に入った理由を聞いてみた。與古田先輩の中学生より前のことは全く知らない。だから、どのようにして今に至るのかを聞いてみたかったのだ。

私「なんで硬式テニス部に入ろうと思ったんですか？」

先輩「もともと小学生の時にテニスクールに通ってたんやけど、その時にテニス楽しいなーって思ってた。ほんでそこからテニス強い中学校探したら清教学園が出てきて、硬式テニス部に入ってた感じがな。」

食べながら真剣に話してくれて、また、緊張しているのかたまに照れくさそうにニヤけるところが、おもしろいと思った。そんな感じだからとても話しやすく、言いたいことを伝えやすかった。

何が自分を突き動かす？

私が魅力を感じている、與古田先輩の常に前向きな姿勢。これは先輩自身は自覚しているのかなと思ひ、質問してみた。

私「先輩って常に前向きだと思うんですけど、それってなんか意識してるんですか？ それとも自然と無意識のうちにやってることなんですか？」

先輩「自分日常生活ではそんな前向きちゃうで笑。勉強とかしたくないし。まあ部活のことでは前向きにしてるけど、全国大会に行きたいっていう気持ちで真面目に取り組んでる。」

私は、この全国大会に行きたいという熱い思いが、先輩を無意識のうちに前向きにしていると感じた。人は気持ちひとつで自分を突き動かす原動力になるんだなと思ひ、少し感動した。

先輩の欠点

私は、先輩の欠点を考えた時あまり浮かんでこなかった。そこで、先輩が感じている自分の欠点とは何かというのを質問した。

私「自分の欠点ってありますか？」

先輩「そうやなあ、スマホに取り憑かれるところかな。ショート動画よく見るんやけど、これ見終わったら勉強しようと思うけど、結局そこからずっと見ちゃうこととかある。あとはすぐに他の人を批判するところかな笑。」

私「そういう欠点ってなおしたいと思えますか？」

先輩「なおさないとちよつとやばいかなあ笑。」

私的には目立った欠点はないんじゃないかと勝手に思っていたが、先輩自身を感じるなおしたい欠点もあるんだなあと思い、少し意外だった。

取材を終えて

取材を終えて感じる與古田先輩の魅力は、ひとことで言うと「目標に向かってまっすぐ、真面目に進んでいくことができる」だと思う。取材をするまでは、周りに元気を与えていて素敵だなあとしか思っていなかった。しかし、その裏には「絶対に全国大会に行くんだ！」という決して衰えることのない、強く熱い思いがあり、その目標を達成するために日頃の練習から真面目に取り組み、姿勢も前向きになっていたということだと分かった。

そして、先輩へのイメージも「憧れ」というぼんやりしたものから、「かっこいい」という明確な

もの変わったと思う。先輩のような、先輩がいることはとても嬉しいことだし、ペアを組んでいたことにも感謝の意しかない。私も先輩のように、自分を突き動かす何かを持っておいて、それを周りの人にも与えられるようなそんな先輩になりたいと思う。

「最後に写真一緒に撮ってもいいですか？」と聞くと、「おう、わかった」と言ってくれた。初めて撮る先輩との写真はこれから大切にしていきたいと思う。



現代の差別問題と礼儀

聞き手 花咲千恵

取材の動機

今回取材相手に選んだのは、私が入部している合唱部の顧問の金城十三先生だ。金城先生は私にとって「たよりになる理想の大人」だった。

金城先生は普段の部活のときによく面白いことをおっしゃったり、厳しく合唱の指導をして下さったりする。またおちゃめで、よく可愛いと思ってしまう一面もあり、親しみやすい人物だ。普通先生と話す時は多少の気まずさはあるものだと思うが、私は先生と話していても気まずさは一切感じない。

そんな金城先生の魅力は誰に対しても礼儀正しいということだ。私は始めにも書いたように合唱部に所属している。そして大会にも出場するのだが、そのとき先生は他校の先生方にいつも頭を下げて挨拶している。

また、私は中1のときに福島の全国大会に出場した。そのとき中高ともに全国大会に出場していた。中学部門は1日目で全国6位をとることができた。だがしかし、2日目の高校部門はタイムオーバーで失格となってしまった。タイムオーバーとは、コンクールなどで出場する全団体に与えられている合唱の持ち時間を上回ってしまうことだ。先生の指揮のもと、タイムオーバーになってしまっ

は順位も何もつかない。そのあと泊まっていたホテルでの打ち上げで、先生は私たち生徒に向かって頭を下げながら「申し訳ない」と謝った。先生からすれば私たち生徒は目下であるにもかかわらず頭を下げていて、当たり前のことかもしれないがそんな当たり前のことをできる先生のように私はなりたいたと思った。私と同期の合唱部員も金城先生に憧れている人はたくさんいる。

取材依頼の反応

金城先生に取材依頼をしたのは三者懇談期間中の部活終わりだ。私は先生にまず「授業担当教員からの添え状」を手渡した。普段から先生は親しみやすい人で先生が添え状を読んでいる間、私は受け入れてもらえるかの不安と緊張で心がいっぱいだったが、先生は「取材？ 私に？ 照れるわ。」と言って快く受け入れてくださって、その不安と緊張がふわりと解けた。そんなところも憧れるなど私はしみじみ実感した。

取材概要

日時…2023年8月1日 5時30分～6時00分

場所…サマーハウスかもめ（合宿場）

取材した方…清教学園社会科教師兼合唱部顧問 金城十三先生

自分との関係…部活の顧問

取材場所に到着してインタビュ어가始まるまで

金城先生との相談の結果、取材は合唱部の合宿の練習が始まる前になった。練習は朝6時半から始まるためインタビューはとても早い5時半からになった。だが先生は嫌な顔一つ見せず「では5時半に練習場所にいますね。」と言って下さった。

私は15分ほど前に練習場所に行つて先生を待とうと思ひ練習場所に行つたが先生はもうとつくに練習場所に来ていた。「すみません。」と私が言うに先生は「いえいえ、遅れてないんですから謝る必要ないですよ。」と笑顔で言つて下さった。「ここには他の人もいるので上に行きましようか。」と先生は言つて下さった。練習場所は大きい方と小さい方の二つあるのだが1階の大きい方の練習場所には他の合唱部員もいたため場所を変え、2階の小さい方の練習場所で取材を行うことになった。2階へ移動する時先生は親しげに話しかけて下さった。

礼儀正しくするようになったきっかけ

インタビューを始めた。

私「いつから礼儀正しさを気にするようになりましたか。」

先生「私は礼儀正しいですか？」

私「はい。」

先生「なぜそう思う？」

私は始めに自分がなぜ先生をインタビューの相手に選んだかということを話そうと思っていたが緊張してそのことを話すことを忘れていた。しかし、先生が言って下さったおかげで話すことができた。

私「学校の外に行ったときに金城先生はいつも他校の先生方などに礼儀正しく接していらっしゃるじゃないですか。だからその先生方も金城先生に親しく話しているのだと私は思ったので礼儀正しくないなって思いました。」

先生「ありがとうございます。えーっと、質問に対する答えですけどいつからかと言われるとそれはつきりとはわかりません。でも、礼儀正しくしなさいと私の父や母から当然つけられたと思います。でもそれはみなさん同じじゃないですか。それから礼儀正しい方がいいでしょ？」

私「確かにそれは絶対そうですね。」

先生「ですよ。だからいつも礼儀正しくありたいないつも心がけています。だからこれが普通なんじゃないかと。他の方と私がどう違うのかは私にはわからない。」

私「そうですね。」

先生「あともう一つ大人の方に礼儀正しくする、だけじゃなくて生徒に対しても同じだと思う。だ

としたら他の方とそこが違うのかもしれない。大人の方に礼儀正しくして生徒に対して礼儀正しくしないのはおかしい、と思うんですね。生徒も他の人も、大人も子供も同じだと思います。怒る時とか冗談を言う時は礼儀正しくする必要はないと思うんですけど、普段接する時には誰に対しても礼儀正しい方がいいんじゃない？ と思います。」

私の身の回りには部活動を含め年上の人が多く部活では先輩や先生に礼儀正しく思っていた。しかし、中2になったことで先輩ができた。私は先輩にはどう接するべきかまだわからなかった。だが、先生にこのことを言われ、私は先輩にも出来るだけ礼儀正しくしようと思った。

礼儀正しいと思うとき

私「先生が礼儀正しいと思う人とか、憧れている人っていますか。」

私は礼儀正しい人といったら金城先生が一番に思いつくが、先生はどうなのだろうと興味があったので聞いてみた。

先生「礼儀正しいと思っている人や憧れている人？」

私「はい、この人礼儀正しくてすごいなとか。生徒とかでも大丈夫です。」

先生「特定の人、っていうのはないんですけど、たとえば野球部の生徒、私普段高校棟にいるので高校の野球部の生徒なんですけど、必ず立ち止まって挨拶してくれる。他の生徒はすれ違うときに歩きながら挨拶するんですよ。まあそれが普通ですよ。」

私「はい。」

先生「野球部は絶対に歩きながら挨拶しないんです。一旦止まってから挨拶する。まあそれは他とは違うよね。そしてとても好感が持てる。ああ、素晴らしいなど。だから私も申し訳ないですけど普段先生方や生徒と挨拶する時には立ち止まらないですけど、外に出た時に誰かにご挨拶する時には必ず立ち止まって挨拶するようにしてます。まあそこが他の人と差をつけてますよね（笑）」

私「（笑）」

先生「まあ学校でいちいち無限に立ち止まって挨拶はできないので普段はそうしてませんけど。」

確かに他校の先生方などと挨拶されている時は、先生は立ち止まり挨拶をしているのを何度も見たことがある。これは野球部を見習ってやっていることだと知り私もこれから礼儀正しい、好感がもてると思った人は見習って真似するようにしようと思った。

礼儀は返ってくる

私は礼儀正しくすることでいいことがあるとその分礼儀正しくしたいと思えると思ったので、日頃

から礼儀正しくされている金城先生に礼儀正しくして良かったことを聞いてみた。

私「先生が礼儀正しくして良かったなと思ったこと、出来事とかありますか。」

先生「あー、良かったこととかはないですけどね（笑笑）でもね、若い頃よりも今の方が礼儀正しいと思うんですね。」

私「はい。」

先生「若い頃はたとえば生徒に対してよりしつかりしていなければいけないんじゃないか。みたいな気持ちが強かったんじゃないかと思うんです。年齢が近いのでシャキッとしないと舐められるんじゃないかと、先生らしくないんじゃないかとかね。まあ不安があっただと思います。だからあんまり礼儀正しく丁寧にする余裕がなかったかもしれないです。でもだんだん歳がいつてきて、まあこんな感じなんですけど、すると生徒相手だったらね、相手の生徒もすぐ礼儀正しく接してくれるんですよ。当たり前と思うんじゃないか。大人に対して礼儀正しく接して相手の大人の人も礼儀正しくしてくれるのは当たり前のような感じしますけど、でもきつと私が礼儀正しくして良かったと思うことは相手の人も礼儀正しくしてくれることちゃうかなと思います。生徒を見ると特にそう思う。」

私「そうなんですネ」

私も他の人よりも金城先生に対しては礼儀正しくしている。しているというよりしてしまうという

方が正しいかもしれない。相手が礼儀正しくして下さっているのだからこっちも礼儀正しくしないと、私はこういう感覚だ。やはり礼儀正しさにはすごい力がある。

先生「生徒から礼儀正しくあるってことは素晴らしいことじゃない？」

私「はい。でも合唱部は金城先生のおかげで礼儀正しくできているのかなと私は思います。」

先生「あーなるほどね。」

私「私も合唱部に入ってから礼儀正しくすることを気にするようになって。」

私は合唱部に入ってから色々な経験の中で一番学んだのは礼儀正しさだった。そしてその礼儀正しさはどれも金城先生から学んだことだった。

先生「素晴らしいことやね。」

私「ありがとうございます。」

気をつけるべきこと

私は先生のようになりたいと思っているため、まずは先生に一步近づくために先生の真似から始めようと思った。そのために今先生が礼儀正しくするとき気に気をつけていることを聞いた。

先生「礼儀正しくする時に一番気をつけていること？」

私「はい。」

先生「外面的なことと言うと笑顔とか丁寧とかですけど、多分内面的なことが大事ですよね。」

私「はい。」

先生「それは相手を尊敬することだとおもいます。形として礼儀正しくすることも意味があると思うけど、なんで礼儀正しくするかっていうと、相手のことが大切、尊重してるといふか尊敬してるといふかリスペクトしてるからだと思うんですよ。そうでないと意味がないと思うんでね。私は相手が子供であっても尊敬、というの大袈裟に聞こえるかもしれませんが尊重、尊敬しなければいけないんじゃないかなと思います。人間としてね。」

私は先生の話を聞いて「私は今まであまり意味のない礼儀正しいという行動だけをしていたのかもしれない。」と思った。私は今まで礼儀正しくありたいから礼儀正しい行動をしようと思ひ、内面的には全く礼儀正しくなかったのだ。いつも金城先生から礼儀正しくしていただいている時に自分も礼儀正しくしようとするのは憧れもあるが内面的にも外面的にも礼儀正しくしていただいているからだとわかった。

礼儀とは

私「最後の質問なんですけど先生にとって礼儀ってなんですか。」

これは私が一番聞きたかったことだ。なぜなら私が先生に感じた「魅力」であり先生のように礼儀正しくなるには先生の持っている礼儀の価値観を知るべきだと思ったからだ。

先生「やっぱりさっきの答えと同じですけど相手を尊敬することだと思います。生徒を見下していたりみくびっていたりすると礼儀正しくはできないんじゃない？ 生徒の年齢は自分よりかはたとえばあなたやったらもう40歳ぐらい下ですよ、40どころじゃない44歳ぐらい下ですよ（笑）たとえばそうであつたとしても一人の人間じゃないですか。それは尊重されるべき、硬い言い方で申し訳ないですけど素晴らしいことです。一人の人間が生きていることはね。それはもう尊敬の対象だと思うんですよ、そう言う気持ちが礼儀なんじゃないかな。」

先生「そういえばね、礼儀って言う言葉に当てはまるかはわからないんですけど、まあ尊敬や尊重に当てはまる話なんですけどね。」

私が高校生の頃に阿部謹也（あべきんや）さんと言う人が書いた『自分のなかに歴史をよむ』って本を読んだんですよ。私、歴史が好きで歴史の先生になったんですけど、阿部謹也さんの『ハーメル

ンの笛吹き男』と言う本を読んで、めっちゃ感激して歴史めっちゃおもしろすぎる、歴史の先生になりたいと思ったんですね。で、その『ハーメルンの笛吹き男』と言う本は歴史を研究する本なんですけど、同じ阿部謹也さんの本を他にも読んでみたいなと思ったんですね。で、『自分のなかに歴史をよむ』って本がいいって何かに書いてあったので買って読んだんですよ。それは阿部謹也さんが今までどんなふうに生きてきたかって言う本だったんですよ。歴史の本じゃなくて。

彼が高校生の時に大学の先生の研究会かなんかに参加したと言う話で、その時にみんな大学の研究者の先生ばかりで自分一人高校生だった。みんな難しい学問の話をして議論している。それで一番中心の先生が「阿部くん、あなたはどう思いますか。」って聞いたと。そしたら阿部謹也さんはとても答えられなくて「わかりません」といった。するとその先生が「そうですか」といってまた議論が続いた。その時にこんな偉い先生の中に高校生の自分が一人ぼつんといるのにそう言うふうに「あなたはどうかおもいますか」って聞かれてとても嬉しかったと言う話があったんですよ。それに近い気がします。」

私「平等みたいな感じですか？」

先生「平等にも当てはまるかもしれないね。でも平等っていうのは私の中ではちよつと違う。同じに扱わなければいけない、みたいな感じがするんですよ。差をつけてはいけないみたいな。そういうことよりもその話の先生にとっては相手が高校生であろうが関係なかったと思うんですよ。同じ仲間だと。同じ研究をする志を持った一人の人間として扱ったと思うんですよ。その時に偉い大学の

先生だとか、そもそも偉いかどうかすらも関係ないと思うんだけど、大学の先生にとっては高校生とかどうでもいいことだったということが彼に伝わった。少なくとも私はそんなふうにもその本を読んだんですよ。また、たとえば同じ学校で生活している先生も生徒も、同じ職場で働いている先輩も後輩も、それから同じ部活で練習している指導者もその指導を受ける人もお互いを尊敬尊重することが大事。って感じですかね。」

先生は部活動中もよくこんなふうに大きなことを私たちに伝えるように話してくださる。私は阿部謹也さんがどのような人かは知らないが、きっと阿部謹也さんではなくても誰だって対等な立場で扱ってもらえて嬉しいと感じると思う。私はまだ中学生で子供だから誰かを対等な立場で扱うということとはできない。けれど、いつか大人になってとても年が離れている年下の人とも関わり合うことがあったら、私は当たり前前に人を対等な立場で扱うような人になりたいと私は思う。

取材を終えて

取材を通してわかった金城先生の「魅力」は、「どのような人でも同じ、対等な尊敬するべき人として扱うこと」だ。これは礼儀に限らず、今話題の差別問題にも関わることだと思う。社会一般では平等という言葉が使われているが、それは無理やりそうさせているという感じがある。だからよくニュースなどでもまだまだ差別問題が流れるのだ。よくこういう時に一人一人が差別意識をなくすなど

ということが言われているが、差別意識をなくすることはそんなに簡単なことではない。差別意識をなくすにはどんな人でも対等な立場の人間として扱う行動、つまり誰に対しても礼儀正しくすることでそういう差別意識とかはなくなるんじゃないかと私は思った。

私はこの取材でより金城先生のようになりたいと思った。しかし、取材前と後で変わったこともある。それは、取材前は「金城先生のように礼儀正しくなりたい」と思っていたが、取材後の今は「金城先生のように誰に対しても当たり前のように対等な立場の人間として扱う人になるために礼儀正しくしよう」というような思いに変わった。

「ありがとうございます。これで質問は以上なんですけど最後に写真を撮らせていただいてもよろしいですか。」と聞くと先生は「写真撮ってくださいーい。」と言ってくださいました。「傾いてますけど大丈夫ですか？」これで取材終わりと気が抜けていた私はスマホが傾いていることに気づかず写真撮ろうとしていた。「すみません。」と私が言うと「大丈夫ですよ。」と優しい声で言ってくださいました。2人で撮った写真は何度見ても金城先生の優しさがにじみでていると私は思う。



弟へのインタビュー

聞き手 樋田大和

私が取材したい相手は私の弟（純一）だ。

私の弟は本当によくわからないやつだ。キレた、と思いきやへらへらしたり、突然元気がなくなったり、情緒不安定にも程があると思うような奴だ。例を挙げると、ある時弟と一緒に遊んでいたのだが、ちよつとの事でまた喧嘩になったのだ。その時はもう夜だったのでどちらも拗ねて寝たのですが翌日になって弟と会うと昨日のことは何もなかったように笑って話しかけてきたのだ。それが普通なのかも知れないが私は少し怖いと思った。だけどそこに魅力を感じているのだ。

もちろんそれだけではない。私には兄と弟がいて、全員ラグビーをしていたけど私は勉強との両立ができて辞めてしまった。けれども弟は、ラグビーで大学に行った兄に憧れて今も人一倍努力しているところも魅力に感じた。ラグビーは決して楽なものではない。とてもしんどいし痛い。しかし、それでも頑張って練習している弟は「カッコいいな」「すごいな」と思う。他にも何事にもチャレンジする性格や案外優しいところなどがあり、一番身近で魅力を感じる人だと思った。

インタビューを依頼するまで

インタビューの事を弟には夕食の時に話したが、他の家族からは「なんで純一なの？ お父さんで

いいやん」と反対されたが弟は喜んでいたので、家族からの反対を押し切って弟、純一にインタビューを依頼した。「何を言えがいいの?」と不安そうに聞いてきたが「気楽に答えてくれたらいいで」とかえした。あんまり緊張されたらインタビューにならんし、そんな気持ちにさせたくなかった。でも取材するまでずっと「まだ取材しないでもいいの?」と聞いてきたので結構楽しみにしていた。

取材概要

日時 2023年8月23日 8時〜8時15分

場所 家の自分の部屋

取材した方、自分との関係 私の弟 樋田純一さん

インタビューをし始めるまで

私が他の課題をしていたら、弟が「インタビューせーへんの?」とされて欲しそうに聞いてきたのでインタビューをはじめようとした。取材場所を決めて、相手宛の手紙を渡し、それを読んでいる間に用意を始めた。正直弟にこうして真面目に話すことが全くないので結構緊張していた。けど弟は全く緊張していないので、「緊張しないの? ヤバ」と口にだした。

弟は「気軽にしろっていったのは誰ですか」とすこし馬鹿にされた。確かにそうやったなと思った。そこで準備が終わり弟も手紙を読み終わったところで録音することを言うと「録音するの? マ

ジ？」と言った。「どうせ先生しか読まないから大丈夫やって」といったらOKをもらった。

取材前の雑談

私「いきなり取材に入ると下手に緊張してグダグダになりそうやから雑談せん？」

弟「OK、じゃあ何話すん」

私「最近なんかおもしろいことなかった？」

弟「最近ねー、あ！あのさ、この前さ友達と動画とりあって遊んでたんよ」

私「変な遊びばかりすんな、オメーさんは」

弟「でさ、おれのとった動画が馬鹿おもしろかってん」

その動画は弟がスローで叫んでる動画だった。それを二人で見ても死ぬほど笑った。

私「アホらしいwww、今日はあなたのそう言うところも取材するから覚悟しなさいよ」

弟「仕方ねーな、やってやんよ」

私「それじゃあもう取材はじめっか？」

弟「なんでもいいよ」

私「じゃあはじめるか」

そうして取材は始まった。

弟が語るラグビーについて

まず、最初に弟のラグビーについてきいてみました。

私「いつも頑張ってラグビーを頑張っているけど、どうしたらそんなに頑張れるの？辞めたくならんの？」

弟「ラグビーは普通に楽しいから辞めたくないし、ラグビーを辞めたら友達と別れる事になるからいや」

いつも結構生意気なところもあるのですが中々かわいいところもあるんだなと思った。やっぱり言う取材みたいなことしないとわからないものなんだなって改めて実感した。

私「でかい相手にタックルするのはこわいし、中々の覚悟がないと出来ないけどなんでできるの」

弟「この時に怖がつていかなかったら後で親にボコボコにされるからいま頑張ってタックル行かないとアカン」と答えたのでそこところが小学生らしいと言うか、末っ子らしいと言うか、でもなんとなく共感した。うちの父はそう言うところにはとても厳しいので、私もしていた時は全く同じ事を考

えながらラグビーに励んでいた。こう言うところがやっぱり兄弟なんだと思った。そこで今度は弟の方から質問してきた。

弟「て言うかさ、ラグビーのこと聞くんやったらこーちゃん（私の兄、浩介）に聞けばよかったのに
なんで俺にしたん？」

私の兄はラグビーで高校、大学にいき、高校時代は花園（野球で言う甲子園みたいな大きなフィールド）にでたほどラグビーに熱心な人だったからだ。

私「えー、だってさ、いま大学の寮に行ってるからまずインタビューできひんし、なんか自分より
目上の人にインタビューするってなったら緊張でそれどころじゃないし、俺は純一にしたかったから
よー」

弟「全く、泣かせてくれるじゃあないか」少し照れくさそうにしているのを見て、心の中で微笑んだ。

情緒不安定の真実

次に本題。

私「なんでそんなに情緒不安定なん？喧嘩した後なぜヘラヘラして接してくるの？」

弟「情緒不安定に見えるかもしれないけど、あれはみんなを笑わせる（笑顔にする）ためにボケてるだけ。ヘラヘラして謝りにいくのは、早く仲直りしたいから自分が下になって謝りに行っている」

と教えてくれました。さっきは子供らしいみたいなのを言ったがこういう優しいところは大人っぽいと思う。正直言って日常では本当に子供らしく、そんな一面は見られないので本当にビックリした。

私「それってホンマ？」

弟「信じるか信じないかはあなた次第」

正直信じられないけど嘘つく必要ないからなと思った。

取材を終えて

取材を終えて私は弟の意外な一面を知った。と言うか多分二、三面ぐらい知れた。最初はただのクレージーボーイなのかと思ったが、このようなことを通して目の前の事に対して覚悟を決めて必死で取り組んだり、外見からではわからないけど、案外寂しがりだったり、他にもみんなのために体をは

れる優しさだったり自分よりも相手を優先できる心の広さを知る事が出来た。だけどまだよくわからない。大人っぽいのか子供らしいのかよくわからないやつだ。つまりインタビューしてもあんまりわからなかった。そこら辺は残りの人生一緒に暮らして理解を深めていこうと思った。



尊敬できる理由

聞き手 城ヶ崎華

取材の動機

今回私が取材相手に選んだのは、バスケットボール部に所属している同学年の宇田川美里さんだ。

宇田川さんとは1年生の頃同じ部活動に所属していて仲良くなり、部活がない日や学校が休みの日は2人だけで遊んだり部活動の友達と遊んだりもした。宇田川さんとは好きな歌手やバンドの趣味が合うためよくおすすめ曲を共有したりする。なので、宇田川さんと遊ぶ時は2人でも沈黙することがなく、宇田川さんが話題を振ってくれることが多く、明るく話してくれるのでとても時間が経つのが早く感じる。

宇田川さんはいつも元気で初めて会った人にも積極的に話しかけていて私にはできないことなのですごいと思う。私と初めて会った時も宇田川さんから話しかけてくれた。彼女が話しかけてくれていなかったら今ほど仲良くなれていなかったと思う。

私は今回の取材で宇田川さんに、絶対にしたい質問があるのだ。それは、どうしていつも元気で色々な人に声をかけられるのかだ。彼女は友達でも、後輩でも、先輩でも、先生にでも、みんなに同じ態度で接していてそれは誰でも簡単にできることではないと思ったからだ。なので今回、宇田川さんの私がまだ気づけていないような他の魅力も見つけて今まで以上にもっと彼女の魅力について知り

たいと思ったため、今回の取材相手に選んだ。

取材依頼のDMを送って日程が決まるまで

夏休みに入る前、宇田川さんと社会のレポートを書くために一緒に歴史的なところに行くという約束をしていたので、その日程をDMで決めた。その連絡をしている時に取材のことをお願いした。

取材概要

日時…2023年8月10日 17時00分～17時40分

場所…スターバックスコーヒー なんばCITY店

取材した方…宇田川美里さん

自分との関係…友達

インタビューが始まるまで

15時になんば駅に宇田川さんと待ち合わせをした。まず取材の前に社会のレポートを書くためになんば駅から歩いて15分～20分くらいのところにある、難波八坂神社に行った。その後なんば駅まで戻り、スターバックスコーヒーで取材を始めました。

部活動について

私はまず、最近のことについて聞こうと思った。なぜなら夏休み中であまり会えていなかったのも最近のことから聞いた方が話しやすいと思ったからだ。

私「最近、部活はどんな感じですか」

宇田川さん「最近部活は後輩が入ってきたので、先輩らしくいれてるかどうかな不安なんですけど、でも後輩がしっかりしていて逆に自分が先輩らしくなっていないって思うことがよくあるので、ちょっと不安ですねこれから。」

私はてっきり後輩が入って来てともうれいなどのポジティブな答えが返ってくると思っていた。

私「後輩とは仲良くできそうですか」

宇田川さん「えっと、後輩の方が結構しっかりしてるし真面目だったので、けっこう頼りになるところはすごくうれしいもうどんどん頼りたいなーっていうかこっちが頼られる側にならないといけないんですけど、やっぱり頼っちゃつてるところがあるのでこれから先輩としてしっかりと、部活をやっていけるようにどんどん学んでいきたいなと思います。」

私「なんでいつもそんなに後輩でも先生でも同級生でも関係なく同じように態度が変わらずに挨拶ができるんですか」

宇田川さん「小学校の頃は、仲のいい友達には結構強く接しちゃうことがあって逆にあんまり関わりがなかった子とは結構弱く接したりしてで、あのそれを先生に1回怒られたんですけど、それでそこからなんかみんな対等に接さなきゃいけないんだなってやっと気づいて小学5年生ぐらいから意識してみんなに対等に接せれるように勉強しました」

私「対等に接するために特にどういうことを意識しましたか」

宇田川さん「みんな同じ立場だということを気をつけながらいつも話してて相手がどんな気持ちになるかとか、例えば相手からおはようと言われたときに選択肢が頭の中に浮かぶんですけど、無視するとか、おはようって返すとか、会釈するだけとかそんな感じでパターンをバーって瞬間的に並べて、それでバーって消していつてその時に一番最適な答えを導き出せるように小学校の頃はそうしてました。でも最近は、すぐに挨拶が返せるようになりました。だから昔から挨拶ができるわけではなかったです。」

話していて、宇田川さんは初めから人に挨拶できるっていう人じゃなくて自分で気づいて努力してできるようになった人だということがわかって、新たな魅力に気づいた。

私「バスケットボール部に入部した理由は何ですか」

宇田川さん「バスケットボール部に入部した理由は、また小学校の話になるんですけど小学校四年生のときにバスケットボールの授業があつて、そこで小指を骨折してしまつたんです。それで、あのバスケットボールが本当に嫌いになつてどうしてもバスケットボールを見返してやりたい、復讐してやろうと思つてバスケットボール部に入りました。」

理由を聞いて私は、とても面白い理由だと思つた。私だったらトラウマになつてもう一度チャレンジする気持ちにはならないと思うからだ。

学校の友達について

私「挨拶と同じように誰にでも同じ態度で接していると思うんですけど苦手な子とかあまり気が合わない子って誰にでもいるじゃないですか、だからそういう子にはどういう風に接しているんですか」

宇田川さん「えっとまあ苦手な子はいるんですけど、その私は苦手な子がいたら苦手な子の嫌なところばかり見てしまうので、いいところを見て、例えば朝元氣に挨拶してくれるとかよく笑つてるとかその子のいいところを見つけてできるだけ嫌にならないように、どうやったら仲良くできるかを考えて接しています。」

普通は、嫌いになったら嫌いな部分にしか目がいかなくなって、もっと嫌いになっていくはずなのに自分から相手のいい所を探しているということが人として本当に尊敬できると思った。

私「逆にどういう友達とか学校の人を尊敬していますか」

宇田川さん「えっとやっぱりいつでも笑顔を絶やさない人っていうのはやっぱり尊敬できます、あのやっぱりいつも笑顔な人っていうのはやっぱり周りも笑顔にしてくれるのでそういう人が尊敬できるなと思います。でも逆にいつもなんかイライラしてなんかネガティブな発言ばかりするような人とはあんまり近づきたくないなってしまうし、でもそんな人にならないようにするためにいつも、笑顔練習って言ったら変ですけど何でもポジティブに考えるようにして自分が周りの人を幸せな気持ちにできるように考えて行動するようにしています。」

取材を終えて

取材を通じてわかった宇田川さんの「魅力」とは、一言でまとめると「努力ができる人」だと思う。取材相手に選んだ当初は、元から挨拶ができ、元氣な性格な人だと思っていたが、取材をしていくにつれ宇田川さんの印象は大きく変わった。なぜなら宇田川さんは元からできるんじゃないかって、自分で人の気持ちまで考えて相手と接することを第一に考えて接するように努力したんだとわかったからだ。

「人のことを考えて行動するように」と、よく言われるが、それを本当に継続してできる人は本当に少ないと思う。だからそれを普通にできることは宇田川さんの大きな魅力だということに気づいた。新たにわかってよかったことは、誰にでも同じように接することが出来る理由だ。宇田川さんは、人にも上も下もないからみんなに同じように接することが出来るように小学生の頃から気をつけていて、最近ではそれが普通になり、あまり気にしなくても同じように接することが出来るようになったと言っていた。これを聞いて、私は習慣になるほど続けたことがとてもすごいと思った。最後に宇田川さんと記念写真を撮った。



何事にも意識することが大切

聞き手 藤崎風沙

○どうしてかおりに取材をしようと思ったのか 取材動機

私が今回取材をするのは私の大親友、西園寺香（かおり）だ。今中学校は離れているが、LINEでちよくちよく連絡を取っていて、とても仲がいい。だが、かおりと私は特殊な出会い方だった。

小学三年生のころ、クラスは別だったが毎回登校してそれぞれのクラスにつく時間が同じだったため、よく見る子だと思っていた。そして、何日か経つと毎回クラスに入るときに「べーっ」としながら入るようになっていた。別に喧嘩も何もしていないし、まずそもそも名前を知らない人となぜこのような出会い方になってしまったのか今でもわからない。

小学四年生になったとき、同じクラスになった。いつの間にかとても仲良くなってオンラインでゲームをしたりそれぞれの家で遊んだり、私の家で遊ぶときは帰るときにはもう暗くなっているから、私のお母さんがかおりの家まで送ることもあった。あの時喧嘩はしてないが、「喧嘩するほど仲がいい」という言葉はこういうことなのかなと思った。

その私の大親友に大事件が起こった。かおりのお父さんがガンで亡くなったのだった。その亡くなる前からお父さんがガンなのを知っていて、よくかおりとゲームするときに声が聞こえていたし、一緒にゲームしたことだって何回もあった。亡くなる少し前の時も声は聞こえていたから、多分急変し

たのだろう。

お父さんが亡くなったことは、LINEで知った。その時、直接会えず、LINE電話して話した。かおりは泣きながら事情を話してくれて、最後には「なぎさ、親は大切にしーや」と人のことを気にしていた。私は親しい人が亡くなったときには、人に打ち明けることで精いっぱい、人のことを気にするなんてできない。

この時だけではなく、かおりはいろんな人の立場になって考えることができる。私は人の立場になって考えることが苦手なので、人の立場になっていつでも冷静に考えることができるかおりに私は魅力を感じた。また、かおりは人の立場になって考えることができるからか、友達がいっぱいで誰にでも話しかけてもらっていた。このように友達いっぱい、友達思いなところにも、魅力を感じた。私がかおりに対して、たくさん魅力を感じていたため、私はかおりに取材をしようと思った。

○取材依頼の反応

私がかおりに取材依頼をしたのは、夏休みが始まった直後だった。私はかおりにまず、先生からの添え状を渡した。久しぶりに会う友達だったため少し緊張したが、取材相手のかおりがとても親しみやすい空気にくれたため、聞きたいことをちゃんと聞くことができた。そして、取材依頼をしたときに、「私？ 嘘やん 笑え、でもめっちゃ嬉しい」と受け入れてくれた。相手も久しぶりに会うのに、私はしゃべりにくくなったら、色々話題を言ってくれて、いつも相手を気遣っているんだと感

じて、また魅力を感じた。

○取材概要

日時…2023年8月20日 14時～14時30分

場所…取材相手の家（かおりの家）

取材相手…小学校時から親友の西園寺香

自分との関係…小学校からの親友

○取材場所に到着してインタビューが始まるまで

相談した結果、取材はかおりの家ですることになった。私の家からは自転車で十分くらいの場所にある。少し前遊びに行った時は、車で来ていたので家の前で待っていたのだが、今回はもう先に家についており、笑顔で歓迎してくれた。録音するときも、「録音してもいい？」と聞くと、「全然大丈夫やでー！」とこころよく歓迎してくれた。

○小学校で初めて会った時の話

かおりも、小学校の時、教室に入る前に「べーっ」としながら入ったのを覚えていたらしく、その時、なぜ知らない人なのに一緒にしたのかと聞くと、「ノリでやった。笑」と答えた。小学校と同じ

ようなテンションでとても久しぶりな感じだったので、今も変わっていないんだな、と思って、少し嬉しくなり、緊張や不安が一気に解けた。

○人の立場になって考えるようになったのは

私「かおりは、私から考えてんだけど、人の立場になって考えるのが上手やと思う。人の立場になって考えるために何かしてる、というか、気にすることとかある？」

かおり「あるよー。これは普通のことかもしれないけど、やっぱり、その人がしたくないことはしないようにしてるよ。あと、その人が苦手なこととかはうちが手伝ったりしてるよ。」

私「あー 確かに普通のことかもしれないけど、できてる人ってあんまりいい気がする。私も実際あんまりできてないし笑 そういうところすごい尊敬する。」

かおり「そう？笑 ありがとう」

かおり「あとね、自分の意見を押し通したりはしないようにしてるよ。 人の意見もちゃんと捉えつつ、自分の意見も少し入れるみたいな感じ」

私「なるほど もうほかに気にすることとかある？」

かおり「もうそんなくらいやでー 次いこー」

私「おっけー」

私はこの会話で、確かに普通のことかもしれないが、それをちゃんと自信を持って言えるということはちゃんと自分でも意識しているんだなと感じ、また魅力を感じた。

○いろいろな人と関われる

私「次なんだけど、また今回も私が思ってるだけなのかもしれない 笑」

かおり「また？ 笑 まあいいよ」

私「かおりってさ、いろいろな人と友達やん」

かおり「ん？ うん 笑 それがどした？」

私「いろいろな人がいるやん。けど、かおりってどんな人でもめっちゃ仲良いやん。そういう友達関係で何か気にしてることもかある？」

かおり「あー また普通のことかもしれないけど、人によって態度を変えないようにしてるよ。実際できてるかはおわからないけど 笑」

私「なるほどね かおりできてると思うで！」

りな「そうか？ 笑」

私「うん ほかにある？？」

かおり「えーとね さっきも言った通り、相手の話をちゃんと聞いて、自分の意見も取り入れて、話を進めたりしてるよ。」

私「かおりって聞き上手なんじゃない!？」

かおり「そうなん?笑」

私「うん! かおりと話したら話しやすいなーって思ってたん」

かおり「そうなん!よかった笑 例えばなんやけど、他の子が喋ってる時には頷いて、ちゃんと反応したり、話す話題がなくなったりしたら私から話そうとしたりしてるよ」

かおり「やっぱり聞き上手やん! なるほどね」

会話のように、常にいろんな人に気を使っている。これもいろんな人と仲良くなるための秘訣の一つなのかもしれないと思った。また、私がしゃべりにくくなったらいろんな話題をはなしてくれたので、いつも意識していることがとても伝わってきて、本当にすごいなと思った。

○いつも冷静

私「かおりってみんながパニックになってる時とかでもちゃんと冷静に判断して動くやん。そこに關して大切にしていることとかある?」

かおり「あるよ まずパニックになってる時こそちゃんと深呼吸して心を落ち着かせたりしてるよ。そこからちゃんとした判断ができるように努力してるよ」

かおり「あと、これは冷静っていうのかはわからないけど、何かやらかした時はちゃんと最初っか

ら見直したりしてるよ」

私「焦ってあてずっぽうにやるんじゃないくて、最初っからちゃんとあってるかを検算するときみに確認したりするってことね」

かおり「うん」

私「ありがとうございます！それじゃあ最後の質問もお願いします。」

かおり「はい」

最後の質問は今まで出てきた質問と似ているのだが、私が魅力を感じてきたものの中で1番気になっていた質問だ。

○人と関わる上で1番大切にしていることは

私「最後の質問です。人と関わる上で1番大切にしていることは？」

かおり「1番は相手に、というか、自分にも言われて不快に思うようなことを言わないことかな」

この発言からしても、自分の立場から考えている。相手はどう思っているかがわからないから、まず自分が言われてどう思うのかを真っ先に考えるのだそうだ。

かおり「あとはね、相手が困ってそうだったらできる限り全力で助けることかな」

私「かおりらしいな笑」

私「取材終了です！お疲れ様でした！ありがとう！！」

かおり「いえいえ、力になれたならよかったよ」

○取材を終えて

取材を通して分かったりかおりの「魅力」は、「いつでも人の立場で考えて、常に相手のことを気遣っているところ」だ。取材する前も、いつも人の立場になって考えていることが多いなと前から思っていたのだが、人によって感じるものは違うから、まず自分ではどう感じるのかを考えることが大切なんだと分かった。そして、かおりはさらに、それを瞬時に考えて行動に移すため、いつも冷静さを保っていられるのではないかと思った。

私は、今回の取材する前は、「かおりのように友達思いでいつでも冷静な人になりたい」と思っていたが、取材後は、「かおりのように、まずは自分がどう思うかを考えて、焦っている時こそ慎重に行動したい」というような思いに変わった。

でも、改めて考えてみると、相手の立場になって考えるのも、焦らずちゃんと慎重に行動するのも、友達思いなのもとても大切なことだが、そのような人になりたいのなら、まずは意識することが一番大切なのではないかと思った。最初はちゃんと意識しながら行動をして、それを何年も意識し続

けてからこそ、今のかおりのように、意識しなくても、素で人の立場になって考えたり、冷静に物事を判断したりできるのではないかと思った。意識することは友達関係や、人との関わりだけじゃなくても、すべてのことに対しても言えることだと思う。今回の取材で、人との関わりについて深く考えることができたが、それよりも大切なのは常に何事に対しても意識することだと感じた。

「ありがとう！ これで質問は以上やで！ 最後に写真撮っていい？？」と聞くと、かおりは「いいよー！ 撮ろー」とまた元気に笑顔で受け入れてくれた。かおりは、最後に「私を選んでくれてありがとう！ これでよかったんかわからんけど笑」と言ってくれた。この言葉にもかおりの優しさが入っていると思った。



セブンイレブン

聞き手 永野薫

取材動機

今回取材相手に選んだのはセブンイレブンK店の七瀬士郎さんだ。

私がセブンイレブンK店の店員さんに魅力を感じた理由は2つある。1つ目は、一人に限ったことではなく店員さんみんなに感じたことで、何かを買った後にお互いお礼を言ってその場を後にするのだが、店員さんはそれで終わることなく必ず毎回店を出るときに「ありがとうございました。またお越しく下さい」と言ってくれるのである。

私がここに魅力を感じたのは、私は店員さんのほうを振り向きもしていないのにもかかわらず深々とお辞儀をしてくれるからだ。（これは前に並んでいた人に見て知った）

もう一つの理由はとある店員さんの接客がきっかけだ。私の前に並んでいた一組の親子の、息子さんのほうが、店員さんのうちの一人の人に向かって「お姉ちゃんここで働いてたん!？」ときいていたのである。その男の子はまだ小学生にも満たない子で好奇心旺盛といった様子だったが、お姉ちゃんと言われたほうの店員さんは少し恥ずかしそうにしながらも自身が接客していた人にはちゃんと接客をしていたのである。

恥ずかしかったからなのかはわからないものだが、プロ意識がすごいなと思ったからだ。

電話で取材依頼をして日程が決まるまで

最初は友達と実際に店に行って商品の管理をしていた店員さんに、授業担当の山崎先生と南先生からの手紙を見せて詳細を説明し、取材の許可を確認した。実は、そこに至るまでが長くて、私がアポ取りをするまでずっと本当に取材相手がここで良いのか、とずっと迷っていた。実際に聞くのはすごくハードルが高いし、緊張するからだ。それでも一緒に行ってくれたその友達は「大丈夫やって！ かおるちゃんが取材のアポ取れたら、あの梅のお菓子おごってあげるから！」と言ってくれた。

その梅のお菓子というのは、私が大好きなセブンイレブンの売っている「種抜きしゃきしゃき梅」のことだ。書いている今でも味を思い出して、食べたいと思うほどに好きなものだ。

その友達は電車を降りた後バスに乗って家に帰らないといけなくて、その時間も過ぎているのに最後まで私を応援してくれ、付き添ってくれた。おそらく私はこの友達がいなければセブンイレブンの店員さんに声をかけることすら無理だっただろう。ずっと一緒にいてくれた友達には本当に感謝している。

このような過程があり、私はようやく店員さんに声をかけることができたのだ。

その後最初に声をかけた店員さんが休憩中のチーフに話しに行ってくださり、店長不在だったためあとで電話をするようにと伝言をいただき、お店の電話番号を渡された。

後日渡されたセブンイレブンの電話番号に電話をかけると、最初に店長さんが出てくださり取材で

は何を聞かれるのかや、写真撮影を断っているや、話せない内容があることも確認された。

店長さんは取材を許可してくださって具体的に日程を決めることにした。

はじめは20日に取材をする予定だったが後から電話がかかってきて19日の午後6時からセブンイレブンK店のチーフの七瀬士郎さんという人に取材をしてくれないかという電話だった。初めて電話をかけた日はすごく緊張していたが電話を取ってくださった方が女性で少し安心した。電話でのアポ取りが終わった後には、ずっと耳に当てていたスマホが少し汗でぬれていた。この汗はきつと緊張から出てきたものだったのだろう。

しかし、2回目電話をかけてきて折り返した日は慣れてきていたのか緊張はあまりなかった。

取材概要

日時…2023年8月19日17時55分～18時15分

場所…セブンイレブンK店

取材した方…セブンイレブンK店チーフ七瀬士郎さん

自分との関係…店員と客

取材場所に到着してインタビューが始まるまで

予定より早く店舗に到着し商品の管理をしていた店員さんに「取材をしにきたものですが」と声を

かけた。するとその人はすぐに関係者以外立ち入り禁止の場所に案内してくださって店長とチーフがいる部屋に辿り着いた。到着してすぐ椅子を出してくださって机があつたほうがいいかと丁寧にやさしくチーフの方が聞いてくださった。お互いの自己紹介を終えたところで取材に取りかかった。

チーフの七瀬士郎さん

七瀬士郎さんは男性ですごく親しみやすい方だった。私が事前に話したどんなことを聞くのかということへの返答をメモしてくださり「ちょっと書いといたよ」と笑いながら話してくれた。私は緊張もありまた「pad」を置くところもなかったので用意した自分のノートに手書きで全て書こうとした。

私が取材をしながら急いでノートにまとめていると、ゆっくりでいいよししばらく私の書くスピードに合わせて話をしてくれたり待ってくれたりした。

このように第一印象は『とても穏やかで優しい方』であつた。

利用する客に対してどんな風な心構えを持っているか

これについて聞こうと思ったのは、いつも何かを買い終わった後に「ありがとうございましたまたお越しください」と言ってくくださるのだが、それを口にするときどんな感情を込めて言っているのか気になったからだ。

私が質問すると七瀬さんはこう答えてくれた。

七瀬さん「やはり一番気にしているのは丁寧な言葉遣いとお客様の目線に合わせることです例えば高齡のお客さんだと少しかがんで話を聞いたりすることです。」

私「では、ありがとうございますましたまたお越しくささいと言つてくださることについてはどのようなことを思っているのですか？」

七瀬さん「感謝の気持ちしかないのですその礼儀としていつています。」

私はこれを聞いてハツとした。正直今まで絶対に言わなければいけない台詞のように聞き取つていたこの言葉は、当たり前かもしれないがちゃんと感謝の気持ちが込められていたのだった。

たばこの番号は覚えていいのか

これはある日、私がレジを待っているとき前にいた方が煙草を注文していた。私はその様子を見て少し驚いた。注文された店員さんは言われたたばこをたくさん種類がある中からすぐに取り出したのだ。私はそのことが気になって聞いてみた。

私「店員さんが煙草を注文された時すぐに出されているのを見たのですが、番号を覚えているのですか？」

七瀬さん「正直番号はおぼえていません。たばこにもやはり人気があつてよく注文されるものは

場所を覚えているし、番号順に並んでいるから大体この辺りというので覚えていきます。」

確かにレジや商品管理、宅配物の手続きなどたくさんすることがあるなかでたばこの番号と種類をすべて覚えるというのはむりがあるし、たばこマニアでもない限り限りなく不可能に近いと言える。私は七瀬さんが言ったことをきいてすぐ納得できた。

セブンイレブンで働くようになったきっかけ

私はコンビニはセブンイレブン以外にもたくさんあるのにもかわらずなぜセブンイレブンで働くと思ったからそのまま率直に質問した。

私「他にもたくさんコンビニがあるのにセブンイレブンで働くようになったのは何故ですか」

七瀬さん「よく利用していたからです」

七瀬さん「人と接するのが好きで人間を観察する分析するという趣味をできるのがセブンイレブンで、趣味を楽しむように仕事も楽しんでいるなあ」

趣味を楽しむように仕事も楽しんでいるというのはすごいことだなと思った。同時に、趣味をしなから仕事をできるこの職業を見つけ出した七瀬さんもすごいと思った。

そんな七瀬さんにセブナイレブンで働く時のメリットとデメリットを聞いた。

私「セブナイレブンで働くことのメリットとデメリットを教えてください。」

七瀬さん「さっきも言った通りたくさんの人を見るからこんなタイプもいるのだとわかることですかね」

デメリットに関してはすごく悩んでいてないと言っていた。私ははたらいっているとひとつくらいデメリットがあるものと思っていた。

セブナイレブンで働いていて大変だったこと

七瀬さんがセブナイレブンで働いていて大変だったことは「新しく入った新人店員に仕事を教えること」と言っていた。だからこそ後から教えた店員が自分ひとりで仕事をこなせるようになっていくことがやりがいだと話してくださった。

自分が教える後輩に対しての願い

私が後輩に教えることが大変と聞いて、教える後輩に対しての思いや願いを聞いた。すると七瀬さんは「きちんとした言葉遣いができる人、きちんとした態度で大人になってほしい」と言っていた。

取材を終えて

取材を終えてわかったセブンイレブンの店員さんの魅力とは、どんな人に対しても感謝の気持ちを忘れず周りの人を思いやる行動を取れるところだった。七瀬さんは仕事の仲間は支え合っていていける仲間でもとてもいい人たちだと語っていた。

客に対してだけ感謝を伝えたり態度を良くしたりするのではなく店員同士のコミュニケーションもとっていてお互いを支え合っていていける仲間ということも魅力だった。

私はもともと客に対していい態度をしているだけという可能性も考えていたのでそうではないということが取材した場の雰囲気からも伝わってきた。また素人では気づかないような店員の気遣いも教えてもらいそんなにも相手のことを配慮して接客しているとわかった。セブンイレブンの店員さんたちはちゃんと仕事を楽しんで行っているということを知った。

最後にその場にいた人が並んで私を見送ってくださって、そういうところもちゃんと考えて行動しているのかなと思いついと思った。

その場にいた店長さんも温厚な人で「高1になったらまたおいで」と言ってくださった。

後日K店を訪ねてみると、取材をさせてくれた七瀬さんが前に私を入れてくださった休憩室から出てきた。私は少し気まずくてその場から逃げたのだが、七瀬さんの声が聞こえてきた。

「いらっしやいませー！」七瀬さんはレジをしていた後輩さんに向かって、「いいよ。変わるよ変

わるよ！ やすんどきー！」そう言われた後輩さんは何度か断ろうとしたが、それでも自分がすると
言い、後輩さんとレジを代わっていた。

それを見て私は「取材をさせてもらった時の第一印象と変わらず、優しい方だな」と思った。取材
の時だけ優しい、そのときだけのものなどでなく、真の優しさなんだなと思った。

今回の取材を通して、人の優しさは絶対にほかの人に伝わるし真の優しさを持つ人はすごく魅力的
だなと思った。私もこんな人になれるようになりたいと思った。また、誰かに魅力的な人と思っても
らえるようになりたいと改めて思った。

※お店の方とは写真を撮ることができなかったが、店舗の写真は許可された



私の父

聞き手 小田彩子

取材の動機

今回取材相手に選んだのは、私の父、小田健太だ。父は野球が好きで、いつも私に野球を教えてくれる。朝早くに仕事へ行き、遅くまで仕事をして帰ってきて疲れているだろうに、練習に付き合ってくれる。日曜日せっかくの休みなのに、私の試合に毎回ついてきてくれる。そして、今日の試合の反省点や、ダメだったところを一緒に振り返って、一生懸命サポートしてくれる。

なぜそんなに私に向き合ってくれるのか。時に厳しく、時に優しく、メリハリがしっかりしていて、なんでも一生懸命に聞いてくれる。一緒にボーリングをしに行ったり、遊びにも行ってくれる。お父さんは運動神経がいいので、一緒に遊んでいても楽しい。お父さんは料理が得意で、父が作ってくれるイタリア料理は全部美味しい。特に私は、ミートパスタが大好きだ。絵の上手さ以外はほんとになんでも出来る父だ。そして家族だけでも、なぜそんなに人に一生懸命になれるのか？ と思う、一生懸命になれることに、憧れ、魅力を感じ、それについて取材してみたいと思った。そしてその魅力とはどんなものなのかと不思議に思い、突き止めようと思った。

父とは、毎日一緒の家に住んでいるわけで、取材はすぐにできた。朝から夜の8時くらいに毎日帰

ってくるので、仕事終わりは大変かと思ってお父さんの休み期間中に聞こうと試みた。「聞いてもいい？」と言ったら「いいよ」と言ってくれたので今日あった出来事や、野球の話、学校での出来事などを話した後に取材を試みた。

いつも通りに話せば良いのに、途切れ途切れの会話になってしまったりしまった。それでも父は笑ってきいて、取材に答えてくれた。優しいなと思った。いつも通りの話をすればいいと思っていたけど、少しだけ緊張してしまった。不思議だなと思ってしまった。

取材概要

日時…2023年8月16日（水） 20時20分～20時43分

場所…家のリビング

取材した方…小田健太さん

自分との関係…私の父 家族

取材場所からインタビューが始まるまで

父と話した結果、取材場所は家のリビングですることにした。家族みんなで甲子園を見ながら夕食をとった。今日の夕食は餃子と私の大好きな焼き鳥で、とても美味しかった。任天堂スイッチのゲームマリオカートを家族で楽しんでいた。「私が勝ったので取材に答えてください！」という感じで取

材の体制に入った。

取材の前は、少し雑談から入った。野球の話、今日の出来事などをたくさん話し、その後取材が始まった。最初は、何から話せば良いのだろうと思いながらも雑談から入ったので話しやすいかなと思いい、そうしてみることにした。

かつこいい憧れの父

ついに取材の時が来た。いつもの雑談気分で取材を始め、「私の携帯で録音していい？」と聞き、「いいよ」と言ってくれたので録音することにした。録音していると思うと少し緊張してしまったが、徐々に和んできて、初めにあった緊張も吹っ飛んだ。

父は今日休みだったので、私服で見た目はいつもと変わらず、アイスを一緒に食べながら取材をしていた。アイスの「ピノ」は6つ入っているのので、3つずつ食べていた。家のリビングなので、テレビの音や母と妹の声などがある中、静かな場所でもないのに逆に少し落ち着いた雰囲気取材をすることができた。

野球を教えてくれる理由

インタビュウの時、なんで野球を教えてくれるのかを尋ねることにした。休みの日に野球を教えてくれたり、一緒にトレーニングをしてくれている。一番私がお父さんという時間は野球を教えてもら

う時間がほとんどだからだ。野球の話、今日の試合について、試合の反省点やなどなどほとんどお父さんに話している。だからそのことを聞いてみることにした。

「お父さんはなんで野球を教えてくれるん？」と質問をすると、「野球が好きだから」と言った。

父「大学まで野球をしていて、男の子だったら野球をやらしてみたいなと思っていただけ、女の子二人だったので、まさか野球を教える日が来るとは思っていなかったよ」

私も教えられる日が来ると思っていなかった。

父「今は野球を教えることが趣味みたいなもののに、彩子が引退したら何をしたら良いのかな笑」。

父「本当に頑張って2年半の短い野球人生を最高に楽しんでほしいからだよ。」

私は中学生から野球を始めたので2年半しかできない。

父「やっぱり全く打てないより、たくさん打てるようになったら楽しいだろ？」

お父さんは毎日に熱心に指導してくれる。毎日同じような練習をしてもなかなかうまくいかない

日もある。そんな日も諦めずに教えてくれる。そんな人が自分のそばにいるから、毎日頑張れるんだと思う。

私「うん。」

父「たくさん練習して、たくさん努力してこそその本当の楽しみや、嬉しさ、達成感が得られる。それは野球だけじゃなく勉強も一緒なんだよ。」

私「うんうん。」

父の言ったことはすぐ関心が持てる。

父「この野球で学んだことは将来絶対何かに役立つし、いいことだよ。」

私「確かに。」

これは私が中学生になって、野球部に入ることですごく感じたことである。野球で言ったら時間をきっちり守ることや、一つのことに集中し、成し遂げるために努力するという事と、それを継続するという力がつくと思う。学校のことで言ったら、提出物の期限などを守ること。これは社会に出ても使うと思うし、とても良い力がつくと思ったからだ。

父「野球が上手になればそれだけ野球も楽しめるから。」

私「だって打てたらめっちゃ嬉しいもんね。」

父「いやまだまだ足りんよ。もっと打ってもらわんと。笑」

父との会話はすごく楽しく面白く関心がある。父が私にたくさん言っていることは、「二年半しかないんだよ？ 今頑張らないでいつ頑張るの？ この二年半は一生こないし、彩子にとつてとてもいい経験になる。」で、一緒に練習しているとき一番言われることだ。しんどい練習や体力的に辛い練習をしているときに、とても心に刺さる言葉だ。

優しい人になるには？

今回の授業のテーマである「魅力」について深く掘り下げるために、自分がお父さんのことを魅力的だと思って来たこと、その背景を、お父さんに正直に打ち明けることにした。普段から野球が好きな様子はわかるので、別の質問をすることにした。

私「何故お父さんはそんなに料理が上手なの？ お店レベルに美味しいから気になって。特に私はリゾットとミートパスタが好きだよ。」

父「ありがとう。おいしいのは若い頃にイタリア料理の店で働いていたからだよ。」

だからそんなにパスタとかが美味しいんだと思った。

私「私はお父さんに憧れがあつて、日曜日とか仕事ない日にわざわざ美味しい料理を出してくれたり、犬の散歩に行ったり食器洗ったり、他にもたくさんあるけど、しごとで疲れているだろうに手伝ったり野球を教えてくれたり、とても優しいと思つたんやけど」

父「んー、料理をするのは好きなことだし、野球教えるのも好きなことだし、仕事も好きだからそんなに苦ではないよ。だから自分の好きなことをしているだけだよ」

と言っていました。なんだかすごいなと思つてしまった。「仕事が好き」将来そんなことが言える大人になりたい。

私（かっこいいなー。）

父「家族に美味しいと言われたらやっぱり嬉しいね。」

私「私も美味しいものが食べれて嬉しい」

父の料理は母も妹も好きだ。お店レベルの料理を家で毎週食べれるって幸せだ。私も料理ができるようになったと思ったこともあった。

父「美味しいに決まってるやろ。笑」

「だから彩子も自分が楽しいな、とてもやりがいがあるなと思う仕事に就きなさい。」

と言っていた。やっぱり父は尊敬すべき人なんだと改めて感じた。

私「じゃあーどうやったら優しい人になれると思う？ お父さんなりにさ。」

父「えー。難しいな。まずは、友達とかチームメイトとかクラスの人とかでも相手の嫌なところばかり見つけてしまうのが、まあほとんどの人の悪い所。だからあの人嫌い。とかになってしまう。噂で人を決めつけたり、一部分だけ見てしまう。そうじゃなくて、相手のいいところを見つけてあげる。そういう意識を持ったら、まあ優しい人？にはなれるんじゃないかな。」

私「なるほどね。いいところを見つけるのが大切なんやな。」

父「んで、それを相手に言っただけ。難しいことやけど、それが一番大事。」

私は（めっちゃええこと言うやん）と思いながら聞いていた。

取材を終えて

取材を通じて分かったお父さんの魅力は、一言で言うと「優しさ」だと思った。取材相手に選んだ時は「お父さんだから魅力的」と言う感覚しかなかったが、違った。「優しさ」という簡単に短い言葉だが、お父さんにはその優しさが詰まっていた。休みの日にご飯を作ってくれて、毎日のように野球を教えてくれたり、文を書くのを手伝ってくれたり、いろんな話を聞いてくれたり、愚痴を聞いてくれたり、こういう話を聞いてくれる人がいるから毎日を乗り越えられていると思った。

この取材を通してお父さんの存在は偉大だと改めて感じた。作ってくれるご飯は美味しいし、野球は上手いし、説明はわかりやすいし、話しやすい。なのでお父さんはとても尊敬する人だ。これ以外にもいろんなことを教えてほしいと思う。そして父は自分のことについて一生懸命になってくれるところが大好きだ。

もう一つ考えた「お父さんの魅力はポジティブさ」だと思った。これも私の好きな点の一つだ。2年生の始業式あたりに私は右手小指を部活中に骨折したことがあり、やっと打てるようになってきた時期なので、とても悔しく早く試合に出たいと落ち込んでいた。でも父は「手が使えないんやったら足鍛えたらええやん。誰よりも足を鍛えられる時期なんやで。最高やん。」

私はハッとした。（そんな考えがあったなんて。）この考えができたからこそ、今の9月は韌帯が損傷し歩けなくなっただとしても、こういうポジティブな考えが必要である。やっぱりポジティブに考えることには良いことしかない。なんでもポジティブに考える、自分が悪いのに悪くないように考える

のはポジティブとは言えない。父のポジティブさは今後見習っていくべきだと感じた。

最後に写真を撮っていいか聞いてみることにした。そして「いいよ。」と言ってもらえた。愛犬のさくらも映されている。父はさくらのことが大好きで、さくらがおやつを欲しそうにしているとすぐにあげてしまう。さくらの前だけはもうデレデレでいつも、もふもふしている。そんな動物愛が大きいのも父の特徴である。やっぱり父は一番に尊敬している人で、とても大好きである。母、妹、飼っている犬猫も含め、私達小田家は仲良しである。みんな大好きだ。これからずっとこのような関係でいたい。





知らなかった母の魅力

聞き手 東村美羽

取材の動機

私が魅力を感じて、取材したいと思った相手は、私の母だ。

私は、母が看護師になった理由を聞いて魅力を感じたのだ。その、母が看護師になった理由は、母のおじいちゃんであり、私から見えてひいおじいちゃんが、母が小学生くらいの頃に、病院で入院していて、その時おじいちゃんの爪がとても伸びていて、その姿を見た母は、自分が看護師になって、おじいちゃんのような人を少しでも減らしたいと思ったのが、看護師を目指したきっかけだと言っていた。そこから、母はその夢を追い続けて今も看護師として働いているのだ。

母は小さい頃から夢を持ち続けて、看護師になり、今でも看護師として働いていることは、将来の夢が明確に決まっていらない私にとってはすごいことだなと思った。また、小学生の頃から自分が人のために何かしてあげられたらいいなという考えを持っていることに魅力を感じた。

取材依頼をした時

母に夏休みの宿題の進み具合を聞かれたので、後は総合学習から出ている取材の宿題だけで終わると言ったら、「なら、今日中に総合の取材を終わらせてしまおう」となったので、夜に取材する時間

を作って取材することになった。

取材概要

日時…2023年8月21日

場所…家

取材した方…東村和子さん

自分との関係…母

インタビューをするまで

とりあえず、母に取材の動機の記事を読んでもらった。普段、母と話す時より、文章の書き方が固かったの、読んでもらっている時は、すごく緊張した。私は、まだ取材したい内容が詳しく決まっていなかったの、なんとなく母の看護学生の時代の話を聞きながら、取材したい細かな内容を考えた。

母に取材動機のレポートを読んでもらって

いつもは、母の魅力とかを直接言う機会がないので、母が私の取材の動機の記事を読んでいる時は、緊張したし、変な文章になってないか心配だったけど、私の伝えたいことが文章で理解してもら

えて嬉しかった。

夢を決めるまで

母は小さい頃から看護師になりたいという夢があったと聞いたが、高校生くらいの本格的に将来の夢を決める時まで一回も他の職業をしてみたいと思ったことは無かったのかなと思い、聞いてみた。

私「看護師になりたいと思ってから、やっぱり他の職業もやってみたいと思ったことある？」

母「他の職業も気になったことは、あったから色んなバイトをしてみたけど、やっぱり、自分が一番やりたかった職業は看護師やったかなー」

母「おじいちゃんが、看護師になることを楽しみにしてくれてたし、看護師の夢を応援してくれて、それが嬉しかったから、諦めんこうと思ったなー」

私は、おじいちゃんが看護師の夢を応援してくれていたということと、母が学生時代のバイトの話とかは聞いたことがなかったので驚いた。

看護学生時代の話

次に、私は母の看護学生の時代のことを聞いてみようと思い、色々聞いてみた。

私は、SNSで看護学生の実習が忙し過ぎるというような動画を見たことがあったので、実際にはどうだったのだろうと思い、聞いてみた。

私「tiktokで、看護学生の実習が忙し過ぎるとか、病院の看護師が怖過ぎるみたいな動画みたことあるけど、忙しすぎたり、大変で看護師諦めようかなって思ったことある？」

母「看護実習とか、レポートとか記録物が、多すぎて全然寝られへんかったし、遅い時やったら、夜中の3時とか4時まで起きてたし、ご飯食べながら勉強してた時もあったけど、小さい頃からの夢やったし、途中で諦めるのも嫌やったし、一番はおじいちゃんが応援してくれてたから頑張れたと思う」

この話を聞いて、私がSNSで見た動画は本当で、看護師になるのはとても大変なのだと分かった。

看護師になって

看護学校で学んだ知識は、今、看護師になってどう生かされているのだろうと思い、聞いてみることにした。

私「看護学校で学んだ知識とかは、今仕事場で活用されてる？」

母「んー」「学校では教科書に載ってることしか学ばない。例えば、基本的な看護の仕方とか、処置とか。でも、実際に看護師になって、病院で働いて学ぶことのほうが多い。」

私「例えば？」

母「患者さんにとっては、点滴したり、お風呂に入れたりするのも大切だけど、一番大切なのは、患者さんにどうやったら安心してもらえるかを考えて実践することが大切だと思う。」

私「どんな感じのこと？」

母「手をさすってあげたり、ちゃんと話聞いてあげたり、だから、学校で学ぶ事よりも、実際に病院で学ぶことのほうが多いかな」

これを聞いて私は、看護学校では、夜中遅くまでレポートを書いたり、勉強したりして、忙しいのに、実際では病院で働いて学ぶことのほうが多いのだと知って、意外だった。

また、看護師は看護するだけじゃなくて、患者さんを不安にさせないようにしたり、いろんな工夫がされて病院が成り立っているのだと分かった。

今回の取材を終えて

今回の取材を終えて、私が思ったことは、母は良い意味で、一度決めたら最後までやり通すような性格なのということが分かった。看護師である母は、単に、看護師だからすごいだけではなく、諦

めない性格と、人のために尽くせるという、尊敬するポイントを2つもかけ備えていて、改めて魅力的な人だなと感じた。

家では母として、毎日早起きしてお弁当を作ってくれたり、家の家事をたくさんしてくれるのに、職場では、一人の看護師として、人のために尽くして自慢の母だと思った。だから、これからはもっと日頃から感謝を伝えられるようになりたいと思った。この取材、取材レポートを通して、今まで気が付かなかった母の魅力をもっと知ることができた。

人生の履歴書

聞き手 辻村琴寧

『とりこ』

わたしが魅力を感じている人物は、清教学園の榎本隆明先生だ。

先生は私の音楽の先生であって週に一回の授業を担当して下さっている。

先生との出会いは初回の音楽の授業のこと。優しくて温かい先生ですぐに私は先生のとりこになった。授業を重ねていくうちにテストもあり、わたしはもちろん自分のためだが、先生の笑顔が見たいからという理由で高得点を目指した。榎本先生の存在は私にとって、モチベーションとなっている。

ここで先生とのエピソードをしようかいする。

去年の12月くらいのこと、わたしは榎本先生に「今年1年ありがとうございました」の意味をこめて手紙を渡した。先生はとてもよろこんでくださって、とてもうれしかったが、もっと嬉しかったのはそれから2ヶ月くらい経った時のこと。わたしは部活がもうすぐはじまるためにとても急いでいた。そんな中、自分のバックをあさっていると先生が私の後ろを通りかかってこういったのだ。

先生「このまえの手紙ずっと手帳に挟んでいるよ。」

私はそう言われた瞬間意識がとんだ。とっても嬉しかったからだ。自分が予想しないような嬉しい

事をしてくださって一種のサプライズのように感じた。

この出来事は深く私の心に残り、今回、先生に取材させていただきつけかけにもなった。

【取材までの足跡】

夏休みに入って、どちらも部活のコンクールなどで忙しく、なかなか顔を会わせる機会がなかった。取材の簡単なアポ取りは夏休み前に行っていたが、具体的な日にちは決まっていなかったため、8月16日、私は先生のもとを訪れた。夏休みも終盤に差し掛かり、先生も吹奏楽部のコンクール間近であるはずなのに、心優しく対応してくださった。

夏休み前にアポ取りをしていたおかげか話は上手く進み、翌日の8月17日に取材することになった。関係のない話ではあるが、8月17日は私の誕生日でもあり、先生は絶対に誕生日とは知らないが、偶然日にちが重なったことがわたしにとって、とても嬉しかった。

【取材概要】

時間 2023年8月17日 13…30～14…00

場所 音楽準備室

取材した方 榎本隆明先生

自分との関係性 中学校の音楽の先生

【取材の日】

榎本先生と前日に打ち合わせをして、取材場所は音楽室に決まった。取材当日、私は午前中、部活動だったのだがその部活動の間、「ちゃんと取材できるかな？ 心配だな。」と少し不安になっていた。チャペルに効いたクーラーの風が私の心に入り込んでくるかのように、そんな思いが私の心を埋め尽くしていった。

部活が終わり、お昼ご飯を食べると私は先生のもとへ向かった。お昼ご飯を食べたときに、「不安だな」と部活の同級生に話すと、「大丈夫だよ」と声をかけられたから緊張は小さくなっていった。

取材開始の5分前には音楽室についていようと思っていたが、音楽室に着くと先生はいらっしゃらず、中にいた、吹奏楽部の子達に先生の居場所を聞くと「音楽準備室だよ」と教えてくれて、そこへ向かった。着くと時間が2分ほどオーバーしていたが、先生は「探した？」とおっしゃられて、快く出迎えてくださった。アイパッドを片手におどおどしていた私に先生は「僕も取材緊張するなー」と話しかけてくださった。音楽準備室もクーラーがかかっており、とても空気がひんやりとしていたが、チャペルとは違って、涼しくて気持ちいいなと感じた。

【取材が始まって】

先生は私の前にある椅子に座られた。先生は私のアイパッドをまじまじと見つめて、自分が話すと同時に、デイクテーション(音声入力)機能によって打ち込まれる文字を見つめていた。「すごいね

い。この機能。」と言いながら足を組み直した先生に私は早速1つめの質問をすることにした。

【榎本『先生』】

私「まず1つ目の質問をさせていただきます。先生はなぜ、清教学園の音楽の先生を志されたのですか？」

榎本先生「うーん。元々私は先生になるつもりはなかったんだ。だけど家が裕福ではなかったの
で、学費が安いからという理由で大阪の教育大学の音楽教育課程に通うことにしたんだ。」

榎本先生に聞くとどうやら教育大学というのは、当時は母校に帰って、教育実習をして教員免許を
取得しないと卒業できないようだ。

榎本先生「そこで高校生の音楽の授業を体験した。小学校の頃は、楽器に興味があり、将来はトラ
ンペッターになろうと夢見ていたけど、この教育実習を経験し終わって、音楽教員という職業につき
たいと思うようになったんだ。」

私は今まで先生がトランペッターになりたかったことしか知らず、まさかそのような経験をされて
いたなんて思ってもいなかった。

どうやら、先生は清教学園での教育実習が、教師になる大きなきっかけとなったようだ。

【先生の生きがい】

私はこのことから、2つ目の問いを問いかけた。

私「先生はかなり、教育実習や実際に本校に通われていたことから清教学園に縁が深いと思います。大変、失礼な質問にはなってしまうのですが、私は先生が後、三年で定年になると伺っていたのでお聞きます。先生は三年後からも清教学園に携わろうとは思いますか？ ご意見かせていただけたら嬉しいです。」

榎本先生「それは定年後に再雇用してもらおうかってことだね？」

私「はい。」

榎本先生「辻村さんが言っていた通り、僕は後三年で定年を迎える。今まで若い頃からずっと清教学園に関わり続けてきて、それが僕の生きがいでもあったんだ。」

私「では、これからもずっと先生として働き続けられるのでしょうか？」

榎本先生「いや、僕は定年を迎えたら、完全に清教学園は引退しようと思っています。」

わたしは、その言葉を聞いてびっくりした。先生がこの学校からいなくなるなんてとてもじゃない

けど信じられない。

先生はその後、その理由を教えてください。

榎本先生「うーん。すごく複雑な思いもあるんだけど、僕はこの清教学園で今の自分のやれることはやり切ったと思っています。定年を迎えたら僕はまた、今からでもできる新しい生きがいを見つけようと思っています。それがなんなのかはまだ分からないけど、ゆっくり考えていこうと思っています。」

私はその言葉を聞いて先生の今の音楽教師に変わる生きがいはなんだろうと考えた。個人的に音楽団体の指揮をされるのかもしれない。それは意外にもスポーツだったり、料理であったりと全く関係のないことなのかもしれない。それは榎本先生がこれから見つけていくことで、私が予想することでもないが、きっと先生は素敵な生きがいを見つけられるだろう。

【読み返す『僕の人生の履歴書』】

私「先生、先ほど今の生きがいは清教学園で音楽教師をしていることだとおっしゃられていたと思いますが、音楽教師という立場の中で何を大切に考えているのですか？教えてください。」

先生はかなり間を空けてからこう、おっしゃられた。

榎本先生「今までの人生の履歴書の大部分は、清教学園音楽科教諭及び吹奏楽部顧問となるだろう。そんな僕が教師をする上で大切に考えていることは、人としての信条であるかもしれないが、聖書に書かれている教えの1つで、『自分がして欲しいと思うことは、他人にもしてあげなさい！』これらの最も小さいものにしたことは、私（イエス・キリスト）にしたのである』ということかな！」

私はよく「人からされて嫌なことは自分もしない。」という言葉を聞くことがある。多分先生がおっしゃられているのはこのことなのかも知れない。しかし、自分が嫌なことを、相手にもしないというより先生がおっしゃられた通り、相手にされて嬉しいことは自分もするということはかなりすごいことなのかもしれない。簡単に思ってもないような言葉をはっして、相手に心からよろこんでもらえるなんてことは誰にでもできてこのことを社会では「お世辞」ともいう。でも先生がおっしゃられていることは多分そういうお世辞のことではない。自分が心から思ったことを行動して、言葉にして、相手が喜んでくれることなのだろう。

また、私は先生がおっしゃられた『僕の人生の履歴書』という言葉にとっても深く考えさせられた。毎日、生きていくうえでその日、感じたことや行動したことを履歴書に残しているという先生の考え

方がとても素敵だなと思った。「それを人生が終わるその瞬間に見返せたらどんなに良いものなのだろう。」とふと、わたしは考える。

【取材を終えて】

取材を終えた私は改めて先生に感謝を伝えた。

今まで榎本先生は私が何かお願いをするとそれを快く引き受けてくださった。これはこの取材においても言えることだと思う。その裏には先生が生徒に対して、人として大事にする信条があったからだとわかった。冒頭の取材動機で書いた、「先生からの一種のサプライズのように感じた」というのもこの信条の上で生徒側の私が素直に感じたことだと思う。このことがわかったからかはわからないが、私は取材前よりもうんと榎本先生の魅力に惹かれたような気がした。その魅力はきつと先生が定年を迎えられた後も私の心に残り続けると思う。

私は先生に取材を行ったときにうつかりしていて、写真を撮ることを忘れてしまっていた。

なかなかお互いに夏休み中はもう時間が取れないと思っていたので、夏休み明けに私の方から職員室に伺おうとしていた。だが、たまたま、部活が始まる20分ほど前にお会いすることができた為、写真を撮らせていただいた。急な出来事であっても先生の優しさは変わらず、その日中にその写真をメールで送っていただき、貼り付けることができた。きつとこの写真はこれからも私の宝物になるだ

ろう。

このレポートは榎本先生がいらっしゃらなければ成立しません。先生に心より感謝いたします。



固執した見方から柔軟な見方

聞き手 石原夢菜

取材の動機

取材相手に選んだのは、私と同級生の桜木真美さんだ。中1で初めて知って友達になった人だ。

真美さんとは。彼女は、運動神経がとても良くて、ツツコミがいつもの確で、誰に対してもサバサバしている。サバサバとは、さっぱりしている人のことだ。他にも、自分の芯、自己主張が常にはつきりしてる。たまに極端に強すぎることもあるから口論っぽくなってしまうときが1度だけあった。先に話してしまうが、スキーで一緒に泊まったときの3日目の朝・・・

私「スキーの服が結構やつている間さ、肩ひもが落ちてくるくない？」

メンバー「やんな！めっちゃわかる！」

私「あれやで！肩ひもをクロスしたら落ちてけえへんで」

真美さん「え、私は落ちてこうへんかったで そんなんせんでもいいやろ」

私「いや、夢菜らは落ちてくんの」

真美さん「大丈夫やろ」

私「いや、だから落ちてきたんやってw」というくだりがあった。ちょいちょい待って？と急に

主張が強くなる時があつてひるんでしまう。

話は戻るが、常に堂々としている姿がかっこいいと思う。部活動は、なぎなた部に所属していて同じ部活のAさんによると、とても上手で演技も防具も長けているそうだ。

ここからは、私と真美さんとのエピソードだ。ある中1の夏のころ、私は格闘技にとっても興味があった。友達から「真美、空手習ってたよ」とたまたま聞いたので、私はすぐに真美さんを探してこう聞いた。「まみちゃん！空手やつてたつて聞いたんやけど、教えてくれへん？」彼女は快く受け入れてくれた。そしてその日から、私にとつての『師範』になった。夏の4時間授業後の昼を使って教えてもらった。まずは、基本的な突き、その次は五本蹴りを教えてもらった。私は、全くやったことがないただの素人。でも彼女は、とても教え方が上手く常に丁寧だった。好きなことを自分で実際にするのが本当に楽しかった。私がより格闘技を好きになった理由だろう。師範との時間はとっても楽しかった。そこから授業と授業の間にも話すようになり、そこで聞いた話は、5年まで新極真空手を習っていたそうだ。

なんと3月のスキーで同じ部屋のメンバーになった。2日目の夜、そこでもまた新たなことを教えてもらった。それは、蹴りの受け方。そこでもまた、彼女は丁寧に教えてくれた。また、師範の五本蹴りを見せてもらった。一緒に見ていた友達も感動で唸っていた。本当にかっこいい。

今回私がする取材内容は、なぜほぼ初対面の自分にあんなによくしてもらったのか、あの時どう思ったのか。空手や薙刀の経験があるが合気道が好きなのか。の2つを聞こうと考えている。

取材相手であることを伝えてから日程が決まるまで

真美さんに「取材相手にしたねん！」というところ「マジで?! 私でいいの? 嬉しい〜」と言ってくれた。

夏休みに入ってから取材日を決めることにした。まず自分のスケジュールを確認し、なぎなたのスケジュールも見て、LINEで話し合った。

(LINEでの会話)

私「8月11日と12日のどちらかどう? もし用事入ってたら7・17・23はどう?」

真美さん「8日の午後ならいける!」

私「了解です」

次の日、わたしは卓球部があったので学校へ行った。すると、部活後に真美さんに会い、どこで会うのかを決めた。三国ヶ丘の桜珈琲にしようと決まった。

(次の日)

真美さん「このことなんやけど、14時20分に特別授業入っちゃったから、もう少し後でいいかなあと、桜珈琲って結構マダム(?)で混むらしいから、中百舌鳥のドトールにせーへん? 特別授

業帰りに寄れるから」

私「おっけ」

(また次の日)

真美さん「15時30でいい？ それやったらいけそう」

私「おっけ」ちなみに、真美さんに取材したい内容は…

① なぜ初対面の時あんなに優しくしてくれたのか。(夢菜が、真美さんに「空手教えてくださ
い」って言ったときあたり！)

② なぎなたとか空手をやってる(やってた)と思うんやけど合気道が好きなのでしょうか。 の2
つを聞くつもりです！

取材の聞く内容として、いいんか、悪いんか分からのやけど、お願いしますm()m
真美さん「おっけ」よろしくう 合気道か… そう来たか」

こうして、取材日までの準備ができた。

取材概要

日時… 2023年8月8日 15:30~16:30

場所… 中百舌鳥駅前 ドトール

取材相手…清教学園中学校の生徒 桜木真美さん

自分との関係…師範、友達

取材する手前

遅刻はしないように家から早めに出て駅に着いた。最寄り駅に乗って三国ヶ丘あたりのとき、ブーッとスマホがなった。見てみると真美さんからのLINEではないか。

(LINEでの会話)

真美さん「夢葉、ドトールの前でまっとくねー」

私「もう着いた?!」

真美さん「すこしはやすぎた 気にしないでー」

私「(ありがたいのスタンプ)」

なんと真美さんは15分前に到着されて、自分はギリギリですごく申し訳なくて「次からは5分前には絶対に着いとう」とすごく思った。電車でソワソワしながら「なんて喋りかけようかな」などと考えていた。

着いたらダッシュでホームを駆け下りて私は急いで真美さんの元へ行く。

私「お待たせしました！！！」

真美さん「え、走ってきたん？そんな急がなくてもいいのに」と優しい言葉をもたらった。

そして、店内に一緒に入った。たくさんの人が利用されていた。

真美さん「結構人おるな」

私「ほんまやな」

真美さん「2階行く？」

私「うん！案内よろしくお願いします」

（2階に行く）

真美さん「〇……人こっちも結構おるな」歩き回って席を探したがみっちり埋まっていた。

真美さん「一旦降りるか」

私「うん！」

（1階に戻る）

私「あるかな…おっ？ あるやん！ あそこでします？」

真美さん「オッケー」私は席に荷物を置いて座ろうとすると、

真美さん「なんか買う？」

私「えっ、あ、うん」

私は普通にもう始めると思ってたのでびっくりした。自分の反応が実は緊張しているのかなと思っ
た。私はオレンジジュースを買い、師範は黒糖タピオカミルクティーとケーキを買っていた。黒糖タ
ピオカミルクティーは、当店の人気商品だそう。そして、席を着いていざインタビューを始めた。

初対面での感じたこと

私はまず、入学当初にほぼ初対面の自分に空手を教えてと言われてどう思ったのかについて聞くこ
とにした。

私「えーと、インタビューははじめます」「NEEでも聞いていたと思うんやけど、なんでほぼ初対
面の自分に「空手教えてー」って言われてどう思ってた？w」

真美さん「あー、あの時ね、すごく嬉しかったねん。あんまりさ、格闘技が好きな女子っておらん
やん？だからかなー」

それを聞いて私はなんだか照れくさく嬉しく思った。

私「えっと、空手を始めたきっかけてなんなんかな？」

真美さん「きっかけは、名探偵コナンが好きでそこに登場する、蘭姉ちゃんがとても強くかつこよかったからかな」

私「ちなみにいつからでしょうか？」

真美さん「新空手は小1から始めたかな。」

私「親はどんな感じやったんかな？」

真美さん「えっとね、親の反応は、『もっと女の子だからピアノとか習うと思ってたんやけどまさかの空手って』ってびっくりしたらしいw 近くに習えるところがあったから、見学してみたら、バコバコの殴り合いで親も少し入れさせるか迷ったらしいw」

私「ちなみにその時の真美さんの反応は？」

真美さん「私はね、ワクワクでいっぱいやったらしいw」

真美さん「ちなみに私がやったのは新極真空手で、極真空手との違いは寸止めがないこと。ま

あ、でも私自身、型の方が好きやったから、組手はあまり好きじゃなくて、痛いのが嫌やったからな
」

確かに小1やし怖いと思う。

私「ふーん、なるほどね！ 夢葉は、やったことないけど多分組手の方が好きかな」

私は、やりたいけど習えるような場所がなくて、すごく羨ましく思った。でも、真美さんに色々空手について教えてもらってすごく楽しい。

ホンマにありがとう！ 師範！！

合気道、好きですか

真美さんは清教でなぎなた部に所属していて、小学校時代に空手をやっていたので合気道が好きなかなと思います。

私「今なぎなた部に入ってる子で、なぎなた部に入りたかったから清教に来たって子がおると思うんだけど、真美さんも同じ理由？」

真美さん「清教に入った理由は、勉強ばかりじゃなく部活もしていたからかなークラブは、武道がよくて、なぎなたか剣道でめっちゃ迷ったな」

合気道は、好きだけど武道全般が好きなのかなと思った。ほんとに似合ってると思います。

新たな見方

取材日の数日後、真美さんの最初のイメージと取材相手になってから終わるまでに思った真美さんについて書き出し、比べてみた。最初と今の真美さんの魅力を一言で言うところ「かつこいい」で変わらなかった。けど、魅力を細かく見たときに、微妙に思っていたのと違うかったり、新しい発見をしたりして、少し変わった。

真美さんは、サバサバしているイメージがあった。サバサバとは、物事の執着があまりなくて、（言い方を悪く言えば雑。）さっぱりした人のことである。しかし、全く大雑把な感じはないのではと思った。真美さんは取材日の詳しい話を（本来は取材する方の自分から行かないといけないけど…）彼女から持ちかけてくれて、「しっかり者屋さんやな」と思った。確かに、中1の頃を思い出してみると、きっちりしている面もあったなと思う。もしかしたら、なぎなたの防具より演技が好きな理由に当たるかもしれない。（後日LINEで聞いてみると「防具は痛いっていうのもあるけど、スピードより基本正しくってのが得意やったからな」と言っていた。）「それが、まさにきっちりしている性格に体が合ってるんじゃないか」

と思った。真美さんが気づいていない理由に自分が取材をしたことで見つけたように感じてとても面白い。あと、顔立ちもはっきりしているなと入学当初思った。

しっかりしている人の特徴を調べてみると、「自分の芯・自己主張がはっきりしているところ」「優

しくて面倒見のいいところ」がそれに当てはまった。なんだかパズルのように繋がって楽しかった。また、取材中に感じた真美さんは、空手を教えるのが上手いうえに、話し方も丁寧で分かりやすい。話があっちゃこっちゃ飛ばず、分かりにくい質問をいい感じに返してくれて、取材する側としてはとてもやりやすかった。また新たな魅力を見つけた。

他にも取材中に知った事がある。質問1個目の、「なぜ初対面で優しくしてくれたのか」について聞いたとき、真美さんが「喋りかけてくれた時、嬉しかったん！格闘技に興味のある女子が珍しかったから余計に嬉しくてー」と言った。聞くまで全くその時の気持ちを知らなかった。自己主張はつきりしているけど、自分の思ったことをすぐ言うわけではないとわかった。これを知る前の私は、ちよつと固執した考えを持っていたかもしれない。あと、話している時もやっぱり堂々としているなと思った。

最初は、雰囲気・性格がなんかっこいいと抽象的だったのが、大人っぽいかっこよさなのかなと思えてきた。私は、取材する前、取材しようと思っていた人がもう1人いてその時クラスの子にどんなかを説明した時に「かっこいい人が好きなの？」と言われた。確かにその人も大人っぽくてかっこいい人だ。私は、かっこいい人が好きで特に大人っぽくさっぱりした人に魅力を感じるのだろう。

取材を終えて

取材は大体1時間で終わった。最後に写真を撮ってもいいかと聞くと「いいよ」と言ってくれ、

真美さんが持つてきてくれた名前入りのたくさんの空手の帯と試合で得たメダルと一緒に撮った。取材を受けてくれてありがとうございました！





無題

聞き手 山本愛

取材の動機

私が今回取材したのは祖父の佐々木優太さんだ。

彼はかつてとある大手企業で働き、数十年前に定年退職をした。現在は奈良県の自宅で静かに生活を送っている。

なぜ彼を選んだかというと、彼は学生時代からかなりの勉強家であり、そこから必然的に有名人とも知り合いだったりする。同窓会に行っても人気者になるという話も聞いたことがある。そして何よりもとても優しい人なのだ。私の母は3人姉妹なのだが、3人とも口をそろえて「世界一やさしいお父さん」と言っているのだ。

取材の依頼を送ってから取材するまで

彼は私の祖父ということもあり、依頼をするのは簡単だった。昨年繋いだLINEでこの取材についての趣旨とともに話を聞きたいという内容を書いて送信した。すると数分後に祖父から「いいよ」との返事が返ってきた。そこで私は「何時に電話するのが都合いい？」と聞くと祖父から「今でもいいよ」と返事が返ってきたので、即座に電話した。それで取材が始まった。

取材概要

日時…9月4日

場所…それぞれの自宅(電話のため)

取材した方…佐々木優太さん

自分との関係…祖父

取材してもらえることが決定してインタビューが始まるまで

先述したように「LINE」ですぐに祖父からOKの連絡がきたので私は「何時に電話するのが都合いい？」と聞くと祖父から「今でもいいよ」と返信が来たので私は即座に電話した。

祖父の知り合いの人の中で一番の有名人

私は祖父にまず聞いたのは知り合いの人の中で誰が一番有名人なのかだ。

私 「おじいちゃんの知り合いの中で、1番の有名人は誰？」

祖父 「Y・Tくん、かな。」「彼の詳細は紙に書いてファックスで送ってあげるよ。」と言ってくれた。祖父の優しさを改めて感じる事ができた。

そしてその有名人、Y・Tさんは祖父と小中高ずっと同じ学校にいた大親友だと言う。彼の略歴としては、東京大学教授・大阪大学教授・内閣府国家戦略特別区域ワーキンググループ座長・内閣府総合規制改革会議委員を務めているとのことだそう。私はこれを知った時、一人の人間でこんなにもすごそうな仕事に就くことができるのだと驚いた。

さらにほかに知り合いに有名人がいないのかと聞いてみたところ、

祖父 「M君かな。M・Rという名前の元NHKアナウンサー。」

私 「アナウンサー！？ すご！」

祖父 「そんな凄くないよ。彼は同級生じゃなくて同窓会で知った後輩だよ。たしかMアナはのど自慢にも出演していたよ。」

私はとてもびっくりした。なぜなら、私も見たことがあるような番組に出演していた人と私の親戚が知り合いだなんてなかなかないことだからだ。

祖父の中学時代

祖父は、現在奈良県に在住しているが学生時代は福岡で育ったのだそう。そこでの祖父の中学時代の話を聞いてみた。

私 「おじいちゃんはどんな中学時代を過ごしたの？」

祖父 「超田舎の学校だよ。一番印象に残っていることはね、近くに池や川、田んぼがあるのだけ
れど、そこから友達がかエルを連れてきて一緒に解剖しようと誘われたことかな。」

私はカエルも解剖も苦手なのでとても驚いた。しかも素手で取ってきたのを急に解剖するなんて。

(笑)

祖父 「あと愛ちゃんの学校と大きく違うところは課題がなかったことかな。長期休み課題も日常
的な課題も一切なかったよ。」

私 「え！？めっちゃいいやん。もしそうだったら多分うちのクラスほぼ全員が喜ぶで。」

祖父 「でもね、課題がないことでおじいちゃんはとても苦労したよ。」

私 「もしかして、勉強するために自分でいろいろ用意しないといけないから？」

祖父 「そう。定期テストはあったし、もちろん将来的には大学受験を控えているわけだから勉強
しないわけにはいかないじゃん？」

私 「せやなく中学で勉強さぼったら多分おじいちゃんみたいないい大学には行かれへんもんな。
下手したら高卒になりかねへんやん。」

祖父 「そう、だから勉強するためには自分に合ったレベルを考えながら問題集や参考書を用意し

て、勉強方法を自分で1から定めないといけなかったんだ。」

私 「地獄やん。面倒くさすぎやろ。」

私はこれを聞いて課題があるほうがいいなと思った。勉強することも数学などはわかり始めたらほんの少しだけ楽しいものの、そこまで楽しいものではない。そこでさらに自分で問題集を探しに行くなんて面倒くさすぎる。いつか買いに行くって言いつつながら気づいたら1年たっていた、なんてことになりかねない。だから清教学園の課題の量は多いほうであると思うし、正直大変なこともあるが、それでも課題があつてよかったと思った。そしてその課題に全力で取り組もうとも思えた。

会社での苦難

私 「会社に勤めていて一番苦労したことは何？」

祖父 「定年するほんの少し前、会社で大規模なリストラがあつたんだ。そこでおじいちゃんもリストラする人を選ぶ立場になったんだ。」

私 「うわーリストラ嫌やな。リストラする側ってそんなに神経使うん？」

祖父 「うん。1人1人のこの先の人生がかかったものだからね。そんなに安易には決められない。さらに、リストラする人が決まったあともショックが大きかったよ。これまで一緒に働いてきた仲間何人かともう一緒に働けなくなるのだからね。」

私はそれを聞いてリストラというもののイメージが大きく変わった。以前は「リストラされる側は恐怖にもおびえて本当に大変だと思う。でも、リストラする側は何の遠慮も優しさもないおじさんばかりで何も考えず簡単に社員を追いつけている」のだと思っていた。でも実際はそうではなかったのだと思い知らされた。

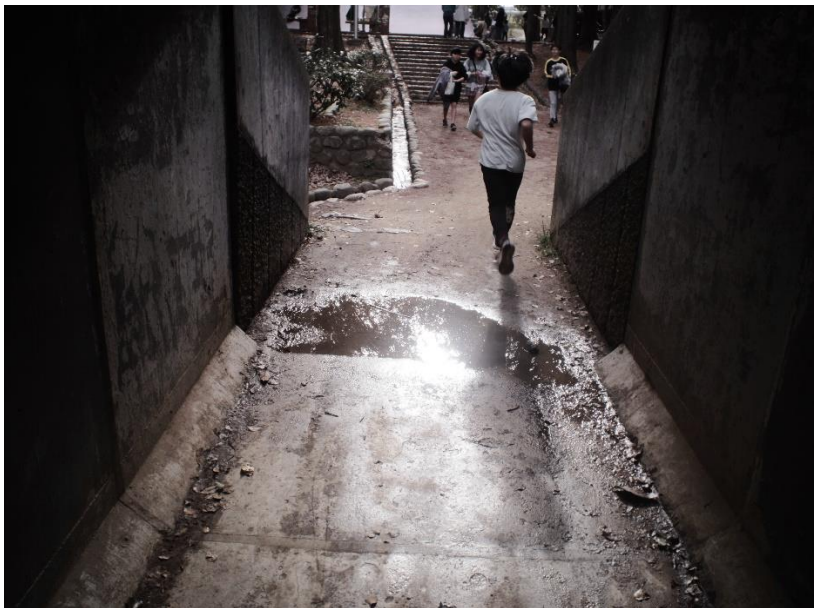
さらに祖父の優しい性格だからこそ人一倍ショックが大きかったのかな、と思った。なので「リストラ」は会社のためにやるのかもしれないけれど、できる限り他のところでコストを削減してリストラは極力避けてほしいと思った。する側もされる側も苦勞するだなんていいことなしだ。

取材を終えて

この取材では、これまで知らなかった祖父の凄い人生を知ることができ、祖父の優しさを改めて感じる事ができた。祖父は取材を終えるとき、「ぼくは今でも学生時代もっと勉強しておけばよかったと後悔している。だから愛ちゃんは、後から後悔しないように今しっかりと勉強しておいてね。」と言ってくれた。

私からしたら超一流企業に勤めて、結婚して3人の娘もいて、老後もしっかり生活できていて、有名人の知り合いもいて、だれもが憧れるような生活をしているように見える。それにも関わらず、もっと勉強しておけばよかったと思っているということは、学生時代満身に勉強できた、と思っている

人はごくわずかにしかないのだと思う。もしかしたら日本のトップ、東京大学に行った人であってもそういう風に思っている人もいるのかもしれない。私はこのような話を聞いて、この清教学園であと5年間みっちり勉強して、だれもが名前を知るような大学に行き、将来満足のいく生活を送り、過去の自分にも満足のできる、そんな人になりたいと感じた。



勇気のある兄

聞き手 前野夏樹

取材の動機

今回取材する人は3歳年が離れている私の兄の前野悠馬(まへのゆうま)さんだ。兄は頭の回転が速く数学が得意なのでよく勉強を教えてくれる最高の兄だ。

私の兄は北海道にある中・高等学校に通っていて、私が小学4年生の頃から寮に住んでいる。だから長期休みしか帰ってこず、兄に会えないことで私はいつも少し寂しかったし少し怒っていたが、帰ってきたときはたくさん勉強を教えてくれたり、たくさん遊んでくれたりするのでいつも長期休みが早く来ないかと待ち遠しく思っていた。

今回なぜ兄に取材しようと思ったかという点に関して頼れる兄のことが好きで、兄のことが「カッコイイ」と思ったからだ。兄は今高校2年生で来年には大学受験が迫ってきている。大学生になったら勉強もバイトもたくさんすることをしなければならないと思う。だからワイワイ騒げるのは今だけだし、もう質問できるチャンスも今しかないかもしれないので取材することにした。

兄に聞きたいことはたくさんある。どうして家を離れて北海道に6年間も住むことを決めたのか、寂しくないのか、勉強するときにどんなことを心掛けているのかを聞きたいと思う。なぜかという

小学6年生の時にいきなり北海道の学校に行くと言われてとても驚いたし、兄が通っている学校は高校からの編入などができないので6年間学校を変わることはできないので当時の私はとても驚きその時から疑問に感じていたからだ。そして私は家で集中して勉強をすることが苦手なので兄にそのコツを聞きたいとも思ったからだ。

取材日程が決まるまで

兄は普段北海道にいるし、帰ってきてても地元の友達と会ったり勉強をしていることが多いからいつ取材ができるかがわからない。なので一度兄にLINEをすることにした。

LINEした次の日まだ北海道にいる兄から早速返事が来た。「わかった。8月13日の夜に受けるよ。どんな取材かわからないけど頑張るよ!!」と送られてきた。その返事が送られてきた時にとっても嬉しくなった。と同時にうまくできるだろうかと緊張もした。

急な取材の日程変更

取材をしようと思っていた日、台風の影響で次いつ飛行機が飛ぶかわからなかったので取材ができず兄は北海道へ戻ってしまった。だから9月6日の夜にできないかともう一度頼んでみることにした。すると「LINEの通話なら大丈夫、そんなに長い時間はできないかも」と言われた。取材ができると聞いて私はひとまず安心した。

取材当日

取材当日の夜9時30分から10時までの間なら大丈夫と言われたので9時15分ごろから母のスマホを借りて母のスマホの前ですっと待っていた。すると9時25分になり私がかなり緊張してきた頃に兄から電話がかかってきた。

私「もしもしお兄ちゃん？今時間大丈夫そう？」

兄「うん、ちょっとガヤガヤしてるけど聞こえる？」

兄がそう言った時に兄の友達と思われる人が「やつほー！」と大きな声で行ってきたので、私は堪えきれず笑ってしまった。そのおかげか緊張がだいぶほぐれてきた。その様子を見て思ったのか兄が言ってくれた。

兄「大丈夫そうやね、じゃあ質問聞いていくよ。」

そう言ってくれたので早速取材を始めることにした。

兄が学校を選んだ理由

私「じゃあ、お兄ちゃんはなんで6年間も家を離れて北海道で暮らそうと思ったの？ 第一志望校だったっけ？」

これは私が一番聞きたいと思っていた質問だ。なぜなら兄が通っている学校は先ほども説明した通り高校からの編入ができず、6年間ほぼ確実にその学校に通うことになっているからだ。そして私は兄が北海道の学校に行くとき勇気があってすごいな、尊敬するなとも思ったからである。

兄「ううん、第一志望校は元々別の学校でそこも受かったんだけど、塾の先生から勧められて受けてみてそれで受かったから見学しに行ったらめっちゃいいなって思って、第一志望の学校じゃなくて今の学校にしたんだよ。」

その答えには少し驚いた。私だったら第一志望に受かるために受験を頑張ってきたのに一度見に行っただけで選ぶことなんてできないと思ったからだ。（北海道にある学校を受験する場合、兄が受けた学校は大阪で受けることもできたので兄は受験を大阪で受けたらしい。）

だからよっぽどよかった理由があったはずだ。私はその理由がとても知りたいと思った。

私「そうなんやね。例えばどこが良かったの？」

兄「そうやね、良かったところは先生と生徒の仲が良かったところかな。やっぱり先生と生徒の仲が良かったら質問とかもすごくしやすいと思うし、接しやすいと思ったからやね。あとは雪が好きだからかな。」

私も清教学園に行きたいと思った理由の一つに先生がとても親切だからという理由と、挨拶がとても良いと思ったことがあったのでとても共感することができた。

私「お兄ちゃん雪の日はめっちゃはしゃいでるもんね。でもお兄ちゃん、寂しくはないの？」

兄「もちろん寂しいし帰りたいとかもよく思うけど頑張った分、離れてた分、萌花（家で飼っている犬）の成長を見れるし感動の再開感があつてお兄ちゃんは好きやね。まあ最初の方はしよつちゅう帰りたいって思ってたけどみんな優しいし面白いからね。」

兄は帰ってきたときはいつも、萌花といっぱい遊んでいるし、関西空港について私たちのことを見つけるといつも重たいであろうスーツケースを引っ張って速足で来てくれるのだ。

私「確かにお兄ちゃん、いつも電話の時とか楽しそうに話してるもんね。将来はどうするの？」

兄「まだこれといった夢は決まっていなかな。でも大阪には帰ろうとは思ってるけどね。もしかしたら小6の時みたいに最後の最後で決断するかも。」と言って笑っていた。

でももし兄がまた北海道などの遠い学校に行きたいと言ったら、父や母は反対するだろうけど私は応援したいし、兄が中学生の時にずっと寮にいたことでできなかったことを一緒にやりたいとも思っていた。兄が一人暮らしを始めるなら兄に会いに行けるだろうし、いつか兄と料理を一緒にして母と父を喜ばせたいとも思った。でも兄は昔から料理が少し苦手だそうなので心配だが父に教えてもらえればなんとかなるのではない、なぜか私のほうがワクワクしていた。

勉強に集中する方法

私「じゃあ、お兄ちゃんが勉強に集中するための秘訣とかがあってある？」

普段から私は集中力があまり持たないので集中して2時間も3時間も勉強できる兄に聞いてみたいと思った。

兄「えっとね、勉強が終わった後にみんなと心置きなく遊んで喋れるから、そのことをご褒美にして頑張ってるよ。でも集中して勉強するのは難しいよね。」

私「そうだよ。ご褒美つけてみるの試してみるよ。ありがとう。」

つい夢中になって話しているともう10時になって兄の学校のチャイムが鳴った。

私「やば、もう10時やん。ごめん、お兄ちゃん、今日はありがとう！」

兄「もう取材しないといけないことはない？大丈夫そう？」

私「大丈夫、お兄ちゃんは時間がやばいでしょ？勉強頑張って！」

兄「うん、ありがとう！！じゃあ頑張ってくるね。」

通話が終了して無事に取材が終わった。

取材が終わると私はほっとした。

取材の感想

取材をしてみte思ったことがある。兄はとても優しいということと、寮での生活をとて楽しんでるということだ。兄は色々気遣ってくれたし寮でのことを話すときにとて楽しんでたからだ。この取材を通して兄と電話などでもっと話したいと思った。

そして兄がこれからどの大学に行っても私は勇気のある兄を応援したいなと思った。



俊兄ちゃんの本当の魅力

聞き手 宮崎実

俊兄ちゃん！

僕が取材する人は、小学校の先生をやっている、いとこの俊兄ちゃんだ。

彼は僕よりも19歳も年上で、もう立派な大人だ。

そんな彼だが、千葉県在住で、会う機会もそんなに多いわけではない。けれど、彼が大阪に遊びに来てくれたり、僕が千葉に会いに行ったら絶対に、一緒に観光をしたり、ご飯を食べに行ったり、ポケモンをしたりして遊んでくれる。同じゲームをやったりしているので、時々LINEする。連絡を取ることさえ楽しいと感じ、ついつい頻繁にLINEしてしまう。けれど、そんな連絡にも応えてくれる。そんな彼は、遠くに住んでいてなかなか会えないとこのはずなのだが、一人っ子の僕にとってはとても尊敬できて、頼れる兄貴のように感じる。それに、とっても仲が良いから、いとこののに、「俊兄ちゃん！」と呼んでいる。

彼は千葉県の小学校に勤めている。毎日頑張っているそう。土曜日や日曜日は休みだと言っているが、普段朝から夜まで働いているので疲れているだろう。でも、教師という職は楽しい、生徒と接するのも楽しい！と言っていたので、ある時、教師という職に興味を持つようになった。だから、今

の将来の夢と言ったら先生である。そう、つまり彼の影響を受けて僕は将来教師になりたいと思うようになった。

◎聞いてみたいこと

そんな彼に聞いてみたいこと、真っ先に思い浮かぶのは、「なぜ教師になりたいと思ったか」だろう。他には、いつ思ったなども聞いてみたい。そして、教師というものの楽しさを知りたい。僕はまだ中学生で、知らないことがたくさんある。だから、僕の知らない教師の魅力を取材しようと思う。逆に、仕事において、嫌なこと、大変なことや、もともとは何になりたかったのか、なども知りたい。

依頼のLINEを送った！

俊兄ちゃんとはゲームの話などで盛り上がっていて、日頃からよくLINEで連絡を交わしている。「学校の課題で、身近な人に取材をしようというのがあって、兄ちゃんに取材してもいいですか？」と聞くと、快く受け入れてくれた。年の差がすごいとはいえ元々とても仲がいいので、特別緊張すると言ったことはなかった。むしろ、千葉を訪れて彼と会うのがとても楽しみになってきた！でも、聞くことをもっと考えたいと思って、色々と紙に記した。予定している日時はまだ僕は夏休みではないが、向こうの学校は夏休みで、予定が合う日があったので、旅行みたいな感じではあるが彼と話す時

が明確に定まった。

取材の概要

日時…2023年7月24日

場所…平田牧場 KITE 丸の内店

取材した方…T市立小学校教員 峯岸俊輔さん

自分との関係…兄貴のような従兄

いよいよ、取材のときがやってくる！

俊兄ちゃんには取材の前日から会っていて、彼に会うのは実に半年ぶりだった。

前回に会ったときは、兄ちゃんが大阪に来てくれて、一緒にご飯を食べた。

今回行ったときは、前日にも一緒にご飯を食べ、国会議事堂を訪れたり、ゲームをしたりして遊んでくれて、とても嬉しかった！

俊兄ちゃんの家近くには僕のおじさんとおばさんも住んでいて、僕はおじさんたちの家に泊めてもらっていた。取材の日は、僕が大阪に帰る日だった。俊兄ちゃん、おじさん、おばさん、僕の4人で東京駅の近くの平田牧場というトンカツ屋さんに行った。やはり、僕には緊張という感情はなかった。むしろ、気になっていたことが明らかになるのが楽しみだった。そのため、注文したトンカツ定

食を食べ終わると、すぐにインタビューの時が来た。

俊兄ちゃんが教師になろうと思った訳とは：

定食を食べ終えてすぐに、インタビューを始めた。

僕は初めに、なぜ教師になりたいと思ったのかについて、聞いた。僕は俊兄ちゃんを見て教師という職に興味湧いたのだが、そもそも彼は何がきっかけでなりたいたと思ったのか、知リたかったからだ。

僕「じゃあまずなぜ教師になりたいと思ったのですか」

俊兄ちゃん「これ、いきなり難しいなあー、なんだろうね、でもなんか教えるの面白いなって思う機会が多かったなって思うよ。例えばさ、まあ学校の中もそうだけど自分なんかさ、スポーツも結構やってたから、野球やったり、体操やったりとか、あと塾行ったりとか、英語を教わったりとかなんかそういうのがいっぱいあったから、そういうのをひっくるめた時に、おもしろいなって思ったことが、まあ今振り返ってみるとね、大きいのかなとは思うよ」

話していると、俊兄ちゃんも周りからの影響が大きかったということがわかった。

いつ教師になりたいと思ったのだろうか

この後にでてくる、「元からなりたかったのか」という質問に近い気もするが、小さな頃から憧れていたのが気になったので、聞いてみることにした。

僕「いつ教師になりたいと思ったんですか？」

俊兄ちゃん「これね、結構ギリギリです」

僕「あ、そうなんだ！」

俊兄ちゃん「うん。なんかね、高校生の時に漠然と思って、でも高校の時の先生に、この調子じゃちょっといけないなあって言われて、もうちょっとちゃんと勉強してねってことなんだけど。」

僕「兄ちゃんがそんなこと言われちゃったの！？」

俊兄ちゃん「言われてた言われてた！ニコニコしてんのはいいんだけどね、みたいな。もうちょっとちゃんとやってねっていうふうに言われて。でもなんかその大学生になった時に教育学科に行くと、その時に自分はまだ半分半分ぐらいの気持ちだった。でも、自己紹介をする時に、みんなもうすごい熱いっぱいで絶対小中高の免許も取りたいです、特別支援の免許も取って必ずなんとかしたいです、っていう集まりに若干押され気味の自分がいたの。でもね教育実習行ったときかな、なんかすごく厳しかったけど、でも逆に厳しいからこそよかったなと思うことがあって、まあとりあえずやってみるか！みたいな。そう、うちね、多分ね、一回とりあえずやってみたら？　って言ってもらえる率

が高いから、とりあえずやってみて、続けられるかどうかは後回しにして、ちょっとでもやってみた
いなって思ったらやったほうがいいんじゃないっていう感覚でなる！ って決めたから、ほんと大学
三年か四年ぐらいじゃない？ 本格的にちゃんと思ったのは」

僕「えー！ そうなんだ！」

彼の体験談がとても分かりやすく、周りに影響されていた俊兄ちゃんの姿が思い浮かんだ。もっと
深く知りたいことは、この後の「元からなりたったのか」という質問で聞くことにする。

僕の知っている以外に、教師の魅力はあるのか？

僕は、教師というのは、教える側を体験できるというすごい魅力があると思っている。

けれど、教師の俊兄ちゃんは、教師の魅力についてどう思っているのだろうか。

僕「では、教師という職業の魅力について」

俊兄ちゃん「あー、これむしろ逆に外から見てる人に聞きたくて、みのるちゃん（僕）はさ、自分
がなりたいの決まってる？」

僕「教師、ありかなあーと思ってるよ！」

俊兄ちゃん「ありだなと思ってるんだね！ そのさ、必ず聞かれるじゃん？ 仕事の魅力って何っ

て。みのるちゃんはどこに魅力を感じる？」

僕「今は、自分が教わってる側だから、その、教える側にも立ってみたいな」

俊兄ちゃん「あー、なるほどね！ ああー、じゃあ、こう立場の違いってことかー。なるほどね。

そうねえ。まあ確かにそれもあるよね！ こう見えない世界が見えるというか。まあそれはすごく面白いなって思うし、でも、やっぱりね、なんだろうな、一番近くで見れるっていうのがでかいなって思うよ！ その人の変わる瞬間、多分親の次に近いんじゃないかな。人が成長する瞬間が間近で見れるのは、多分、この職業の魅力だと思っていて、であとはね、俺、あのね、同じものが続くあんまり好きじゃないの。なんて言えはいいかなあ、例えばさ自分なんかさ六年生何回も担任してるから、やる授業大体一緒なんだけど、でもいるメンバーは違うし、問いかけに対して返ってくる答えは全然違うの、反応が。だから、よく、同じ授業ばっかやって面白くないでしょって言われることがあるけど、そんなことは一切なくて、むしろ、その集団の中だからこそできることがたくさんあるから、飽きがないというか。よく工場とかで働いてる人の方が俺は大変だなと思って、毎回同じことを継続していく、ずっと続けるって方が大変で、変化がたくさんの方が面白いなって思うから、そこは一つの魅力って言うてもいいんじゃないかな！」

僕「なるほど！」

俊兄ちゃんは、僕が思う教師の魅力について聞いてくれて、僕の知らない魅力について、とても分

かりやすく説明してくれた！人の成長が間近で見られるのは、確かに教師の大きな魅力の一つなのだなあと思った。

僕の教師に対する憧れが強まる！？

俊兄ちゃんへのインタビューが、僕の気持ちを大きくさせる！？

僕「じゃあ、僕におすすめできますか？」

俊兄ちゃん「できますよー！むしろあの、このボイスメモ、ぜひ学校の先生にも伝えてあげてほしいと思うんですけど、」

僕「笑」

俊兄ちゃん「なりたいてって人が、たぶん今本当に少ないから、人が居る分には自分は越したことはないと思うし、ねえだって、いる？教師になりたいよって言ってる人。」

僕「いっぱいはい、いないかなあー」

俊兄ちゃん「そうだよね。で、多分それって自分のときよりも多分ちよつと減ってたりとか。それこそ去年の教育実習の大学四年生の子、見たんだけど、もうその子は、あの実習始まる前に、急になりたいの？って聞いたたら、僕はなるつもりはないんです、って。でも大学卒業するために必要だから、って言ってきたから。やっぱね、そういう人もいるのよ。でなんでそう思ったの？って聞い

たら、なんかちよつと厳しそうで、とか、途中で挫折しちゃう人も多いから。なんか結構黒い噂がね絶えないんですけど、でも黒い噂って、ニュースとかもそうだけど、稀だから起きてるだけだから、それがすべてじゃないよ！　っていうのは、ちよつとわかってほしいなっていうので、勧められるかって言われたら絶対勧められます！」

僕「なるほど！！」

大変なこともあるのは当然。だけど、そればかりじゃないよ！　という俊兄ちゃんの言葉が僕の胸に響いた。さすが教師だなあーと思いつつ、少し安心する自分もいた。大変なことがあっても、楽しいこともあるというのを改めて実感した。

そんな俊兄ちゃんの、大変なことや嫌なこととは…？

先ほど、ポジティブな言葉を発した俊兄ちゃん。そんな俊兄ちゃんにも、大変だと感じることや、嫌なことなどはあるのだろうか…

僕「では、仕事で大変なことや嫌なことは？」

俊兄ちゃん「あー、嫌なこと。これも聞いてみようと思うんだけど、何が嫌そうだと思うの？　それこそさ、見てたら分かんじゃん、今リアルタイムでさ教わる側から見てて」

僕「なんか、自分の家の裏の学校が、夜10時ぐらい回っても電気ついてることがあって、夜遅いの大変だなあーとか」

俊兄ちゃん「あー、そうねえ。それ、小学校？ 中学校？」

僕「小学校！」

俊兄ちゃん「小学校かー、なんか自分も先輩に言われたことだけど、自分たちがやってる仕事に、ゴールはないんですよ。終わりが無いの。だから、終わりを自分で決めなきゃいけないくて、その終わりの決め方が、結構難しい。もしかしたら、魅力に戻っちゃうかもしれないけど、魅力の一つに、自分がこういう風にしたらこういう風になって、たぶん子供がこうやって気づくから、この進め方の方が良いな！ みたいな、オリジナルの授業が作れるんだけど、そのためには、やっぱり時間を割かなきゃいけないのね。でも、時間を割くことは、仕事に対する時間をかけるってことだから、そこを、もう趣味みたいに思ってる人もいるし、でも嫌だなって思ってる、それを大変だなって思ってる人たちもいる。でなんでそういうふうになっちゃうかっていうと、その前にやるのが山のようにあるから。これは本当にいるのかな、みたいな、やっぱ整理しなきゃいけないものとか求められることが増えているから、そういう電気ついたりやんっていう問題になる。っていうのは確かに大変なこととしては位置付けられるかな。部活の話とかね、どうしてもそこが絡んでくるとは思うよ。嫌なことかあー、嫌なことって難しいね。嫌なこと、嫌なことかあ、なんだろうな、嫌なこと。大変なこととはねやっぱいっぱいあるかな。でも、どの仕事も一緒だと思うんだけど、自分たちはさ、大人と子供の関

係もあるけど大人と大人の関係もあるから、そういうところで大変だなと思ってる人もいるってのは、聞いたことある。嫌なことかぁー。ちよつと給食早く食べなきゃいけないとかかなー」

僕「笑」

俊兄ちゃん「早食いが習慣になるとかかな 笑」

僕「ちなみに、何分ぐらいで食べるの？」

俊兄ちゃん「今はね、そうでもないけど、多分本当に余裕がないと、この間なんか動画でね、上がつてたけど、なんか1分もないみたいなの、そうちよつとかきこんで余裕がないみたいなのはあるかもしれない。自分でもゆっくり食べてるよ！ 15分から十分ぐらいの間で。こんなんで大丈夫？」

僕「大丈夫！」

嫌なこと、というところで考え込んだ俊兄ちゃん。そんなに嫌なことってないものなの！？ と驚く反面、やはり、大変なことはたくさんあるようだ。でも、そのようなことをこなしている俊兄ちゃんを尊敬する自分がいた。

昔から、教師を志していたのか…？

僕は昔は、ゲームクリエイターになりたい！ とずつと言っていたのだが、俊兄ちゃんの影響を受けて、教師に憧れるようになった。俊兄ちゃんも昔は他の夢があつたんじゃないかな？ という疑問があつ

た。

僕「では、元々教師になりたかったのですか？」

俊兄ちゃん「ああ、これね！これはね、むずいけど、もう絶対コレって感じじゃなかったかな。」

僕「そうなんだ！」

俊兄ちゃん「うん、あの昨日もちよつと言ったけどね、本当にたこ焼き屋で働こうと思ってたからね」

僕「笑」

俊兄ちゃん「そんなのもあったし、それこそ、あの、大学の事務で働いてたから、事務員とかもいかなあーとか」

僕「ああー！」

俊兄ちゃん「あとなんか、野球好きだったから、球団の職員になるのとかもありかなあとか、でも塾の先生でもいいなと思った時もあったなあー！アルバイトしてたのも大きいし。でも、スタバで働きたいとかとかなんかいろいろあったなあ！いろいろあったから、元からずっとそれに対して一直線！って感じでは、自分はなかったかな！その環境とかも結構大きいかもね。何してきたみたいなね。元からじゃなかったですね。むしろ、たぶんね、分かれると思う。自分と同じ仕事してる人も、ずつとなりたかった！って言う人もいるし、お家の人がその職業だったよ！とかだと、多分な

る人多いから。うち違うけどね！」

僕「笑」

僕「じゃあ、もし、その周りの熱い人たちがいなかったら、教師になってなかった可能性もあるの？」

俊兄ちゃん「でも、結構最後は自分で決めてて、自分がよく親しくしてたね人たち十人ぐらいいたけど、正直言っちゃうと、1／3ぐらいはね、なっていない。もう途中で無理だと言って、もうやるわっていう人もいたし、それこそ自分みたいなのと一緒に、まあとりあえず一緒に頑張ってみよう！　ってお互い違う市で働いてただけだよっぱりちよつと違うなって思ってたやめるわって転職。

うん、そういう子もいたし、もう本当なんだろう大学の三年生ぐらいかな。もうきっぱりやるって言って。あの自習もいかないしみたいな、もう違う道にするわってゆって今も違う道に進んでいる人があるから。」

僕「そうなのね。」

俊兄ちゃん「でも教育実習大きかったな。教育実習とあとね、大学にいたね、そのね、なんか、教員って採用試験受けるんだけど、その採用試験を受けるために、大学でこう教えてくれるね別の先生がいるの。大学の授業を受ける先生じゃなくて、採用試験をみんなが受かるようにするためにアドバイスしてくれる先生がいて、なんか進路指導の先生みたいな感じで、その先生としゃべってたのも大きかったかな。教育実習はね本当厳しかったよ。行く前に校長先生に呼ばれて、生半可な気持ちで

やるんだったら絶対うちら受け取らずやらせないって言われた。」

僕「相当厳しかったんだね。」

俊兄ちゃん「うん、厳しかった。けどね、ちゃんと説明したら、いいよって言ってくれたから、そういうのもあったかな！ こんな感じでいいのかな？」

僕「ありがとうございます！」

俊兄ちゃん「いえいえ、追加質問あったら、いつでも答えるからね！」

僕「はい！」

たこ焼き屋さんで働きたかったというのは、取材前日に一緒にご飯を食べた時から少し話は聞いていたのだが、改めて意外だなと思った。元から志していたことではないのだけど、今その仕事に全力を注ぐことができる俊兄ちゃんはやっぱりすごいなあ。

教師である俊兄ちゃんが魅力というよりは、俊兄ちゃんという存在が魅力！？

今回の取材を通して、僕の教師という職への憧れ、なりたいという気持ちは、強く、大きくなった。教師というのは大変な職業で、黒い噂なんか飛んでしまっているようだけれど、それが全てというわけではなく、楽しいこともたくさんあるんだなあーと感じた。感じたというか、俊兄ちゃんがこのように言ったことが印象的だった。それと同時に、そのように考えることができ、僕にも優し

く接してくれる、「俊兄ちゃんという存在」が魅力的なのだと強く思った。いつも馴れ馴れしくタメ口で話しているのが申し訳なるほどに、俊兄ちゃんは立派な大人なのだ。

でも、何よりも、こんな僕と遊んでくれていることが本当に嬉しいし、感謝でいっぱいである。でも、僕はまだまだ、俊兄ちゃんについて知らないことがたくさんあると思う。せっかく仲良しなものだから、プライベート内に留まってしまうことにはなるが、他にも聞きたいことは聞きたいと思う。また、今回の取材は、俊兄ちゃんの知らないことを知ることができる、大切な機会だったと思う。

取材を終えた後、「写真、とってもらいたい！！」と言ったら、快くOKしてくれた。

昔、同じようなツーショットをとってもらったことがあるのだが、その時は、まだとても小さい時だった。でも、今並んでみると、僕の方が身長が高かった。貴重な俊兄ちゃんとのツーショット、さらに、僕の成長まで感じられた。この後、東京駅で別れたのだが、また行きたいな、会いたいなと思った！



友達と僕の成長

聞き手 川岸太郎

取材の動機

今回の取材相手に選んだのは、一年生の時一緒のクラスだった、楠本アオシさんだ。一年生の時あまり友達のいなかった僕にとって、アオシさんはスポーツもできるし、ゲームもできるし、とても優しいので中学一年生の僕にとってとてもあこがれていた友達だった。

アオシは僕にとっていつの間にか私もこのようになりたいなあと思えるような友達になっていた。そこで、僕は、なぜアオシさんはみんなから人気があり、学年の有名人なのか？ また、なぜ、スポーツがよくできてみんなにも優しいのかを徹底的に取材して、アオシさんのような格好いい中学生になるため、調査していこうと思う。

取材依頼のLINEを送って日程が決まるまで

アオシさんとはだいたい週に一回lineしているのでlineを使ってやり取りしていこうと思う。アオシさんに「8月30日に総合の課題で取材したい事があるんだけど8月30日予定空いてる？」とLINEしたら、「オッケー分かった。」と返事が来た。日程もあっさりと決まったので、早速アオシさんに取材していこう。

取材概要

日時…2023年8月30日 午後2時30分から3時30分まで

場所…清教学園中学校 2年生の空いている教室

取材した方…楠本アオシさん

自分との関係…とても仲が良い友達（今はクラスが離れている。）

取材場所に到着してインタビュ어가始まるまで

アオシさんとの相談の結果、取材場所は河内長野市にある、清教学園中学校の2年生の空いている教室ですることに決まった。学校に向かっていている電車の中、アオシさんに「どのようにしてインタビューしようかな？」と考えた。

思っていたよりもかなり早く部活が終わってしまったため、約束の時間よりも30分以上早くついてしまった。久しぶりに一対一で話すので緊張してしまった。タブレットと筆箱を持っておちついて待った。時間になると約束通り、アオシさんが来てくれた。今からインタビューすると考えると手汗が止まらなくなってしまった。「よし、言いたいことをしっかりと記憶してインタビューをするぞ」と決心して教室に入った。

格好いい中学生、アオシさん

約束と同じ時間にアオシさんは教室に来てくれた。その日アオシさんは部活だったため朝から学校にいたそうだ。半年ぶりにアオシさんと会って、背が高くなったなあと思った。顔もかっこよくなっていた気がした。もうまるで大人のような感じがした。久しぶりに喋るので、気まずくなるかな？と心配していたが、そんなことはなかった。アオシさんが「久しぶりやな！めっちゃ日焼けしたな」と言ってくれた。この後、全く関係のない話をしていると十分が過ぎていた。

改めて、今回の課題について話した後、「先生からの添え状」を手渡しした。すると、「オッケー」と言ってくれた。録音のことは緊張して忘れてしまっていた。

アオシさんがなぜみんなからの人気者で優しいのか？

インタビュを開始した。私はまずなぜ彼があんなに優しいのかを尋ねることにした。一年生の頃友達が少ない僕にとっても優しく話しかけてくれたからである。

私「なぜ君はそんなに人気者で優しいの？」

アオシさん「え、そんなに人気者で優しいか？」

私「めっちゃめっちゃ優しいよ！入学式の日も1人で困っていた僕を優しく話しかけてくれたじゃん！」

アオシさん「え、何を言ってるんねん！ お前困っている奴がいたら助けるに決まってるやんか1人で困っている人見たら可哀想で仕方がないやんか。」

私「そうやなアオシの言う通りやな。」

アオシさん「うん」

私「じゃあもう一つ聞いていいか？」

アオシさん「なんやいっばい言うてみい。」

私「なんでそんなにアオシはそんなに運動神経もいいし、ゲームも上手いん？ 教えてや」

アオシさん「はっはっはー、それは簡単な話やで。運動神経がいいとお前が言う理由はな、ただただスポーツの習い事をしていただけからや。例えば、サッカーとか。後ゲームが上手いのは昔からたくさんやってきたからやと思うで。それにしてもお前変なこと聞くやつやなー。」

どんどん話しているうちにどんどんと彼と喋っているのが楽しくなっちゃい、気づいたら緊張も手汗も止まっちゃいて、時間も過ぎていた。アオシさんはこの事その他にも、勉強の話をしてくれた。つい楽しくなって喋っていたので、つい興奮してしまい、話が脱線してしまい、ついベラベラと喋ってしまった。

人に優しく親切にしたらあこがれの中学生になる？

今回の授業のテーマである「魅力」について詳しく掘り下げるため、自分がアオシさんのことを魅力的だと思ってきたこと、その背景を、アオシさんに直接、正直に打ち明けることにした。

私「俺さ一年の頃からお前に憧れているところあんねん。例えば、人と仲良く会話ができて、嘘もつかずに正直に話をしてくれたりするところとか。ほかに、まだまだいいところがたくさんあって、それで今回、お前のことを取材相手に選んでインタビュートしたんやけど、人に優しく親切にしたりすることで「大人になったな」って思うことってある？」

アオシさん「あるよ。んー自分で言っているのか分かれへんけど、俺がな幼稚園の時はなかなか人に親切っていうかあまり他人に関心がなかったけど小学校に入る時、周りのみんなから、もう少しみんなと喋ったら？とアドバイスをしてくれたから、なるべくたくさんみんなと喋って、親切にしようと思ってるねん。」

私「なるほどねーそういうエピソードがあったのかー。」

アオシさん「そうそうだから初めから俺もみんなにわちゃわちゃと喋ってなかったんやでー。あ、もう一つあるわ。こうやって川岸に優しいって言われたのも大人になったって感じたかもしれない。あんまり『アオシくんって優しいだね！』って言われたこと少なかったから。」

私「そうかーなるほどねーこういうふうに人に感謝の言葉をしっかりと伝える事ができたりしたら

友達との交流がとても深まるってわけね。」

アオシさん「その通りよ！ 結局感謝の言葉をしっかりと伝えたいんだと思う。」

私「アオシのおかげでわかったよ。今日は部活も会って早く帰りたいやろくに俺のためにインタビューしてくれてありがとう。」

アオシさん「こちらこそ今日はありがとう。」

私「うん、バイバイ。」

アオシさん「バイバイ。」

取材を終えて

取材を通じてわかったアオシさんの「魅力」は、一言で言うところ「感謝のことば」だと思う。取材相手に選んだ当初は、一年生の時に仲がとても良い友達としか思っていなかったが、取材が終わった後ではまるで本当のお兄さんみたいな感じが溢れ出ていた。取材を聞いているとアオシさんが大人へと向かっている様子がよくわかった。今思い返してみると、私が、インタビュをする前、「なぜ、アオシさんはみんなに優しい上、人気者なんだろうか？」と疑問に思っていたがもう今は明確と理由がわかった。それは、アオシさんは小さい頃からみんなに「ありがとう」「手伝おうか？」などの感謝の言葉や相手を思いやるような言葉をたくさん言ってきたからである。後、今回のインタビュでみんなに人気者になるためには、スポーツやゲームの才能はあまり必要がないということだ。何より

も必要なのは友達への感謝の言葉や思いやりの言葉をかけるということだ。

「最後に記念撮影とつていい？」と尋ねると、「オッケー撮ろ〜」と言ってくれた。そういえば、アオシさんと写真を撮るのは初めてだ。そう考えるとなんでかわからないが嬉しくなってしまう。大人になったなと思うアオシさんと自分が並んでいた写真を見ると、インタビューする前のアオシさんに比べてなんだかっこよく見える。自分もアオシさんのような格好いい中学生になるために努力をしていかなければならない。



憧れから決意へ

聞き手 根屋川蘭

取材に至った動機

今回取材相手に選んだのはバレエ部の先輩の山岸賢太郎さんだ

初めて会ったのはバレエ部の体験の時だった。見知らぬ人ばかりでオドオドしていた僕に「パスやろー」と声をかけてくれて、パスをしている時も「もうちょっとこうすればいいよ」と教えてくれた。

それから僕はバレエ部に入部したが体験の時以降、先輩とはあまりかわりなかった、乗っている電車も一緒だけれど何も話さないのが体験の時の記憶は自分だけしかおぼえてないのだと思った。

だが、一年の後半あるゲームがきっかけで電車に一緒にのったことがあった。そのときはちょっとしかししゃべらなかつたけど、次の日ぐらいから部活でもよくしゃべるようになり一緒に帰ったりもするようになった。元々、仲のいい先輩は何人かいたが、山岸さんは何かこう「友達感」があった。

それが魅力の一つでもあるのだが僕が一番魅力を感じるのには、自分にできないことができる場所だ。どういう時にその魅力を感じるかというと、ある行動からの次の行動への速さである。自分ではワンテンポ遅れるところをサッと素早くこなしていくので少し嫉妬しながらもすごいなあとかんしんしていた。

取材をお願いする手紙を渡したとき

山岸さんとはいつも部活で一緒に練習したり一緒に帰ったりと仲がいいので緊張なんかすることは全くないが、なぜか山崎先生からの依頼文と自分の動機レポートを渡す時だけめちゃくちゃ緊張してしまい、そっけない感じで「ハイ」と渡してしまった。そのあとは逃げ出すようにしてその場を離れたので山岸さんの返事は聞かなかったのだが、その日の部活の時に、山岸さんに「おまえこれなに取材するん？」と聞かれ、「自分の魅力を感じる人に魅力について聞くんですよ」と率直に答えた。すると山岸さんが「なにそれ？俺らそんなやつたっけ？」と言ったので前の年代にはなかったのかと思い聞いてみると「忘れたわw」と言われた。

そのあと、いつする？という話になり、電車の時間が長いのでその時間で取材することになった。

取材概要

日時…2023年8月19日

場所…近鉄電車内

取材した方…清教学園中学校 3年A組 山岸賢太郎さん

自分との関係…部活の先輩と後輩

取材が始まるまで

午前中に部活が終わりいつものように山岸さんや他の部員と一緒に宿題どれくらい終わった？とか、あのゲームどれくらい進んだ？とかそんなくだらない話をしながらしらかし(通学路)を降りていた。部員のほとんどが南海電車に乗って登下校していて、近鉄電車を使っているのは僕と山岸さんだけだった。なので河内長野駅に着いたらいつも山岸さんが先に電車を降りるまで2人きりだった。

僕はこの取材を夏休みが始まった時ぐらいから早くしないと、と思っていたが部活が終わってくたのたのまま電車に乗ると、もう何もする気力がなくなってしまう。そのままずっと携帯を触っていたら自分の最寄り駅についているのが日常だった。でもなぜかこの日だけは、取材しないと、と思えてその流れで取材をした。山岸さんの服装はいつもと変わりのない僕と同じ制服で、見た目もいつもと同じ、少し天パで優しい目をしていた。

取材をしますという紙を出すときはなぜか緊張していたがいざ取材をするとなった時は、電車の中だからかもしれないが全く緊張はしていなかった。

バレー部に入ったきっかけ

取材を始めた、僕はまず、バレー部に入ったきっかけを聞くことにした。

僕「先輩はなぜバレー部に入ろうと思ったんですか？」

山岸さん「『ハイキュー』見たから」

即答だった。『ハイキュー』とはバレーボールのアニメで、僕も家族ぐるみで好きだった。

山岸さん「『ハイキュー』見てバレーしたい！ って思ってた自分の偏差値でもいける学校でバレーできるところ探して、あったのが清教やった」

僕はその理由を聞いてめちゃくちゃカッコいいなと思った。いい大学に行きたい！ とかじゃなくてこれがしたい！ だからここに行こう！なんてカッコいい生き方なんだ。改めてとんでもなく魅力的な人だなと感じた。

なぜ僕より1テンポも2テンポも速いんだ！

次に僕が一番の魅力だと感じているある行動からの次の行動への速さについて言及してみた。

僕「次に僕が一番聞きたいことなんですけど、ある行動からの次の行動が早いのは何か心がけていたりすることはあるんですか？」

山岸さん「俺はお前ぐらいの時に一番したかったスパイクが全然できひんかったん」

スパイクとはバレーボールにおける攻撃のことであり、ネットの近くで高くジャンプして相手のコートにボールを打ち込むという動きだ。

山岸さん「何回も挑戦したし色んなことも試してみたけど全然できひんかって、どうしよう、つてなってる時につてる時に、そのスパイクを受ける側のレシーブをまず極めようと思ってん」

レシーブとは、相手側からきたボールを受ける、つまり守備である。

僕「スパイクが上手くなるためのレシーブ練習って一体どんなものなんですか？」

山岸さん「自分がどこにスパイクを打たれたら受けづらいかを考えながら練習すんねん、じゃあスパイクを打つ時にある程度考えながら打てるやろ？」

なるほど！と思った。山岸さんはあんなにもスパイクを打てるようになった理由は、自分の一番したいことから一度離れて別の視点から見てみるということをしたからだ。

山岸さん「ほんでそういう練習したら自然とこのあとどこに行けばいいかとかがわかってくんねんレシーブでもスパイクでも、それがお前が言ってる行動からの次の行動の速さにつながってると思

うで」

自分ができなかったことにいちいち落胆しているのではなく他の方法を見つけてそれを実行しているのがすごいと思った。

憧れの憧れ

僕「はつきり言って僕は先輩に憧れてるんですけど、先輩にも憧れてる人はいたんですか？」

山岸さん「おったよ、自分にできないことができるところに憧れしかなかった」

僕の山岸さんに対する憧れと全く同じ理由で少し嬉しかった。

後輩への接し方

最後に後輩への接し方について聞いてみた。動機でも話したように山岸さんは先輩感がなくてとても接しやすいのだが、それには何か理由があるのかと思い聞いてみた。

僕「なぜ山岸さんは後輩に対して先輩面しないしそんなに優しいんですか？」

山岸さん「優しいのは特に心がけてることもないからそういう性格やと思う、先輩ヅラせえへんの

は自分がされて嫌やからかな、自分の下に人を作りたくないし逆に人より下でどれだけがんばれるかが 大事やと思ってるから」

やはりとてつもなくこの人はカッコいい人だ。

取材を終えて

取材を通じて分かった山岸さんの魅力はひとことと言うと「優しさからは感じられない努力精神」だと思う。取材をする前はただただ「自分にできないことができるから」ということしか感じていなかったが、それをできるようにするために絶え間ない努力をしていたことがわかったし、自分と同じで元から才能があるわけじゃないと分かったから少し安心した。

そして僕についてもこう言ってくれた、「お前のことは後輩として、伸びしろがあって俺より上手くなると思ってるで、ほぼ同級生みたいで絡みやすいし」と言われてめちゃくちゃうれしかった。

でも、今までは山岸さんが目標だったけど「自分より上手くなると思う」と言われた時に「山岸さんになる」じゃダメだなと思えた。

最後に、「優しさからは感じられない努力精神」という魅力も交えて山岸さんとは泥まみれになれるかっこいい人だと思っています。



先輩のすこさ

聞き手 佐久間ユイ

取材の動機

私が取材をしようとしているのは部活の先輩である中三の田中ユウ先輩だ。

ユウ先輩は中学合唱部部長兼メゾのパートリーダーをされている。（※メゾとは女声三部合唱の真ん中のパートのことである。）

ユウ先輩とはパートが同じ、アイドルが好きという共通点がありよく話す。

私が取材をしようと思ったのは、ユウ先輩は常に明るく笑顔だが集中するときにはきっちり切り替え、周りを見て行動できると感じたからである。

エピソード

実際に私がしてもらったことを3つあげる。

1 つ目は私が中一の時の合唱部の新歓（新入生勧誘）の時、知り合いがおらず、不安でいたときに話しかけてくれただけでなく、笑わせてくれた。

2 つ目は部活の遠征時に駅の改札に入れなかった時には原因を一緒に考えて解決してくれるだけでなく、部活のメンバーに共有・報告してくれた。

3 つ目は歌う時の並びに問題があったとき問題点を確認して、まとめてすぐに高校の先輩に伝えてくれた。

ということがあった。親身になって考え、先輩としてやることをさらに上のことをしてくださり本当にありがたい。このようなことから取材しようと思った。

取材概要

日時…2023年8月21日（月曜日） 13時45分～14時5分

場所…1B教室

取材相手…3年C組 田中ユウ先輩

関係…合唱部の先輩・後輩

取材依頼

私は取材したいということを部活が始まる前にユウ先輩に話した。すると、中三の他の先輩も集まってきて何をしているのかを尋ねられたので「総合の課題で、自分が魅力を感じている人に取材するんですけどユウ先輩にやつてもらいたくて…」と答えると、先輩たちは「この人のどこに魅力を感じるん？」と聞かれた。私が経緯を話している間ユウ先輩はニコニコしており、とてもやさしいと感じ

じた。家に帰ってからLINEやりとりして、8月17日の部活終わりになった。当日ユウ先輩は体調不良で部活を欠席されたのでLINEでやり取りして8月21日に変更になった。

取材

緊張しながら取材の準備をし終わり、座った時にユウ先輩は質問内容と、私が事前に書いた取材動機レポートを確認されて、「難しそうやけど、それっぽく頑張るわ」と言ってくださり緊張をほぐすことができた。私の取材動機を読んでユウ先輩は「えっ……うち切り替えできてる？」とおっしゃっていた。意識して切り替えているわけではなく、無意識に切り替えができていることに驚いた。

最初に、普通に疑問を抱いていた初めて後輩ができた時に意識されていることを聞くことにした。

私「初めて後輩ができた時に意識したことってなんですか？」

先輩「私が実際初めて中学一年生で（部活に）入ってきた時に先輩の存在って言っちゃ恐怖、恐怖ではない、恐怖の物体がいるなあみたいな感じやったから、威圧感を与えないようにしました。無意識に真顔で立ってるだけでそれですら威圧感……年上ってだけで……同級生やったら「なんやねんあいつ真顔で突っ立ってるで」終わるけど……先輩やったらえっ怖い……えっ？なんかした私……ってなるから、威圧感を与えずなるべく笑顔でいることを意識しました。」

一つの質問だけでユウ先輩らしい気遣いがあると感じた。次に私自身中2という立場で先輩であるからそのことを意識して先輩として意識していることを聞いた。

私「はい、次に先輩として意識していることは？」

先輩「部活動？」

私「部活ですね」

先輩「部活動で先輩として意識していることは…あの…後輩が自分の…後輩にも真似されてもいい行動しか、しない。逆に後輩に真似されちゃいけない行動をしないように試みる。例えばなんか、サボったりしたらダメじゃないですか、いろいろ…一応結構後輩の立場だから言わないだけで結構わかるじゃないですか」

私「わかりますね…」

先輩「わかるから、だからやっちゃいけないことをしない、なんか後輩に悪影響を与えない、与えるようなことはしないようにしてます。」

この質問をして先輩の強い責任感を感じた。次に部活の顔といっても過言ではない部長という立場について聞いた。

私「はい、部長になると分かった時、正直どう思いましたか？」

先輩「合唱部ってあの『恐怖のペーパー』（※）じゃないですか。」

（※合唱部では4月に行われる定期演奏会が終わった後にA先生、H先生（合唱部の顧問の先生）から紙が配られ、その紙に部長・副部長・各パートリーダーが書かれており、とても緊張することから「恐怖のペーパー」と合唱部の一部に呼ばれている。）

私「紙で発表される…」

先輩「そうそう、で、正直、中3は四人しかいなくてパートリーダーの枠に必ず入るじゃないですか絶対…やからしょーみ『ソプ2（ソプラノ2）田中ユウ』で終わりやろなって思ってたんすよね。でもなんか『（紙の）表を向けてください…：中学部長、田中ユウ、よろしくお願いします』ってA先生に言われて、混乱…自分が部長になるって思ってたし、そんな合唱部内で、そのなんか『部長って言ったら田中ユウしかいなくね』っていう行動をしてきたつもりじゃなかったって、個人的に思ってる…。みんなと同じかんじに、その風に過ごしてきただけやったからびびったけど結局A先生に、どうゆう決め方をされたのかはわからへんけど最終的に、私にお願いしようと思ってくださったからそこはなるべく応えるしかないよねって…自分ができる限りは応えたいなって思って、部長として頑張ろうかなって感じですよ。初めはマジでなんで私って思ったけど、まあ、数時間考えてせっかく選んでくださったんやから頑張ろうっていう思考になりました。」

この質問からも先輩の強い責任感があふれでていた。最後に先輩としても後輩という立場である中3になってから意識していることを聞いた。

私「部活の時に意識していることってなんですか？」

先輩「部活の時に意識していることはやっぱり中高合同で活動することが多いから、中1から高2までいる中で中3って一番真ん中で板挟みされてる、中途半端な立ち位置やん？ やから上にも下にも気遣いが大事で、中途半端な立ち位置にいるからこそ今にしかできないことってあると思って一番上やったら一番に下のことを考えなあかんし、逆に一番下やったら先輩の足引っ張ったらあかんし：でも真ん中って一番遊べる時期やからこそひたすら全力で楽しんです。で、ちゃんと注意することはちゃんとする後輩にももちろん注意するし先輩にもこれはちゃうくない？ って思ったことはちゃんと注意するようにしてます。」

私「苦手な人と接する時に意識していることってなんですか？」

先輩「私にもいるし、誰でも苦手な人はいると思うんですけど、まず、苦手な人をこの人苦手やなっって変に認識しちゃうと私はもう、多分『あつむり：苦手や、もう無理、関わらへん』ってなっちゃうから苦手な人と接するときにはもう『この人、苦手な人じゃない。めっちゃいい人、お花畑・ちょーかわいいちょーかっこいい・まじで天使・めっちゃいい人』って勝手に脳内すり替えて都合よくすり替えて普通に楽しくお話しする苦手な人やと思わずに話をする。」

私「ポジティブに考えるっていいことですか？」

先輩「そう。苦手な人の悪いところを全部忘れるって難しいんやけど気にせずに喋るここの部分苦手なんよなじゃなくて気にせず気軽に話します。」

私「はい、ありがとうございます」

取材を終えて・感じたこと

取材を終えてからも色々雑談をしたり、部活についての相談にも乗ってもらった。そんな時にもとても優しく、気遣いがあり、笑顔がとても可愛らしかった。こんな先輩になりたいと思った。



相似の性格

聞き手 荻野彩夏

真逆の魅力

私が1年生の1学期、まだバス通学だった時に少し話した程度でほとんど共通点がなく、同じクラスになった始業式の時も全然話さなくて、「同じクラスの本が好きな子」という印象が強くて、そんなに関わりはないと思っていたが、いつの間にか仲良くなっていた。

最寄り駅が同じだったというのもあるけど、なにより、この子と仲良くなりたい！と強く思った。

私と高木梅さんは性格も、趣味も、所属している部活動も、何もかもが正反対だ。彼女はとても誠実で、本を読むことが好きだった。彼女がとても国語が得意なのも本好きだということも影響しているのだと思う。合唱部で日々頑張っている。正反対だったからこそ私にしか感じるができない「魅力」が何かあるのだと思う。だからその魅力を探していくために今回彼女取材したいと思った。一度きりの取材で数えきれないほどの長所を持つ、彼女の魅力全てを見つけ出すのはほぼ不可能だろうが、それでも彼女が持っている秘めた魅力をたくさん見つけることができる機会になればいいなと考えている。

先程も述べたように、彼女はいつも空回りして周りに迷惑をかけてしまう私と違って、真面目で責任感があって大人っぽい性格だし、私よりもずっと賢い。なによりとても誠実だった。感情をすぐ顔

に出してしまう私とは打って変わって彼女はいつも笑ってくれる。誰にでも優しく、彼女の存在は私にとっての憧れだった。相談をしたらどんな時でも聞いてくれて、アドバイスをしてくれるのではなくてずっと話を真剣に聞いてくれて、まるで自分のことのように一緒に物事を考えてくれる。

私にはそんなことができない。いつも口を挟んでしまうし、なにより、「人のこと」だと思ってしまふ。彼女のように集中して物事に本気に向き合うことができない。いつも適当に流してしまっている人間だった。特に勉強とか、自分の嫌いな分野に関しては適当に流している。だからいつも私は中途半端だった。たとえば、「課題？ 提出は明後日だから明日やればいいか！」と後回しにしてしまふ。そして結局間に合わず、先生に謝る。怒られる。やる気がなくなる。毎日がこの繰り返しだった。正直自分でも中途半端すぎるこんな自分にうんざりしている。こんな自分を変えたい、という意味も込めて今回、彼女に取材を試みたいと思った。

取材依頼から日程が決まるまで

クラスが同じだと言うこともあり、総合学習の時間が終わった後、彼女に取材依頼をした。

明るい笑顔で彼女は快く私の取材を受け入れてくれた。日程はLINEで決めた。彼女とLINEするのは普段から時間割や課題の範囲を聞いていたりしたので慣れていて、私の都合のいい日を高木さんに送ったら翌日の朝に返信が来た。そこからはトントン拍子で日程が決まった。初めはラーニングコモンズで取材をするという予定だったのだが、さまざまな事情で最寄り駅が同じだということもあつ

て、和泉中央駅前のマクドナルドに8月9日の水曜日、14時30分に集合しようということになった。その日は高木さんはが部活があつたので部活終わりにわざわざ来てくれることに対して感謝の気持ち忘れずに取材をしようと思った。高木さんと学校外で会うのは初めてなので「うまく取材して高木さんの魅力に少しでも近づくことができるかな」と少し緊張しつつも楽しみだと言う気持ちを膨らませながら約束の9日を心待ちにしていた。

だが、当日の13時を少しすぎた頃に高木さんからLINEで「ごめん！部活で少し遅れます。」という内容の文章が届いたので急遽15時からに変更して取材を行った。

取材概要

日時…2023年8月9日水曜日15時から16時15分まで

場所…マクドナルド和泉中央店

取材した方…2年C組 高木梅

自分との関係…今年初めてクラスが同じになった魅力を感じる友達

所要時間…75分

取材場所に到着してインタビューの開始

駅前のマクドナルドから私の家まで3分、高木さんの家からは20分という位置にあった。5分前

に着く計算で14時50分に家を出た私だったが、ちょうど家を出たときに高木さんから「ついたよー」といった「ㄣㄣ」が届いた。焦った私はダッシュで家の前の坂を駆け上がり、駅前のマクドナルドに急いだ。私に着いた時には制服姿で姿勢良く立っている高木さんの姿があった。やはり合唱部ということもあり、姿勢が良かった。いつも猫背の私にとっては高木さんのこう言うところにも魅力を感じつつあった。

そして普通に登場するのもなんなので後ろから驚かそうと思い、気づかれてしまわないようにそつと後ろから近づき、わっと驚かしてみると彼女のリアクションは意外にも「わあ」と少し微笑んだ感じだったので「あれ？」とこちらが少し拍子抜けして驚いた。でも学校の高木さんもこんな感じで落ち着いた雰囲気の人だったなと思った。

いざお店に入ってみると人が少ない時間だったので、空いている席はすぐ見つかり、レジ前の席に座った。マクドナルドはバーガー、ナゲット、パンケーキ、季節限定もの、サラダ、ハッピーセットなどとメニューが豊富だが、お互いにもうお昼を済ませた後だったので間食程度にここはポテトのMとオレオのアイスクリームを高木さんと二人で食べた。やっぱりマクドナルドの食べ物なんでも美味しいなと感じた。

そして少し落ち着いてから取材を始めた。二人ともお互いを取材するという形だったのでまずは私から高木さんに取材させてもらうことになった。録音する？ といった話になったが店のBGMがかなり大きく、うまく声が入らなかったたのでノートに聞きたい質問を並べて順に高木さんに質問した。

夢中になれるもの

聞きたいことはたくさんあったけれど、まずは彼女の所属している合唱部について質問をしていくことにした。私は高木さん意外の合唱部員の子達から、「高木さんの歌声は安定していて綺麗だよ」と聞いていたので裏で相当努力しているのだろうなと思い、どうしてそんなに物事に熱中することができるのかについて尋ねることにした。私は一つの事柄について熱中することができないから、今後の自分の参考にするためにもこの質問を一番初めにした。すると高木さんは合唱部に入学した理由とともに話してくれた。

私「高木さんはなぜそんなに一つのことに対して熱中することができるの？」

高木さん「私、小学校から合唱部に所属していて、中学に入学するときも吹奏楽部とか、家庭科部とかどこの部活に入るか迷っていたのだけど、小学校の先生に合唱部を勧められたのもあったし、元々清教には小学校が同じで今は高校一年生と二年生の先輩が合唱部に所属していたのもあって、合唱部に入部を決めたよ。普段の部活で合唱している時は眠いし、何度も同じ曲を歌っていると段々飽きてきちゃうから、あんまり楽しくないなって感じちゃう時もあるけど、大会で歌うときは楽しいよ。だから自分にとって合唱は楽しいから、楽しいことには熱中できるね。」

と語ってくれた。確かに自分の楽しいことは私も何時間でも熱中することができる気がする。

そして次は合唱部の雰囲気について聞いてみた。

熱中することができる環境

私「合唱部って、どんな雰囲気なの？」

高木さん「うーん、みんな仲が良くて明るいよ。私は特にBクラスのAさんとか、Sさんと仲がいいけど、みんなとは本当に仲がいいよ。合唱部には夏合宿があるんだけど、そこで過ごすホテルの部屋は同期だけじゃなくって、先輩とも同じになるから朝早くからすぐ起きて動かないといけないの。だから家とは全く違う風に過ごしていかないといけないから疲れるねー、笑でもホテルの屋上からMさんと見た夜の海は忘れられないなあー」

合唱部のみんな仲がいいといった雰囲気がとても羨ましかった。私の部活には合宿がなく、普段の練習でもしんどい時は笑いあったりすることが少ないので、そういう面も含めて合唱部が羨ましいなと思いながら聞いていた。でも逆に嫌になってしまいうことがないのか聞いてみると、結構意外な答えが返ってきた。

私「そんなに楽しい環境だったら、嫌になることも少ないよね？」

高木さん「ううん、意外とそうでもないよ。やつぱり先輩に怒られた時とかは嫌になっちゃうこと

もあるし、明後日合唱の本選があるんだけどそこで歌う『双子座のあわきひかりは』って曲なんかも半年以上歌っているからもう飽きちゃって嫌になっちゃうこともあるんだよね〜笑」

やはり、高木さんでも自分の好きなことが時々嫌になってしまうことはあるんだなと思い、私もこのことを聞いて少し安心することが出来た。どんなに好きでやっていることでも時々嫌になってしまいうこともあるのだと思った。合唱部についての質問はここまでにして、次は私が高木さんに感じる魅力について高木さん自身はどう感じているのかについて尋ねることにした。

正反对どころか全く同じ？

私「私は真面目なところとか、勉強ができるところに魅力を感じているんだけど、高木さん自身はこの事についてどう思う？」

高木さん「私は自分が真面目だとはそんなに思わないかな。あと、勉強は自分の好きなアニメのイベントとかやっている時はやる気が出て自分からどんどん取り組んでいくことが出来るけれど、なんにもない時はやる気が出なくて本当に勉強が嫌になっちゃうことがあるね。あと私は一日の予定、つまり一日で自分のやることを決めちゃったらそれ以外のことをしようとしなからそこは短所だと思うな。でも周りからよくニコニコしてるね、って言われるね。そこは長所だと思う。」

私は高木さんがとても真面目だと思っていたので自分ではそう感じていなかったことに対してかなり驚いた。またやる気のある時もない時もどんな時でも勉強しているから成績がいいのかなと思っていたらアニメのイベントの時はやる気が出て勉強できるということを聞いてとても共感した。「高木さんと私はそんなに真逆じゃないのかもしれない。」とこの時感じた。

最後に、今年初めて自分にも後輩ができて正直最近手く「先輩」をやれていない気がしたのでどうすれば高木さんみたいに、先輩らしく、注意するところはしっかりと後輩に注意して、「こうした方がいいよ」などとアドバイスをしたり、後輩に対して視野を広げた気遣いや、先輩としての威厳を守っていくことができるのか聞いてみた。

憧れの先輩

私「どうすれば良い先輩になれるかな？合唱部では高木さんと後輩はどんな感じ？」

高木さん「うーんそうだね、私は最寄り駅が同じ和泉中央の後輩のYくんっていう1年生の男の子がいるんだけど、結構ぎこちなくて敬語とか時々使っちゃったりする笑だから私よりも三年生のあきは先輩の方が先輩らしくいれている気がするな。」

私「A先輩って、高木さんから見てどんな感じ？」

高木さん「A先輩、どのパートでも歌うことができるんだよ。アルトでも、メゾでも、ソプラノでも、どんな声でも出すことができるし、いつも部活のことを考えて素早く動いていくことが出来て

いるから、そういう面で見たら私の憧れの人だな。」

確かに自分のことよりも部活のことですぐ動けるA先輩がすごかったいいと思ったし、高木さんは完璧だと思いこんでいたけど、こうして40分ぐらい取材をして高木さんの魅力にだんだん迫っていくと色んな高木さんの魅力を知れて、自分と重ね合わせて見ると案外、真逆ではなくほぼ同じだったということに気がついた。自分は高木さんの性格を勝手に思い込んでしまっているところがあったのかもしれない。だが取材を通して改めて実感してみるとなんだか嬉しかった。

取材を終えて

高木さんの魅力を一言で表すと、「優しさ、誠実さ」だと思う。

なぜなら、取材前に感じていた「素敵な女の子」という私の中の人物像は取材を通して揺らぐことはなかった。だが、今回の取材を経て考えてみると、私と高木さんには意外にも共通点が多かった。例えば、やる気が起きるものがあれば嫌なものでも熱中することが出来るところ。どんなに自分が熱中できるものがあっても時々嫌になってしまうこともあるところ。時々サボってしまうところ。部活中眠くなってしまうところ。他にも沢山、ここには収まりきれないぐらい、高木さんとの共通点を見つけることが出来た。高木さんと私は案外、似ているのかもしれない。だからこそ、仲良くなれたのかもしれない。そこから魅力を感じたのかもしれない。たくさんの「かもしれない」

が溢れてきて、高木さんに感じていた魅力に以前よりも迫っていくことが出来た。

そして私はこの取材を通してこれからの自分の参考になったと感じている。どういふことかと言うと、どうすれば物事に熱中することができなのか、という質問をした際に「小学校から長年続けている、自分の好きな事だから」という風に高木さんは答えてくれた。そこで私は昔から馴染みのあるもので、自分の好きなものならなんでも人はそのことに対して夢中になることが出来るんだと思った。確かに私も昔から「絵を描くこと」が好きでよく画用紙いっぱいクレヨンを広げて自分の好きな絵を描いていた。だがしかし最近では部活、勉強、習い事などやらなければいけない事が増えてきて、自分の好きだったこと、ありのままではいられる場所を見失いつつあったと思う。だが今回の取材を通して高木さんにまた私が「熱中することが出来るもの」について思い出させてくれた。これから自分が心から楽しめる場所を見失わないように、日々暮らしていきたいと思う。

このことから言えることは、今回の取材はとてもいいものになったという事だ。遠い憧れの存在だった高木さんは案外、自分との接点が多く、自分と似ていることが分かった。180度反対の関係だと勝手に私が思い込んでいたが、同じのように見えてどこかまた違った個性、魅力を持った同じ人生の延長線上に生きている同じ人間だと改めて今回の取材を通して感じる事が出来た。私がこのレポートを通じて一番に伝えたいことは「自分が熱中することが出来るもの」を思い出すことが出来た、ということだ。高木さんの魅力に迫るということが今回取材をするテーマだったのだが、自分が熱中

できることを再確認することができたので、今回のレポートのテーマ、つまり読み手に一番伝えたいことは、取材をする以前は蔑ろにしがちだったものが自分にとっての大切な「趣味」だった事を取材によって思い出すことができた、ということだ。高木さんに取材したからこそ気づくことができた。だから高木さんに取材して本当に良かったと思うし、より高木さんの魅力について深く迫ることが出来たおかげでこれからの高木さんと私の関係により深い絆が生まれたようにも感じた。

記念撮影

私「最後に、記念撮影してもいい？」

高木さん「うん！もちろん！！」

今回の取材を通して高木さんから色々な事を人生において忘れてはいけない大切なことをたくさん教えてもらった。高木さんに取材することができて本当に良かったと思っている。これからはどんなことにも計画性をもって様々なことに挑戦し、いつかは高木さんのような人になりたいと思った。



家族愛に溢れる母

聞き手 新名ほのか

性格反対の母

私が魅力を感じる人は、母だ。母と私はよく性格の違いによってケンカしてしまう。私はとても細かくて心配性で、何か大変な物事に直面してしまうとすぐにパニックになってしまふのに反して、母は普段マイペースで穏やかな性格をしている。これらによって、自分たちのペースがたまにかみあわなくなつて、ケンカをする。だけど逆に、性格が私とは違ったからこそ助けられたこともあった。

私が小学校6年生で受験がもうすぐの十二月のころ、まったく成績がよくならず凄く不安を抱えていた。「落ちたらどうしよう」「怒られたらどうしよう」と周りの目しか考えていなかった。他にも、自分の大好きなものも封印して頑張り続けるのが悲しくてしかたなかった。そんなときパニックになっていた私に母は「ほのかなら大丈夫だよ。受験終わるまで、とりあえずがんばろう！ 周りは気にしないでいいんだから」という暖かい言葉をかけてくれた。

私とは違う冷静で落ち着いている性格の母だからこそこの言葉がとても当時の私にはありがたかったのだ。これらのことを経て感じる母の魅力は、私がパニックになっているときに寄り添ってくれて私のやりたいことを尊重してくれるところだと思った。私は今回の取材で、これ以外の母の魅力について迫るために母を取材しようと考えた。

インタビュー決定まで

お母さんは家のことをほとんど終わらせて、寝室のベッドでくつろいでいた。私はそのタイミングを見計らって、母に「明日のお昼、総合学習の課題の取材してもいいかな？」と聞いてみた。すると母に「えー私なにも言えないよー(笑)」と言われてしまった。もっと快く受け入れてくれると勝手に思っていたから、とても焦った。困った私は根気よく、「そこをなんとかおねがいます…」と何回も頼んだ。やつとの思いで母から取材許可を得ることができたのだ。

取材概要

日時 2023年8月8日 14時40分～15時15分

場所 自宅のリビング

取材した方 母、新名咲季さん

自分との関係 親子

取材が始まるまで

母は自分以外の家族のお昼ご飯を用意していて、遅めにご飯を食べていた。その間に私は総合のノートと筆記用具を準備して、前日までに考えておいた質問を見返しておいた。実際に質問をしていて、思ったとおりに会話を進めていけるか少し不安だった。母は特に緊張しているような様子もな

く、いつも通りだった。それを見ると、自然と私も気持ちが悪くなったような気がした。

家族想いの母

母がご飯を食べたあと最初の質問を試みた。質問内容は、毎日家の事をしているかというものだ。なぜこの質問をしたかというと、毎日家族に関わることをやることに對してどう思っているのか知ること、私が取材前に考えた魅力の他にも、違う魅力を引き出せるかもしれないと思ったからだ。

私「最初になんだけど、お母さんは毎日家のことやっててどう思ってる？」

母「しんどいよね」

私「ですよ。じゃあ毎日しんどくても続けられる秘訣とかありますか？」

母「うーん…。やっぱり自分のことだったら多少手抜いてもいいかなってなるよ。しかも毎日はいんどいし。でも家族のことになると違うよね」

自分のことより、他人のことに多く力を注いでいて、優しいなと思った。

私「なるほど。家族が一番大事ってことですね」

母「そりゃね。大事だから、やるしかないよね(笑)」

私「なるほど…。ありがとうございます」

「大事だからやるしかない」という言葉がとてまかつこいと思った。人のために何かするのは大変なことだとわかってはいたが、それを当たり前のようにできる母の家族愛は偉大だと改めて実感できる質問だった。

動機で感じた魅力についてさらに掘る

次に、動機の時点で私が元から感じていた母の魅力についてさらにせまるため、2つ質問をした。また、今回私がその質問をしたきっかけを母に初めて伝えてみた。

私「次、行くね。私、受験期にすごく勉強のこととかで伸び悩んでたやん？ その時、焦ってた私にお母さんがかけてくれた言葉がすごく助けになったんやけど、そのことも含めて日常からお母さんって落ち着いてんなーって感心しててさ。だから質問なんだけどお母さんはなんでそんなに冷静でいられるんですか？」

母「性格だとは思うけどね(笑)それに自分も内心はビクビクしてるよ。でも強いて言うなら、色んな選択肢を出すようにしてるかなー。これが駄目なら、違うのをやろうとか考えてるようにしてる

よ。だからはたから見たら、落ち着いて見えてるのかも」

聞いていると、母と私の違いがなんとなくわかってきたような気がした。私はいつもハプニングが起これるとパニックになってしまうし、次の対策をすぐには考えようとしない。だけど母はただ性格が穏やかだから落ち着いているだけではなく、考え方が前向きだからそう見えていることにハツとした。他にも、お母さんも外にあまり出さないだけで本当はビクビクしたりするんだと本人から聞いたことで、さらに親近感がわいた。そこで次は、そのことについて気になったから母に質問することにした。

私「じゃあ次の質問なんですけど、さっきお母さんも焦る瞬間はあるって言ってたやん？ それってどういう時？」

何かハプニングがあっても、母は「どうしようかなー、（笑）」とあまり焦らずに対処しているから焦っている時がほとんど想像できないからだ。

母「子供の提出物の期限が危ない時とか？ 私が見れてなかったのも悪いけど…。うーんやっぱり子供が焦ると自分も焦るかなあ。だから、子供に関することだよね」

私「じゃあ、私の受験シーズンの時も焦った？」

母「いやーそこまで焦ってなかったかな」

私「なんで？」

母「そりゃ受かったら嬉しいよ。あんまり言いたくないけど…もし受からなくても良い経験になればいいかなって思ってたから。あと、ほのかなら絶対受かるって信じてたから。だからあんまり焦ったりはしなかったかなー」

私「なるほど。ありがとうございます」

最初の質問でも母は「家族」を大事にしていた。この質問からも「家族」を大事にする母を改めて感じられて、どこまでも家族を大切にする母の姿勢がとてもすごいと思った。それに、母が私を信じてくれたことに、うれしくなった。最初、焦っていなかったと言われた時は一瞬「受験についてどうも思ってたなかったこと？」と不安になってしまった。だけどその背景に私に対する信頼があり嬉しくて、なんだかホッとした。

取材を終えて

取材を終え、私は母の魅力についても一度考えた。ひと言でいうと「家族愛」だ。今までは、「母親だし、子供たちや家族のことは好き」と無意識のうちに思っていた。でもインタビューを進め

ていくと、それがより感じられてきて母の魅力が「私のやりたいことを尊重してくれる・ピンチの時に寄り添ってくれる」だけではなく、それを含めて「家族愛」という大きいものに変わっていった。

また、二つ目の質問で新しく感じたことがあった。母の良いところは、物事に対する対処法が前向きなところだと思った。実は、私はハプニング時の母の状態に対し、少し違和感を感じていた。なぜなら私ばかり焦ってしまって、母は先ほど話したとおり、あまり焦らないからだ。それが羨ましくもあり、「なんでお母さんはいつも平然としているの?」とよく疑問に感じていたのだ。だけど今回のインタビューから、母の色々な選択肢を出して未来に備えていく前向きな思考を知って、この思考のおかげで母は焦らずにいられるんだなと腑に落ちた。今まであった疑問を解決することができてすっきりしたし、母の新たな良さにも迫ることのできた取材だった。

この取材を終えて、母に対するありがたみや、母に感じていた魅力をこれまでより多く知る事ができた。自分より家族を最優先にする優しさや、ピンチ時の対策を焦らず練れるところなど、生きるうえで必要なものをもつ母の強みを感じられた。そして上手く生活がおくれる技を学べたような気がする。今回の機会を生かして、これからの私の人生を少しでも良いものにしていきたい。



夢は後からでも叶う

聞き手 関口春歌

パワフルな祖父にあこがれて

今回は依頼したのは母方の祖父だ。祖父は控えめに言ってもパワフルだ。

祖父は現在75歳で10年前に定年退職しているが母が言うには、「現役で仕事をしていた時と同じぐらい忙しくてしている。」と言っているし、父は「あんな老後の過ごし方が出来るなんて羨ましい。」とよく話している。祖父の家に遊びに行っても出掛けていたり、例え家に居たとしても色々な電話が掛かってきて対応に追われていることも見慣れたことだ。

いつも大きな声でお喋りし大きな笑顔と大きな笑い声で面白おかしく日々の事を話してくれる元気いっぱいな祖父がどういった人生を送って来たのか、どういった流れで今のような活動をするようになったのか私も母も詳しくは分からないので、私は今回、私の祖父では無いまた違った側面の祖父を知りたいと思った。また祖父は踊りが好きでそれを使って病院の小さな子供たちや動くことのできないお年寄りのもとでボランティア活動をしている。そのことについても聞いてみたい。

日程の決定

祖父とは普段より「」のやり取りをしているが、今回の取材依頼にあたっては直接電話で取材目

的を伝えた方が分かり易いし日時なども決められたと思い電話をかける事にした。

しかし祖父は外出中という事で帰宅後に折り返し電話してくれる約束をし、電話を切って、電話を待つ事になった。

夕方に祖父から折り返し電話が掛かってきた。改めて祖父に取材依頼をするのはなんと無く恥ずかしかったが「魅力的な人に取材する」という学校の課題があり、祖父に取材協力して欲しいと伝えと「そんなんお安い御用やで。じいちゃんは取材もいっぱいされてるから慣れたもんや。なんでも聞いてや〜。」といつももの明るい調子で返事が帰ってきた。

いつが いいか聞かれたので、8月16日から一緒に東京旅行に行く約束をしていたのでその時にお願いする事にした。

取材の実施

新大阪発10時33分発の新幹線に乗車する予定で、祖父達とは9時に難波駅で待ち合わせしていたが静岡県で大雨警報の為新幹線が運休状態となった。

そのうち新幹線が運行されるだろうと皆んなで駅周辺でショッピングをしながら時間を潰す事にしたが、正午を過ぎても運転再開されず、今日の原宿観光は無理かなと思いついた頃に、宿泊先のホテルで夕食後に約束していた取材をこの待ち時間を使って行うのはどうかと祖父に聞いてみた。すると

祖父は「それはいい考えや。何時に着くか分からんし今時間余ってる間にしよか。丁度コーヒーも飲みたいしな。」といつもの元氣な調子で答えてくれたので、私は祖母と従姉妹にも伝え4人でコーヒー店に移動する事にした。

コーヒー店は混雑していたが少し並んで祖父はアイスコーヒーを私はアイスロイヤルミルクティを祖母と従姉妹はアイスルイボスティを注文し席に座る事ができた。

「本当だったら原宿に着いてる頃なのに」と私と従姉妹がボヤくと祖父は「ホンマにえらい目にあつたわ。まあこれもいい思い出やな。」と長い待ち時間にうんざりしているようだが、この状況にも不満は無いように大きな声で笑っていた。

祖母と従姉妹がルイボスティを飲み終わると自分達が居たら邪魔になるからと退席しようとしたら「遠慮せんとじいちゃんのええ話聞いといてくれていいねんで。」と豪快に言ったが従姉妹は「そんなん要らんわ。遠慮しとく。」と笑って祖母とお店を出て行った。

祖母と従姉妹が離席し、祖父と二人になると孫と祖父の関係からインタビューと取材対象者になるのかと急に恥ずかしくなってしまう、無言で飲み物を飲んでると祖父の方から、「なんでじいちゃんを取材対象にしようと思ってくれたん？学校からのプリント読んだけど魅力的な人やから？」と冗談を言う時のように笑って話しかけてきた。

祖父が硬い雰囲気と和ますように話しかけてくれたので、私はハツとしてこちらが依頼した取材なんだ。恥ずかしがって居てはいけないと取材を進める事にした。

私が知らない祖父は

私を知っている祖父は私が生まれてからの十四年間のほんの一部だから、まずは祖父の生い立ちから尋ねてみる事にした。

私「まずは子供の時ってどんな感じやった？」

祖父「中学入るまではよく病氣してて、身体はあんまり丈夫って事無かったわ。でも中学入る頃には病氣もほとんどせんようになってきてな。それから今でも健康そのものや。」

子供の頃は体が弱かったとはなしているが祖父は私が生まれてから体調を崩したことは聞いたことがなく意外な一面だと思った。

私「大学生活は？どんなんやった？」

祖父「大学はスキー部に入ってたんや。楽しかったわ。」

私「その頃って将来やりたい事とかあった？」

祖父「じいちゃん、学校の先生になりたかったんや。社会の教員免許持ってるんやけどな。大阪

とか和歌山の教員採用試験に受からんかってなられへんかってん。」

祖父の知らない一面がまた垣間見えた。

祖父の意外な過去の夢

私「先生になられへんてわかったときほかにやりたい仕事あったん？」

祖父「そこやねん。それが今の活動につながるねん。じいちゃん芸人になりたかってん。」

私「芸人?! 社会の先生から芸人ってふり幅すごいなーなんで芸人にならんかったん？」

祖父「やっぱりなあ、食べていけるか心配やったしなあ。」

私「だからサラリーマンになったん？」

祖父「そうやねん。まあ安定を取ったんやろな。」

少し祖父の声のトーンが下がったような気がした。

私「でも、定年退職まで43年間勤めたんやろ? 途中でやっぱり先生の採用試験受けたとか芸人になろうとかって思わなかった?」

祖父「それは思わなかったわ。仕事したら楽しかったんやわ。情熱が湧き上がって来てな。」

また、いつもの祖父のテンションになった。

祖父「仕事にやり甲斐感じたら全然、もう一回先生になろうとはおもわなかったわ。」

そう言っている祖父は現役時代を思い出しているのか懐かしそうなうれしそうな表情を浮かべていた。

祖父「仕事定年したときはなあ、やっぱりちょっと寂しかったけど、定年する4〜5年前には今みたいにボランティア活動初めてたから、そっちに集中出来るなっと思ったわ。」

夢は続いている！？

私「ボランティア始めたきっかけって何？」

祖父「それがな、サラリーマン時代に単身赴任で和歌山に行ってたんやけど、そこで地元の人から誘われて地域に馴染めるようにとお祭りに顔出してる内に盆踊り踊るようになってん。それまで踊った事無かったんやけどな。盆踊りにハマってしまっただけ。それで単身赴任終わって大阪に戻って来ても盆踊りあったらどこでも踊りに行ってたんや。」

私「単身赴任してたん!? 知らなかったわ。盆踊りのシーズンじゃない時は何してたん？」

祖父 「盆踊りってな、一年中どこかでやってるんやで。じいちゃんもそれまで知らなかったんやけどな。踊ってるうちにいつも会うメンバーで話するようになって、その中の一人がボランティア活動で老人ホームに踊りに行ってるから誘われたんが始まりや。」

私 「盆踊りって夏だけのイメージやったわ。それだけボランティアをつづけられる秘訣とかがってあるん？」

祖父 「秘訣なあーやっぱりな、行ったら喜んでくれるし待ってくれてるねん。みんな笑ってくれるから楽しいしやり甲斐あるで。だから芸人になりたかったって、さっき言うたやろ？それが定年後に出来てるって事やねん。夢ってな、なりたいてって気持ちがある限り続いてるんやで。」

そういった祖父の顔は「人生に間違いなんてない、ちょっと遠回りしただけや」と笑っているように見えた。

その後2泊3日の旅の間ずっと笑顔で明るい祖父だったがそこには過去の努力や経験が詰まっているのだろうと考えずにはいられなかった。

取材を終えて

今回の取材を通して、私がほとんど知らないサラリーマンとしての祖父の話をきけて孫として成長できたみたいなどころももちろんあるけど、「おじいちゃん」じゃなくて、人生の中で受験とか就職

とか退職とか私よりもたくさん経験している1人の大人に色々なことを聞いたことで自分の未来が少し見えやすくなった気がした。

進路の話では教員免許を取っても先生にならない人もいると知ってすごく驚いたし、そんな時に挫折するのではなくて、すぐに新しいなりたい職業を見つけてそれが自分の人生にどう影響してくるのか考えて自分で答えを出すってそう簡単にできることじゃないし、その選択が正しいのか悩んだりすることもあったと思う。

けどその中で仕事にやりがいを見つけて43年も続けるって正直私は無理かも知れないって不安だ。でもまだ時間があるから自分が就きたい仕事につけるように今のうちからいろいろ頑張りたい。ボランティア活動とか一度皿回しを見せてもらったことぐらいしか記憶にないけど、私の知らないところで祖父は誰かを元気づけているのだなと思ったら、私もすごく嬉しかったし私も周りからそんなふうに思われる人になりたいと思った。

そして、今がむしろ夢に向かって頑張ることはもちろん大切だけど、それでもうまくいかないことがある。けどどんな挫折があっても人生を長い目で見たときに無駄なこととは何もないということにも気づかされた取材だった。

あとがき 語りが生まれるとき

授業担当 山崎勇氣

高校生の頃、ある冬の日の夕食後だったと思う。自宅のコタツでミカンを食べていたときに、なぜだか母の高校時代の恋愛話になった。

別に大それたドラマがあったわけではないし、とくべつ面白い話だったわけでもない。ただ母は、自分がフオークソング部に所属してギターを弾いていたことと、「そんなときな、付き合ってた人がおっくん」とだけ語った。私はといえば、「ふうん」と適当な相槌を打ったりして、それ以上は深く追及しなかった。

BGM代わりにつけたテレビのバラエティ番組では、タレントが下らないことを喋って大げさに笑っていた。その後、今日にいたるまで、母の恋愛話が話題になったことは一度もない。

地元の茨木市に、長く続く模型店があった。好々爺然とした店主の親父が、いつもカウンターに座っていた。私は何か買いに行くというよりも、その親父と喋りたくて、学校をサボっては店に通った。

彼はあまり自分の過去を語らず、もっぱら模型製作技術の話題が多かったのだが、ある時、過去の出来事を語ってくれたことがあった。戦時中、近所の茨木高校が、外壁を真っ黒なペンキで塗りつぶし、屋上に高射砲陣地を築いていたのを見たこと。戦後何もモノがない中、有り合わせの木材を使い、飛行機や艦船の模型を作ったこと。スポーツカー好きの客が親の介護のために愛車を売却し、それに泣かされたこと。

その話をして以降、彼が再び自分の過去を話す機会はなかった。私も就職して忙しくなってしまう、もうあまり、模型店に顔を出すこともなくなった。何年か経ったあと、彼が店を畳んだことを風のうわさで知った。

あの時の感覚を、いまでもたまに思い出す。

長崎県の離れ小島で生まれ、十八歳までを島で暮らし、大阪の看護学校に進学した母。見知らぬ街で、新たな人々と出会い、子を生み育てた母。彼女にも、私と同じく高校時代があり、付き合う相手がいいた。

戦後に小さな模型店を開業し、地元の模型愛好家の人生を見届けてきた、店主の親父。創業六十年の節目で、高齢を理由に店を閉じた店主の親父。彼は長い年月をひとところで働いて、街の人々と関わりながら、最後は仕事人生に幕を下ろした。

なにも特別なドラマなどなく、偉業もなさず、ただ自分の人生を送る人々。誰もが、どこまでも普通で、ありふれた人生を送っている。

たったそれだけのことに気が付いた時、目の前にいる人々がまるで違う人物のように見えはじめた。

たまに挨拶する近所のおばちゃんにも。苦手だった数学科の教員にも。散歩中に会う、丸い眉毛をした、よその家の柴犬にも。どのような相手であっても、いまこの瞬間、私という存在の目前に立ち現れるまでに、その人にしか語り得ない、ありふれた人生があった。

彼らが自分のことを語る。私はその語りを聞き、彼らが生きた年月に思いを馳せる。たったそれだけのことで、自分の中で何かが変わった気がした。何もない自分にも、何かを語ることができそうな気がした。

何が変わったのかはわからない。あの頃の私に、何が語れたのかもわからない。ただそれは、「何者かでありたい」「何者かにならなければ」と必死になり、やりたいことを探し、難しい本を読んでもがいていた当時の私を、少しだけ救ったような気がするのだ。

ときに、この作品集がどのような経緯で発行されたのかを記しておく。

本稿は、清教学園中学校74期 2023年度 中学2年「総合的な学習の時間」における成果物をまとめた作品集である。授業の名称は「身近にいる魅力的な人に取材する…お互いがはみだしていく経験」。その名称の通り、「魅力的な人物」を生徒自身が検討し、その人物の魅力に迫る取材を実施し、記録に書き起す、という趣旨である。

授業は次の三つの局面に分けることができる。最初に、取材相手を決め、動機を検討する1学期（8回）。次に、実際に取材し文字に起こす夏休み期間。そして最後に、推敲しながら原稿を完成させていく2学期（5回）。いずれの局面でも、黙して執筆する時間と、生徒どうしが互いの原稿について議論する時間を交互に取り入れた。

指導に関して、担当教員である山崎・南との間で、事前に取り決めたことがあった。それは、我々教員が作品の「よさ」を方向づけないことだった。たとえば今回、取材相手の選定や、取材内容の検討について、教員による助言は極力避けた。また、生徒が書いた原稿については、草稿・完成稿のいずれにも、添削指導を行っていない。その理由は、生徒が「じぶん自身の言葉で語る」ことを重視したからだ。

文章を書けない。作文が苦手である。こういった生徒が多く存在する状況は、中学3年で自らテーマを決め、卒業論文を執筆する清教学園中学校において、長年の指導上の課題だった。だが、生徒の苦手意識の根底にあるのは、単に作文のスキルや能力の問題ではなくむしろ、自由に書いて表現できない、じぶん自身の言葉で語ることができない、学校の作文課題の設計に問題があると感じていた。

この実感が、「教員による指導を極力避け、テーマも自由に書かせて、生徒どうしの相互評価に任せる」ことを是とした、本実践の在り方を方向づけた。論理的文章を書く前に、まずは作文に書き慣れ、じぶん自身の言葉で語るトレーニングの一環である。

作品集完成は、ひとえに生徒が「魅力的であるとはどういうことか」というたいへんな問いに、果敢に挑んだ結果だ。生徒どうしの議論では、相手の原稿に対して、次のようなツツコミが常に飛び交った。

「あなたはなぜ、その取材相手を選んだのか」

「あなたにとって、その取材相手は一体何なのか」

「あなたが語るその人の魅力は、本当にその人自身の人格に迫るものなのか」

社会ではともすれば、役に立つか立たないか、優秀かそうでないかで人が評価される。学力競争の荒波に揉まれる本校においても、その傾向は同様にある。しかし1学期の授業を通じて、「魅力」という言葉を基準に取材相手を検討した生徒は、役立つか、優秀か、という評価基準を次第に捨て去っていった。そして学期の最後には、「よくわからないけど、魅力的としか言いようがなく、自分にとって大切な存在なのだ」という、元も子もない結論に至った。

夏休みの取材では、その「よくわからない魅力」に迫るわけだが、それが成功しているか否かは、それぞれの生徒作品を読んで判断して頂きたい。

本実践で参考にした先達の授業実践を挙げる。深谷による実践「カキナーレ」（注1）は、本校の一連の作文カリキュラム構築において、重要な先行実践例となった。テーマ、文体、分量、虚実を問わず、ペンネームによる生徒どうしの相互評価を重視するユニークな取り組みは、現在の中学生にも十分通用している。また、細川が実践し、牲川がまとめた、早稲田本庄高等学院『日本語表現総合』（二〇〇〇年度）での授業（注2）は、今回の取り組みで直接参考にした。魅力的に感じる人物の検討と取材、生徒どうしの議論を通じて、「わたしが語る言葉」を獲得していく当時の高校生たちの様子は、暗闇の中で新たな授業実践に取り組もうとする我々の希望だった。先立つ授業実践者に感謝申し上げたい。

加えて、本実践に影響を与えた著作も紹介する。松村が『はみだしの人類学』（注3）で論じた「はみだす」という自己・他者観は、本実践でも参考にし、授業のテーマに据えた。

同著は「わたし」と他者との間にある差異を受け入れ、互いに「わたし」の輪郭からはみだしあい、つながり、変容しながらともに生きる方法を示した。生徒にとっては、取材相手はもちろん、互いの原稿に意見し合うクラスメイトもまた、「わたし」とは異なる他者であったはずだ。授業を通じて、彼らは「はみだしあう」経験ができたのだろうか。

また、岸による『大阪の生活史』（注4）との出会いは、生徒の原稿を作品集にまとめる大きな動機となった。同じくインタビュー集という点で、本稿編集作業の多くの部分でも参考にした。

同著は意図して、インタビューの語りのみをそのまま文字に起こして記録しているため、生徒自身の語りも重視する今回の授業実践とは趣旨が異なる。しかし、市井の人々が、市井の人々を相手にインタビューするという点では似てもいる。大阪の生活史プロジェクトが「150人が語り、150人が聞いた大阪の人生」である一方で、この授業は「149人が語り、149人の生徒が聞いたその人の魅力」だった。

私は同著を読んだ時に「これは面白い。すごい生活史だ」と思った。いま、この作品集の編集を終えて、やはり同じことを思う。「これは面白い。すごい作品集だ」と。

本実践の詳細な報告は別途資料にまとめた。また、各クラスの作品集は、清教学園図書館に収蔵され、貸出も可能である。合わせて参照頂きたい。

（注1）深谷純一（2021）『カキナーレ…若者の本音ノートを読む』東方出版 ほか

（注2）性川波都季・細川英雄（2004）『わたしを語る言葉求めて…表現することへの希望』三省堂

（注3）松村圭一郎（2020）『はみだしの人類学…ともに生きる方法』NHK出版

（注4）岸政彦 編（2023）『大阪の生活史』筑摩書房

あとがき はみだす・はみだされる経験

授業担当 南百合絵

あらためて彼らの作品を読んで、なんとも言えない気持ちになった。みんな本当によくやってくれたと、しみじみ思う。

山崎先生がこの授業をやってみたいと言い出して、本格的に考え出したのがちょうど1年前のいまごろ。勧められた『わたしを語ることを求めて―表現することへの希望』を、線を引きながら夢中で読んだ。こんな授業ができるといいなと胸が熱くなったと同時に、こんなことできるかな、と不安にもなった。が、山崎先生の「やってみよう」という想いが私にも伝染し、1年生のころからよく書いてくれた、この学年の子たちとならできるかも、という後押しもあり、中学74期のみなさんと一緒に、この「身近にいる“魅力的な人”に取材する」という授業をはじめてみることにした。

教員間で議論を重ね、準備して臨んだつもりだったが、実際やってみると反省と振り返りの繰り返しで、でもそこには大きなよろこびがあった。彼らがいろんな表情を見せてくれたからだ。作品であったり、議論の場での発言であったり、個人宛のコメントのなかだったり、様々な場面で彼らはこちらが言ったことをよく考えて、受け止めて、やってみようとしてくれていた。授業後には、教員同士でも互いの見聞きしたことを報告しあい、熱く語り合った。

そうして出来上がったこの作品たち。キラッと光る文章や表現がたくさんあって、そこにはそれを書いた彼ら自身の輪郭と、インタビューを受けてくれた相手の輪郭が見える。お互いが本音をさらけ出して、それを素直に記録しているから。

こちらは場を設定しただけで、「はみだす」という経験を、彼らは自身の力で経験してくれたのではないかと思う。取材報告がうまく書けなかった生徒もいるけれども、この授業に参加したこと、クラスメイトと同じ場を共有し、自身で「あーでもない」「こーでもない」と考えた経験も、「はみだした」ひとつの

経験である。いまは、それがなにか、どういった経験かなんてわからないかもしれないし、もしかすると、ずっとわからないかもしれない。でも、中2のこのときに、クラスメイトと、インタビュール相手と、教員と、文章越しにでもこうやって誰かと熱く語り合ったという経験は、あなたを形作るなにかになってくれるのではないかと思っている。

生徒作品集 2023

清教学園中学校 74 期 中学 2 年「総合的な学習の時間」生徒作品

語りが生まれるとき

・ 清教学園中学校 74 期 中学 2 年「魅力的な人に取材する」作品集 ・



2024 年 4 月 1 日 発行

著 者：清教学園中学校 74 期中学 2 年

発行者：山崎勇気・南百合絵

発行所：清教学園中・高等学校

〒586-8585 大阪府河内長野市末広町 623

TEL 0721-62-6828

<http://www.seikyo.ed.jp/>

印刷・製本：株式会社シンカ・コミュニケーションズ



本書はクリエイティブ・コモンズ・ライセンスを採用しています。原作者のクレジット（著者、発行者）を表示し、かつ作品を改変しないことを条件に、非営利目的での利用（転載、コピー、共有）が行えます。ご不明な点は清教学園までお問い合わせ下さい。